

スイス

チューリヒ・ルツェルン・ツェルマット
マッターホルン

北イタリア

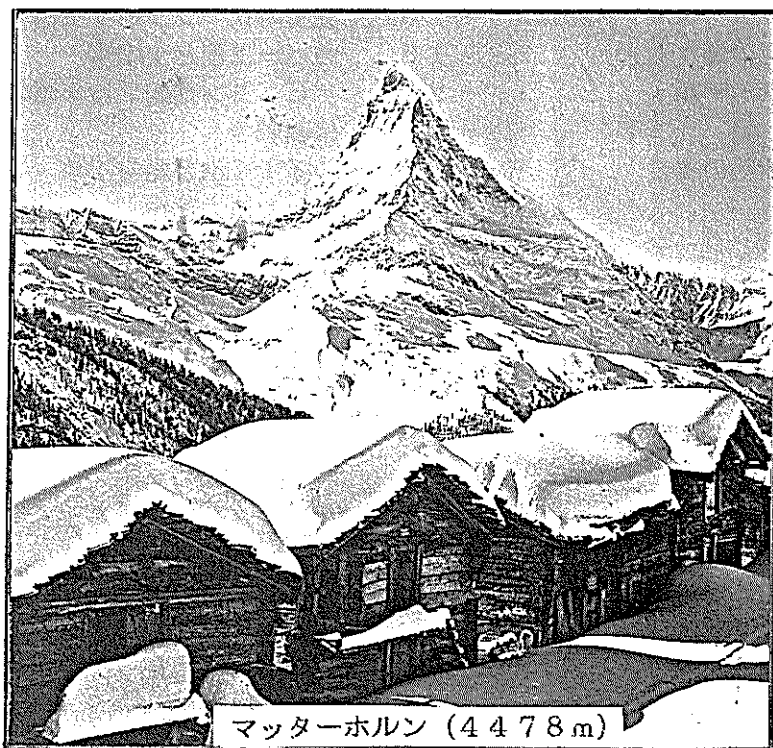
コモ・ミラノ・ヴェネツィア・
フィレンツェ・ピサ・ジェノヴァ

南フランス

ニース・モナコ・カンヌ・マルセイユ

パリ

紀行



昭和63年11月22日～12月4日

寺 前 信 次

スイス・北イタリア・南フランスの旅 目次

まえがき	1	11月27日	ボローニヤ	35
11月22日	スイスに向かう	3	フィレンツェ	概要 36
11月23日			同	観光 洗礼堂 37
バーレン～チューリヒ	3	シニョリーア広場	38	
チューリヒの概要	5	ウフィツィ美術館	39	
同	観光 6	ミケランジェロ広場	40	
宗教改革	7	夜の散歩	40	
スイスの概要	8	11月28日	ピサ	概要 41
スイスの紆余曲折の中立の道	9	同	観光 洗礼堂 納骨堂	42
神聖ローマ帝国	11	ドゥオーモ	ピサの斜塔	43
ルツェルンの概要・観光	12	ピサからフランス領へ	44	
峠を巡る旅	14	ジェノヴァ	44	
11月24日		国境通過	45	
マッターホルン～ツェルマット	15	フランスの概要	46	
11月25日	アルプスを越え	18	先史時代	フランク王国 47
伊国境の湖水地方へ	18	カペー王朝と十字軍	47	
ウィリアム・テル	21	アビニオン捕囚	百年戦争 48	
11月26日	コモ	22	宗教戦争	48
イタリア関係の概要	22	ルイ14世と絶対王政	48	
キリスト教	22	フランス大革命	49	
キリスト教とローマ	23	ナポレオン	49	
ローマ帝国	キリスト教の公認 24	7月王制と産業革命	50	
民族の大移動	24	パリ・コミュン	50	
東ローマ帝国	25	ベル・エポック	両世界大戦 50	
中世ヨーロッパ都市	25	11月29日		
十字軍	封建社会 25	コート・ダジュール	51	
ルネサンス	26	ニース	概要 観光 52	
メディチ家とフッガー家	26	モナコ	概要 観光 55	
ミラノ	概要 27	11月30日		
同	観光 28	ナポレオンの上陸地	58	
サンタ・マリア・		カンヌ	59	
デッレ・グラツィ教会	28	プロバンス地方	60	
スフォルツァ城	29	マルセーユ	60	
ヴァイトリオ・		同	概要 観光 61	
エマヌエル2世広場	30	12月1日	交通事故	入院 63
ドゥオーモ	30	12月2日	退院	65
ヴェネツィア	概要 31	新幹線～パリ	66	
同	観光 32	アルル	アビニオン 67	
サン・マルコ広場と寺院	33	12月3～4日	帰国の途	68
ガラス工場	温かい人情 34	あとがき	69	

まえがき

「日月は百代の過客にして、行きかう年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらえて老いをむかう者は日々旅にして、旅を栖とす」。これは芭蕉の奥の細道へ旅立つ時に詠んだ詩である。

元禄2年(1689)初夏、松尾芭蕉は弟子の曾良を伴って江戸深川を立ち、奥州、北陸路に旅立ってから明年は300年祭に当る。我が町に近い芭蕉ゆかりの那谷寺では、これを記念して盛んに宣伝していた。

私の体内に眠っていた旅心は誠に妙を得たりと目を覚まし、人生の最後に青春を求めようと、焦燥にかられて浪漫の旅へと出立を急がせたのである。

戦争という悲惨な谷間を渡り死と背中合わせの中に一生を得た私は、戦後は雲遊^{ヒン}萍寄^{ヒン}というか、雲のように浮遊し浮草のように寄宿して生き長らえた。今では人生を振り返る年齢に達したのも事実であり、これからが本当の人生だと思つて、真剣に生き方を考えるようになった事も事実だ。これからの人生には絶対に花は咲かない。しかし、深山の紅葉のように燃えて眼下の溪流に一陣の風と共に散ることも、美しく老いていく生き方である。

人命軽視症候群といった錐揉み状態の体験は、確かに人生観に重みを与えた。反面、激突の戦場は性格までも一変させて、万遊の引力に引かれるように晩年は遁走症候群に陥った。二進も三進も出来なかった戦いの悪夢の神経回線は逆にショートして、「烟火食も喫わず」といつた超然とした生き方となり、限度を越えた旅への暴走は今や歯止の機能が利かなくなつた。

15年前に3週間にわたって欧州12ヶ国を遠遊して以来、再度の訪欧の余裕はなく、漸く本年3月にモロッコへ飛翔した。その時スペインのバロセルナからグラナダ、ゴルドバ、セビリア及び地中海の太陽の海岸を遊行し、欧州の歴史の重みと文化遺産への憧憬が再燃したのであつた。勿論、願望は権利ではない事は充分承知である。

ルネサンスの発祥の地、北イタリアから南仏のコート・ダジュール(紺碧海岸)への想いは断ち難く、スイスの名峰マッターホルンを含めた観光コースの募集を見て、鳥(旅人)は木を択ぶことが出来るのだとばかり、機を逸せず申込んだのであつた。

白皚々の巍々として聳えるアルプスの偉容を仰ぎ、15年ぶりのチューリヒでは万感の想いが早鐘のように高鳴り、茫然自失の心境であつた。凛烈な寒気を浴びながら南下したルツェルン^{ルツェルン}はスイス連邦発祥地で、血がにじむような努力と連帯意識から永世中立への国是を築いた。其の歴史は細人の私でさえ往時の動乱時代を想起した。

誇り高く傲然と聳えるマッターホルンは嶄然とした独特の頭角を現わし、平和の曙光の満ち溢れた山気は世を蓋い、我が身の微小な存在を知つたのであつた。

箱根の嶮も及ばない羊腸としたアルプス越えから、変幻万化のスイス・伊国境に広がる湖水は均斉のとれた美観を競っていた。アルプス山麓のミラノはイタリア経済の中心地で、ゴシック様式の教会がそそり立つ景観は、一世を風靡した盛美を誇り、歴史的な魅力は世界の視線が集中している。

水の都ベネツィアは栄枯盛衰の歴史を重ね、今もなお栄耀^{エー}栄華^ーな姿を残していた。しかし冬期の昼間は短くて夜の観光にとどまった事は残念であつた。

ルネサンスの花が開いたフィレンツェは数え切れない文化遺産で埋まり、中世に眼

を奪われた魅力は興奮の連続で、爛熟した芸術を堪能したのである。

子供の頃から垂涎の的であつたピサの斜塔は、やがて倒壊する運命にあるものの、崩壊前に見学できた喜びは一入で童心にかえっていた。

仏領コート・ダジュールの紺碧海岸の気候と美観は、厳然と老化が進む我々に余生を楽しめと暗示を与えていた。美しく老いることは至難なわざだが、天地の恵に感謝しながら老春を楽しみたいものである。四季を通じて花の絶えることがなく、世界各国の観光客を引き付けるニースは、自然を友として暮らす生き生きとした溫柔郷の感がしていた。本当に人生は夢のある時間で満たすことが、長寿の秘訣ではなからうか。

世界第2の小国モナコもまた久恋の夢の地の一つで、束の間ながら別荘に行ったような気分を味わい、金玉満堂の浮き世の夢を見たのであつた。

エルバ島を脱出したナポレオンが隠密に上陸したカンヌの地は未だ彼の魂が宿っているようで、波濤万丈の戦場を潜った私は何時までも感傷の虜になつていた。

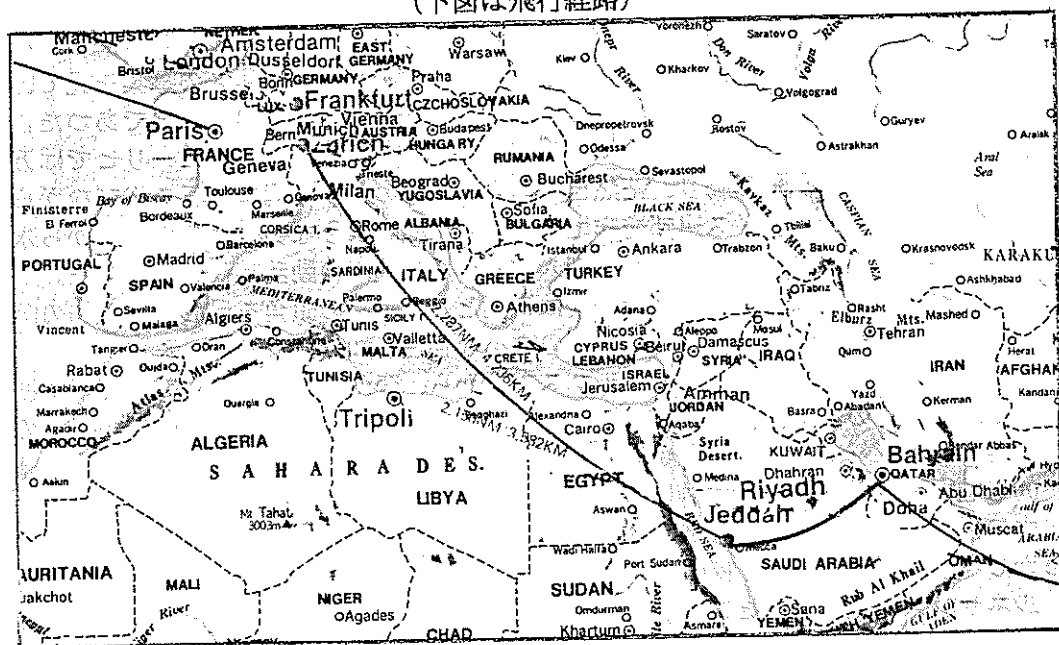
フランス革命の時、マルセユの市民軍がパリへ進軍し、その時に叫んだ歌が国歌となった港町は、今も凜然として活気が溢れて自然のうちに歴史を感じるのであつた。

12月1日の早朝、私は人智の及ばない不慮の交通事故に遭遇して入院した。暴走族に悲憤慷慨したものの鵬程万里の彼方では如何ともできず、性懲りない旅路への警鐘だと善意に受け止めていた。万雷一時に落ちたような事故にも拘らず生を得たことは、娑婆は未だ私を見捨てず、我が貸借対照表にプラスの残があつたのであつた。

人間は誰しも死に直面するまで実感が伴わず、死に直面して始めて生の厳肅を悟るものだ。これは莞爾として戦った激戦場の体験である。人間は棺を蓋つて定まるといふが、交通事故で生命を捨てては棺を蓋つても定まらない。

火打ち石の光が消えるほどの短い人生は自然の変化に身をまかせ、天から与えられた運命を楽しんで生命の尽きるのを待ちたい。今次旅行も運命の糸に操られた感じの旅だったが、落穂期を迎えた体験を血肉化して拙文を綴り、後日の参考にしたい。

(下図は飛行経路)



11月22日 (火) 晴 スイスに向かう

無能のまま年老いて犬馬の齢となつた昨今は、旅立つ前の楽しい気分も湧かず、大空に招かれるように15・00大阪空港を発ち、17・00ソウル空港に着陸した。

世界注視のソウル・オリンピックは成功裡に終わり、空港ターミナルは見違えるように拡張され、現代建築の粋を結集した豪華なものとなつていた。隣国として誠に喜ばしい事である。此処で初めてチューリヒ便が南廻りだと知らされ、長時間の搭乗を考えると稍々うんざりであつた。

ソウルを20・00に飛翔し、機内放送はバーレンまでの飛行時間は11時間30分、バーレンからジッダまで2時間、ジッダからチューリヒまで5時間と放送した。時代の進歩は速く以前よりも5時間ばかり短縮され、鎬を削る各社の努力と大韓航空の飛躍は驚くばかりだ(2頁地図参照)。

奔流のように飛び立った搭乗機は矢玉のように宙を走り、名月が皎々と夜空を照らして遊星群を曳きずるようであつた。観光のオフシーズンのために空席が多く、夜は日の余り、睡眠第一と四つの座席を占領して体を伸ばした。南廻りは10年前のエジプト旅行以来のことで、オーマンやアラビヤ砂漠が臉に浮かび、忘憂の気分とはいえ人生航路の加速度を再認識したのである。

熟睡から目を覚ましたペルシャ湾上空は、夜の帳りが遮って下界は真っ黒であつた。今日の此の世は幾百億の骨髄を踏み越えて造った尊嚴な世界だが、8年間に亘るイラン・イラク戦争の血の臭いが、至る所に立ち籠めている感じがしていた。宗教的、民族的な猛け狂つた感情から、武力に訴える事は断じて許してはならない。戦争によって隣国を不義に征服するよりは、平和のうちに良い隣国を持つべきだ。

20世紀の終わりに近づいた現在、前世紀的な発想は前途多難な中近東の破滅に過ぎず、我々が先ず第一に訪れるスイスを見習ってほしい。七転八倒の苦しみから永世中立をかち取ったスイスの歴史を繙けば、世界文明発祥の地の彼等は「殷鑒は遠からじ」と悟ってほしい。鑒とすべき先例は遠くに求めなくともスイスにあるのだ。

バーレンに接近したのか、油田の煙突に赤々と燃える炎が望遠され、搭乗機の主翼とエンジンの投影だけが微かに天空に映っていた。

11月23日 (水) バーレン～チューリヒ

バーレン着は現地時間の午前1時30分で気温19°Cである。給油のために案内された待合室には、ターバンを巻きアラブ服を纏った姿が見えて懐かしい。中近東に無知であつた我々戦前派も、戦後はガソリンの臭いの中に生活し、人生の哀歓に出会いながら曲折の旅路を歩んだことが、彼等に好奇の目を向けるのであつた。

2時30分に離陸してジッダに向かった。浮き草のように空中に浮かぶ機はアラビヤ半島を横断し、星体が運行する宇宙を考えると自然に冥想に耽けるのであつた。世界の歴史は政治の歴史である。政治が世界を形づけている事を考えると、政治家の良否は世界の浮沈にかかっている。そして勝利の陰には必ず敗北があり、平和の歴史の

陰にも必ず戦争の歴史があつたが、その愚を除くことが各国政治家の最大の責務だと。

ジッダ（2頁地図）は紅海に面した「メッカ」の外港の位置にある。石油資源に恵まれた町全体が王宮のように照り輝き、照明が月光と競っている情景は100万ドルの夜景であつた。石油価格の低迷と云いながら不夜城の明かりは砂漠のオアシスで、税金のいらぬ世界的羨望の的である。

乗客の多数を占める韓国人はバーレンとジッダで降機した。彼等は商社マンか技術者だろうか、韓国経済の飛躍的な発展を象徴して先進国の我々の眼を刺激していた。

5時に到着した搭乗機は黎明を迎えて再び飛び発った。ジッダの照明も次第にあせて紅海のブルーの海岸線が見え出し、アラビアの薄黄色の旭が朝靄の上に昇り始めた。地球を包む靄は曲線を描いて赤味を帯び、満天に一点の雲もない紺碧の夜明けである。

スーダンからエジプトの大砂漠を疾駆するにつれて、堂々とした太陽は陸続と続く砂漠を照らし、平坦かと思えば起伏に富んだ地形は複雑怪奇であつた。緩やかに蛇行する大ナイルと兩岸の耕作地は唇齒輔車の関係を現わして、不毛地帯の生命を維持している。人間は生れながらにして大自然の季節と時代の流れを歩む運命にあるのだ。

砂漠上空を飛びながら私の脳裏に浮かんできたのは、英軍のオード・ウィンゲート将軍と宇宙飛行士であつた。アラビアのロレンスの異名をとつたウィンゲートは此の砂漠地で活躍し、その後ビルマのジャングルでは空艇部隊を指揮して、日本軍に大打撃を与えた名将である。一方、宇宙飛行士達は青い地球を眺めて神を感じたという話に感動したと同時に、人間性の回復を強調したいのであつた。

機はエジプトとリビアの国境を飛行して地中海を抜け、シチリア島に向かったが、変幻万化の天空は一変して白雲に覆われて、エメラルドの海原は瞰下できない。

空腹を訴える暇もなく1日6回にも及ぶ機内食には食欲もわかず、軽いフルーツだけでも鼓腹の状態だ。再び目頭が緩んで睡魔に襲われ、今日の強行日程を踏破のためにも横臥するのが上善の策だと眠りに就いた。

娘さんがスイス人と結婚するためチューリヒに赴く4人家族が、私の後部座席を占めていた。随分結婚に反対したが最後には親として諦めたらしく、国際結婚も時代の流れであろう。寸刻も早く娘さんの心境を理解してやるのが、最高の祝福ではないだろうか。私も心から祝福の言葉を述べたのであつた。

彼等の話ではチューリヒまでの往復運賃が13万円と聞き、驚くべき大韓航空の廉価に仰天した。我々の今次旅行は13日間で288,000という価格は半値に近く、安かろう悪かろうは承知の上で参加したが、採算のとれる原因が判明したのである。

チューリヒまで余すところ1時間半、下界に純白の銀世界が展開して我々の眼を刺激していた。峨々として聳える峰は雲を払い、祖霊を祀るようなアルプスは気品の高い秀麗さを隠さず、我々に夢を与え続けて応接にいとまがなかつた。（下の写真）

四方連衡の高嶺はまた険しい溪谷をつくつて鋭さを現わし、森羅万象に神威を感じながらイタリア・スイス国境を越えた。再び朦朧とした雲量が視界を遮り、千古の雪を頂く名峰も網膜に写らず、チューリヒ近しとのアナウンスを耳にして動悸が高まるばかりであつた。遙々八重の潮路と万里の山を越えてきた20時間の旅路は、漸く終わりを告げたのである。



チューリヒ

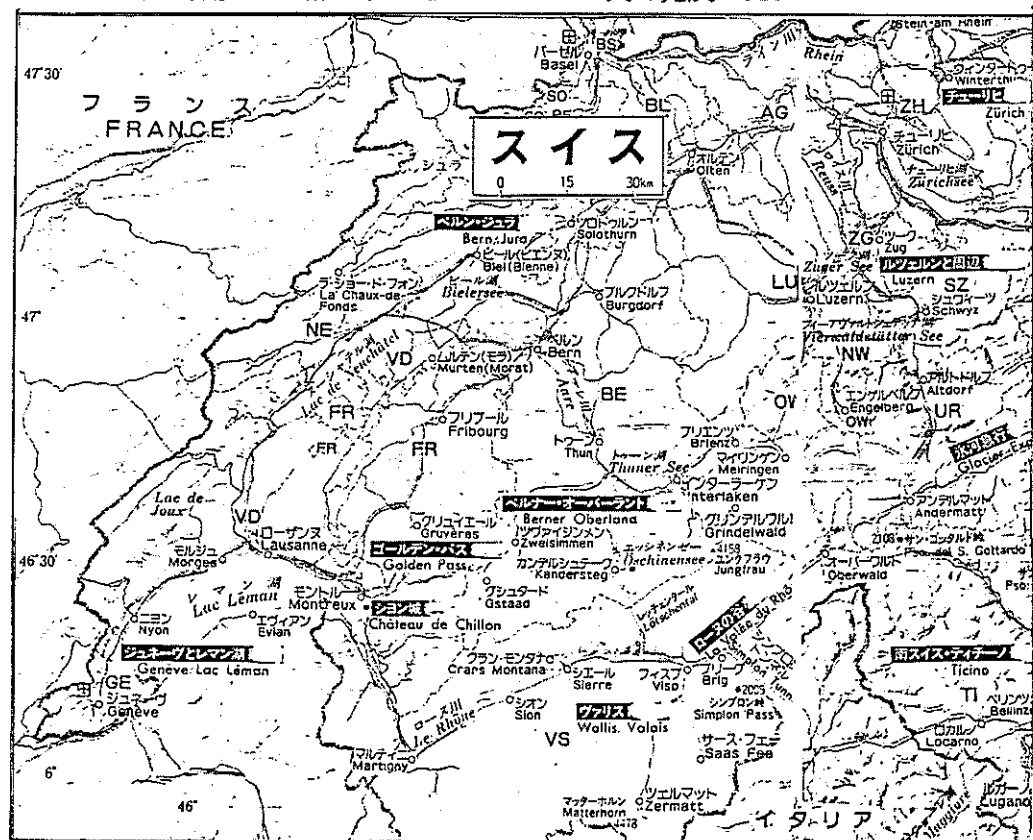
概要 (下はスイス地図で観光経路を示す)

スイスの概要は後記するが、ジュネーブをスイスの西玄関だとなるとチューリヒは東玄関に当るスイス最大の都市(70万)で、ドイツ語圏の中心地でもある。国際的な商業都市として世界の有力銀行の本店を先頭に350余の銀行が進出し、スイス経済の心臓部を形成して、金融業における世界の中心ともいえる。

チューリヒの最古の先史住民は、チューリヒ湖岸の杭上に立てた小屋に棲む湖上生活者で、後にケルト系(ドイツ西南部)住民が防備された集落を造った。チューリヒの名称は「水」を意味するケルト語のドゥールから出ている。

紀元前4世紀に城壁がめぐらされたが北からアラマンニ族の侵入を受け、更にその後にはフランク族(ゲルマン系)によって征服され、彼等は此処を王宮とした。カルル大帝の孫のフランク王ルードヴィヒは大修道院(現在のフラウ教会)を建て、自分の娘を修道院長に任命した(853)。以来代々の院長は広範な権限を得、王の代理人として町の政治を司ることになった。

このようにして教権が伸び町が政治的に発展すると共に、一方では商人が台頭し、彼等は1000年までに市場権を獲得した。こうして商人社会が発達したのは、此の町が湖の排水口に位置すると共に渡河点に当たり、又フランスと東欧、ドイツとイタリアを結ぶ交易ルートの交差点に在ったからである。特に絹工業によって大いに発展し、アルプス以北の数少ない絹の中心地の一つとして長く発展した。



1218年、チューリヒは神聖ローマ帝国（ドイツ）直轄の自由都市となり、1351年、貴族の市長ルドルフ・ブルンのもとにスイス同盟（詳細は後記）に加盟した。13世紀になるとチューリヒ市は修道院の権限が独立し、1400年には其の財力によって神聖ローマ帝国からも独立して、チューリヒ市は広い土地を支配した。

これがスイス同盟の他の諸州との摩擦を引き起こし、1436～50年の戦争ではオーストリアの支持を受けたが、他の同盟諸州に敗北した。

しかし、やがてチューリヒは市長に就任したハンス・ワルトマン（1436～89）のもとにスイス同盟の主導権を握り、モラーの戦（1476）でスイスを勝利に導いた。その後ワルトマンの独立的な市政のために農民の反抗を受け、彼は処刑された。

チューリヒは大聖堂の司祭であつた改革者フルドライヒ・ツウィングリの影響を受けている。1519年1月、此の地で彼が一連の説教を開始して、スイスの宗教改革（詳細は後記）の口火を切ったからだ。

チューリヒ市の宗教改革支持の歴史は、其の儘スイスの歴史であると同時に宗教改革の歴史である。宗教改革によつて市は大きな影響を受けて簡素な建物が増え、救貧や社会奉仕が強調され、政府の族長的な体制が強化された。

イギリスのプロテスタント（詳細は後記）やフランスのユグノーの避難所となつたチューリヒは、18、19世紀にヨーロッパ・ドイツ語圏の知的な中心地となり、学者や文化人が多く此処に棲んだ。

革命戦争でフランス軍に占領されたにも拘らず（ナポレオン軍の将マッセナが1799年に此処でロシア軍を打ち破った）、チューリヒは織物業のお陰で繁栄を続けた。1831年からは以前より民主的な憲法（1869年に完全に自由主義的憲法となる）を持つようになった。

振り返る

アルプスを越えたスイスは庭のようで、其の歴史も一つの物語だと思いながら定刻の10・00にチューリヒ空港に着陸した。奇しくも今日は大師講の朝である。15年前の思い出を蘇らす山紫水明の水郷に私の心に波が立ち、「年々歳々、花相似たり、歳々年々、人同じからず」の詩の通りの心境であつた。

溟濛とした雪空の薄い幕で一面はかすみ、どんよりと雲の垂れ込んだ空模様だ。アフリカまでも小雪が舞つたという58年ぶりの大雪らしく、約20cmの雪が積もっていた。木の葉を落とした荒涼とした山を眺めながら市街にに向かう車窓には、雪に覆われたプラタナスの並木が映り、紅葉に雪をのせた風情も格別であつた。

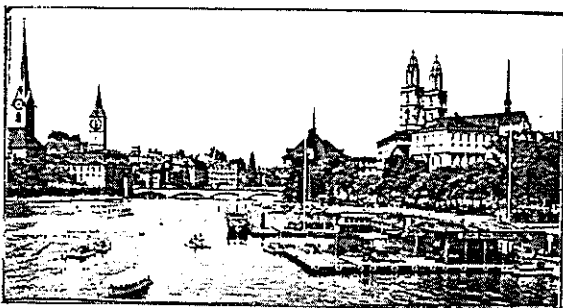
往き交う人々は寒さの為に贅沢な靴を穿き、道路は小砂利や塩が撒かれて滑り止めの対策が講ぜられている。紀元前にドイツ人が作った町は2200年の歴史があり、均斉の取れた美を競うような景観を呈していた。

湧き上がる霧の中に市街が姿を現わした。生々流転の15年目に再び眺める華麗な通りはクリスマス・ツリーで飾られ、苛酷な自然環境を克服する気迫が満ち満ちている感じであつた。

チューリヒ湖の水が流れ出ているリトマ川のケー橋でバスは停車した。川の兩岸には数百年を経た古い街並みが拡がり、宗教の街らしく教会の塔は高さを競い、水面に

投影する影も寒々しい感じである。

最初に案内された「フラウ（聖母）教会」は前記したルードヴィヒ2世が853年に建立した古い歴史があり、内陣の五面のステンドグラスはマルク・シャガール（1887生まれのロシア人画家）の作で、当時85歳のシャガールが1969年に製作した、聖書の世界のステンドグラスである。実に静謐で感動的な空間を飾り、殉教の人達は永遠の生命に入るように祈っていた。



フラウ教会の直ぐ北側にある聖ペーター寺院の内陣は、時間の関係で割愛されたが13世紀の建物で、16世紀に建てたロマネスク（ローマ）様式の塔にある時計の文字盤は、直径8、7mもある欧州最大のものである。

ペーター寺院前の橋上から眺める両寺院は、建物の壮麗と川の清流の美が適合して、粒々辛苦の歴史の魂が宿っている感じだ。

歴史を疎かにする国は滅びると云われているが、現代は古くから積み上げられた歴史の上にあり、些細なことにも尊い人間の歴史を見い出したいのであつた。

バスはケー橋の西袂にあるヨットハーバーに向かった。惘然として広がる湖姿に目をやりながら、暫く沈思黙考するような状態が続いていた。雪を覆ったヨット群は繫留されて湖上には舟の影もなく、往時に堪能した水の蒼さも網膜に写らない。

一羽のカモメも浮かんでいない湖の彼方にはオペラ座が聳え、懐かしい前回の思い出を懐古してチューリヒを後にした。（上は市街風景、下は市街地図）



宗教改革

旧来のカトリック教会の教義と制度を否定して、新しいプロテスタント（新教）をつくり出した改革運動である。其の先駆的な動きは14、15世紀にも認められ1517年、ドイツのルターが教皇庁による免罪符の販売を批判し、教会への不満は社会的な不満と結び付き、「ただ信仰によってのみ」を旗印に支持は広まった。

次いでスイスでもカルバンが運動を展開した。魂の救済は神によって予め決定されていると云う、予定説に基く厳しい規律の順守を目標に掲げた神政政治を実現させた。

一方カトリック側も反宗教改革運動で対応したため、欧州は17世紀半まで新旧両教徒が対立する宗教戦争に巻き込まれた。此の間、特にカルバン派を中心にプロテスタント主義は、新興の中産階級に禁欲的な勤労を説き、新しい社会体制建設に重要な寄与をした。

カトリック側は欧州の失地回復のため、イエズス会などの宣教師が海外に活発な布

教活動を展開し、日本にもザビエルが1549年にキリスト教をもたらした。

スイスの概要

スイスは峨々たる高峰の国

スイスは地図で見ると日本の四国と似た形をしており、関東地方に山梨県を加えた面積だ。日本は海に囲まれた島国で高く美しい山々に巡られているが、スイスはアルプスの3000m以上の峰が1506もあり、4000m以上の峰も40以上という。

日本最高の富士が3776mだがスイスの最高はイタリア国境モンテ・ローザは4634m、最低点のイタリア国境マッジョーレ湖の193m、差引は4441mだ。

狭いスイスに日本のような丸いなだらかな山が何千と収まる訳がなく、傾斜の急な峰が沢山寄り添っているから、これだけ多くの山が存在しているのである。

多民族・多言語国家

高い山岳地帯は一番遅くまで氷河時代の氷に覆われていた。氷河が後退すると旧石器時代に狩猟民族が移り棲んで、一部は湖の辺に住居を作った。

次ぎにケルト人が移り棲み、続いてカエサル（英語シーザー）の支配下となり、ローマ文化が伝わった。ローマ帝国の衰退した後、民族の大移動が起り西からブルグント族、北からアルマン族、南からランゴバルト族が今日のスイスに入ってきた。現在のスイスで西部がフランス語、北部と東部がドイツ語、南部がイタリア語が話されているのは此の結果による。

今日スイスの4分の3がドイツ語を、5分の1がフランス語を、その他がイタリア語を使っている。小さなスイスでも多民族・多言語国家で、しかも複数の民族と言語が平和的に共存している意味で、欧州の縮図の概を呈している。

小国スイスの内閣は7人いるが、4人がドイツ語、2人がフランス語、1人がイタリア語の地域から選出され、多数決の横暴を断固として拒否するスイス的な智慧が良く表れている。

スイスの建国記念日は1291年8月1日

スイスの中央に十字形の湖があり、フィアヴァルトシュテッテ湖（ルツェルン湖とも呼ばれる）と云う。「四つの森の土地の湖」といつた意味があり、ここがスイス連邦の成立の舞台となつた。

中世の時代、欧州中部のドイツ語の地域は神聖ローマ帝国（ドイツ）の名のもとに一大国家を形成していた。其の中で多数の王侯君主が力を競い合っていたが、アルプスの山中の「森の土地」では辺境で貧しい性か、住民の自治による社会を作っていた。

やがて峠の道路が開通し、欧州の北と南を再短距離で結ぶ峠道の開通によつて、湖と其の南側の地域が俄かに賑わい、商業交通の重要地点としての価値が認められた。此の土地に目を付けたのがオーストリアの「ハプスブルク家」であつた。

その危険を感じたシュヴィーツらの三つの地域の住民達は結束し、湖の南西のリュトリに代表者が集り、「神の意志の続くかぎり永遠に」と相互に助け合って自由と自治を守る誓いを立てたのが、1291年8月1日のことだつた。これがスイス連邦の起源とされ、8月1日が建国記念日として祝われている。

スイスという国名は、森林3州の一つのシュヴァイツの州都で、スイスのドイツ語の呼称シュヴァイツが起源となったという。

こうして誕生したスイスを我ものにしようとしたハプスブルク家が、騎兵隊を送って攻めた。14世紀に合戦が繰返され、スイスの歩兵が山岳地形を巧みに利用して勝利を重ねた。そうこうするうちに三つの地域の同盟に他の都市や地方が加わって、16世紀初めまでに更に5州が加わり、13州同盟となつて18世紀末まで続いた。

スイスの紆余曲折の中立への道

今でこそスイスは風光明媚な山の国で平和な永世中立国という名声をもち、しかも地球上で最も豊かで安定したGNPも第1位の国である。

そのスイス人が、ハプスブルクの軍勢を何度も打ち破って自信をつけた。(上記の記事より続く) 15世紀になりスイスは西側からも襲われたが、ゴルゴーニュのシャルル勇胆公の軍に対して、グランソンとムルテンで戦ってスイス軍は勝利を収めた。

此の戦いは1476年のことだったが、この勝利はフランス王の後ろ盾があつたからで、スイス人は自分達の力を過信した。此の結果、自分等の領土を拡大しようとしたのである。

1515年にイタリア北部でスイス人の軍隊が、大砲を持ったフランス軍にさんざんな目にあわされた。マリニャーノの合戦と呼ばれる此の戦闘の敗戦の教訓として、スイス諸州の同盟は武力で勢力を外に揚げね事を断念した。と同時に、外国の争いに関与しない態度もここから始まり、スイス中立主義が芽生えたのである。

その一方でスイスは周りの国々に多数の傭兵を送り出した。岩と氷河の多い山々は貧しい土地だから自給自足に適さない。それに、不自由な条件下で質素に生きる辛抱強いスイス人は、兵士としても大変有能であつた。

15世紀末にフランス王とミラノ公が戦った時、スイス人が双方に傭われて、スイス人同士が殺し合う事態になつた。然し乍ら其の不幸は直前に食い止められ、此のような事がスイスの中立化への道を進む理由の一つとなつた。

17世紀にドイツを舞台にして、キリスト教の2派が多数の国々の軍隊の入り交じる中で戦った。30年戦争と呼ばれる長い戦争でもスイスは中立と非干渉であつた。

この戦争の後始末をつける1648年のウェストファリア条約によつて、スイスは神聖ローマ帝国(ドイツ)から完全な独立を承認された。

その前の16世紀には、スイス国内でも新教と旧教とが激しく戦争をしている。スイスの新教徒の指導者としてチューリヒのツヴィングリと、ジュネーブのカルヴァンが名高い。この宗教改革時代以来スイス中央部の農村地帯が旧教、北部の工業地帯が新教の優勢な地域となつている。

スイスは中立国の利点を身にしみて感じた。戦争やその他の理由で祖国を追われた人々を迎えて、西部の時計産業、東部の織物業が起り、天然資源に乏しいスイスは加工産業に活路を見出したのである。

18世紀に入ると、これまで役立たずであつたアルプスの山々が美しいものと認められるようになった。アルプスは文学の題材となり、絵に描かれ、観光の対象となつ

て登山やスキーの時代が訪れたのである。

1789年に起ったフランス革命では、傭兵として宮殿を警護していたスイス人が殺されただけでなく、革命の余波、ナポレオンの台頭などによつて、スイスはフランス軍の侵入を受けるに至つた。

各地域の自治独立を特徴としてきたスイスは、フランスの干渉によつて「ヘルヴェティア共和国」という名の中央集権国家に衣替えさせられた。そしてフランスに対抗する連合国がスイスに入ってきた。オーストリアとロシアの軍勢がスイスでフランス軍と戦い、スイス自身も政治的混乱に陥つた。

スイスはナポレオンによつて有力な兵力供給源と見られたため、フランスは常時1万6千の兵を提供する義務まで負わされたが、それでも基本的には伝統である中立主義を頑固に守り通した。

ナポレオンが没落して欧州に平和が蘇えり、1815年、ウィーン会議に続くパリ会議で欧州の列強がスイスの永世中立を承認した。大国の利害関係がスイスを緩衝地帯にしておくという打算からであろう。ジュネーブなどが新たに加わつて今日のスイスの国境が此の時に決定された。そして連邦主義の復活と永世中立の承認によつて、スイスを支える二本の柱の基礎が固められた。

だが試練は未だ続き、19世紀に入り欧州全土に自由主義の風が吹きまくつた。近代国家になるためには旧態依然の連邦制に留まつてはいけなないと主張する進歩派と、古い連邦制を維持すべきだとする保守派の対立は、新教と旧教の対立まで再現した。

弱体の保守派はオーストリアやフランスの君主にまで援助を求めようとして、中立主義の存立が危険に曝されようとした。遂に1847年に二つの派が武力闘争を始め、25日間で終わったものの、近代に於てスイスが経験した唯一の内戦となつた。

この内乱を平定したデュフル將軍の名はその功績をたたえ、スイス最高峰であるモンテ・ローザの絶頂の名称として残されている。

地方自治を尊ぶ連邦制度と、近代的な中央集権化の上に成り立つたスイス連邦憲法は1848年に制定され、スイスは代表制民主主義国家としての体制を整えた。

それ以降、国民の発議と国民投票という手間のかかる方法で、絶えず部分修正を重ねて今日に至っている。絶対に急がない事がスイス民主主義の基本原理である。

20世紀の二つの世界大戦は深刻な問題をスイス人に突き付けた。日本ではスイスが永世中立国だったから大戦中も平和を保つたと言ふような、単純な言い方で片付けられがちだが、そんなに生易しいものではなかつた。

第一に、周囲の国々から嫉まれたり疑われたりされ、自分だけ戦争に加わずに甘い汁を吸っているとか、自分に味方をしないのは相手に味方するに等しいとか、非常に邪推を受けたのである。第二に、多民族・多言語国家であるスイスは国内世論を統一しにくい事であつた。

第一次大戦でフランスとドイツが戦っている時、西部のフランス語圏のスイス人と東部のドイツ語圏のスイス人の間に、感情的な対立が表面化した。之を反省したスイス人はドイツでナチズムが力を振るい始めると、直ぐに国内の精神的な統一運動を繰り広げ、言語と民族の区別よりもスイス人として一体である事を尊重した。

第二次大戦が勃発するとスイスは新しい難関に立たされた。ヒトラーはドイツ語圏を統一しようという計画に基づいて、先ずオーストリアを併合した。スイスの大部分

を占めるドイツ語地域はいずれはドイツ側に付くものとヒットラーは考えていた。しかし、スイスはなびかなかった。第二次大戦が開始されてから、ヒットラーが武力でスイスを引き入れようとしている事を、スイスの諜報機関が察知した。

国民皆兵のスイスは総動員体制をとって抵抗する構えを崩さなかった。スイスを最後まで守る誓いがスイス軍の指導者によつて立てられ、たとえ平地が占領されてもアルプスの山々を守りぬく決意が表明された。

アルプスの道路や鉄道を破壊してでも抵抗する姿勢が示されると、ドイツはスイスを支配下におく事を諦めた。欧州の北と南、東と西を結ぶことがスイスの存在価値から、交通路が破壊されてしまえばスイスを占領する意味がなくなるからである。

こうしてスイスは一時は四方をドイツに囲まれ、多くの亡命者をかかえ込み、食糧の補給に苦しみながら難局を切り抜けた。結局、中立がスイスを守ったのではなく、スイス国民が中立を守ったと云うべきである。

しかも、スイスが大战で無傷であつた訳ではない。ドイツに接する都市を英米連合軍の爆撃機が、ドイツ領と誤認して爆撃した事も再三に及び、スイス市民の間にも少なからぬ死傷者が出ている。

ここで考えさせられるのは、日本社会党が一時声を大にして叫んだ非武装中立論である。中立とは中立を維持しなければ中立は成立しない事を忘れた論だ。他国軍が侵入した時には之を排除しなければ中立ではないのだ。だから中立を維持するためには軍備は必ず必要であり、スイスも国民皆兵制を採用している点を忘れてはならない。

中国の春秋時代の前期、斉の桓公に仕えた管仲と其の門下の撰である「管子」に説いている「以備待時、以時興事」は政治の大本である。即ち、「備えを以て時を待ち、時を以て事を興す」という意味で、侵略思想ではなく国を守る大本である。

神聖ローマ帝国

中世から19世紀初頭までのドイツを指しドイツ帝国ともいう。

800年にフランク王国（フランク族のクローヴィス1世が5世紀後半に北仏に建国、751以前がメロヴィング朝、以後がカロリング朝、カール大帝の時西欧最大の封建国家、843のヴェルダン条約・870のメルセン条約で3分割、後のドイツ・フランス・イタリアの起源となる）のカール大帝が「ローマ皇帝」の称号を得たのに始まるとされ、当初はキリスト教の守護者としてローマ教会との結び付きが強く、962年教皇がドイツ国王オットー1世に皇帝の冠を授け、以後歴代のドイツ国王は神聖ローマ帝国皇帝と称した。

しかし11世紀以降は教皇と対立、皇帝権も弱まり、帝国はドイツ、オーストリアを始めとする中欧諸地域の緩やかな連合体に過ぎなくなり、皇帝位に就いたドイツ王家には帝国全体を支配する力も全くなかった。

こうした分裂状態は、宗教改革に起因する17世紀の30年戦争後さらに強まり、帝国内の諸領邦はほぼ独立国に近い主権を持ったため、ドイツの統一は神聖ローマ帝国の廃止（1806）以後にまたねばならなかった。

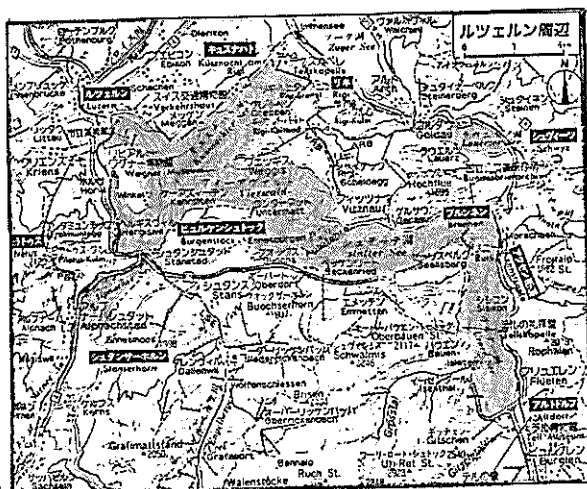
ルツェルン 概要

フランス語ではリュセルヌと称し、フィアヴァルトシュテツ湖（四つの森の国の湖の意）の北西部を占める中央スイスの中心都市で、ルツェルン州の州都である。各種機械産業、食品産などが盛んな一方、スイスキっての観光都市でもある。

中世以来、サン・ゴットアルド峠（ルツェルンとイタリアを結ぶ）をひかえて、南北ヨーロッパを結ぶルート上の要地で、峠道の改修や1882年の鉄道トンネルの開通以来、飛躍的に発展を遂げた。（上はスイス発祥の地域図）

前記した通りルツェルンはスイス連邦の発展に寄与している。1332年、ハプスブルグ家（オーストリアの支配者）の支配を脱し、森林3州同盟（1291年結成）に早くも参加し、スイス連邦成立の核の役割を果たした。

湖の周辺には3州同盟成立の象徴である「ウィリアム・テル」（後記する）の伝説ゆかりの史跡が多く、また世界の急斜面を登る山岳鉄道があり、スイスらしい風情のある人口68,000の町で、歴史と景観を誇る観光都市である。



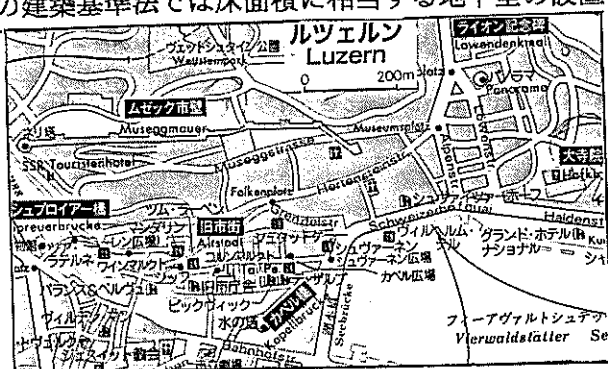
観光

チューリヒから55kmのルツェルン街道は山岳を貫いた高速自動車道路が完備し、一面真っ白な銀世界を疾走する路面は除雪が徹底して、文明国らしい充実だ。

予想に反してスイス中央部の此の地方は、冬期でも0°以下になることは稀だという。しかし此の旅では58年ぶりの大雪に遭遇し、私のような雪国の者でも11月の積雪は珍しく、大雪は我々を歓迎しているようでもあり、幸運だったのかも知れない。

ドイツに似ているアウトバンを突っ走る車窓から、田舎の酒落たスイス建築に眼を凝らして、人為の少ないありのままの自然を楽しむことは、無何有の郷を踏破するようだ。聞くとところによると、スイスの建築基準法では床面積に相当する地下室の設置が義務付けられている。有事の際の貯蔵庫兼冷蔵庫で、平時から中立維持の為の備えを怠らないのは流石だ。誠に国の守りは築城の險ではなく、国民一人一人の国防意識である。

麗しい雪景色の空にも一時ながら陽が照り出して来た。沿道の寒村のクリスマス・ツリーは旅行者の目を引き付け、私の胸中に去来したのは



人生の春夏秋冬であり、生と死の還流であつた。日月は滔々と流れて早や年末を迎えているのだ。

どんよりとした空模様の彼方に、淡い水晶のような青色の湖面が展開し始め、スイス連邦の牽引車の役割を果たしたルツェルンの町並みが浮かんで来た。当時の人達の媚眼に拝跪の礼を捧げたい雰囲気自然に醸し出されるのである。

ルツェルンの最初に案内されたのはロイス川左岸にあるジュスイット教会であつた。1666年から77年にかけて建てられた此の寺院は歴史的な建築物で、積雪した鋭角の三角屋根や尖塔は他を睥睨するように聳え、院内のステンドグラスも亦、長大且美麗なもので印象に刻まれていた。(ルツェルンの市街図は前頁に掲載)

バスはマロニの並木道を緩つくりと進み、「四つの森の国の湖」から流れ出ているロイス川の流出口の湖水橋で下車した。その直ぐ下流にかかった屋根の付いた木橋を「カペル橋」と云い、ルツェルン第一の名所である。(上の写真は塔と横に連なる橋)

14世紀初めに建造され、長さ200mの欧州最古・最長の木橋はルツェルン防衛の橋で、当初285mあつたが後世の修復により橋の両端が短縮されて現在の姿になったが、その他は原形をとどめている。

屋根の下の梁には三角形の一連の板絵100余枚が取り付けられており、見学は許されなかつたが珍しい存在である。ルツェルンの歴史や郊外の生活を描いた掲額は、17世紀初めの貴重な作品で、今世紀に入って修復したという。

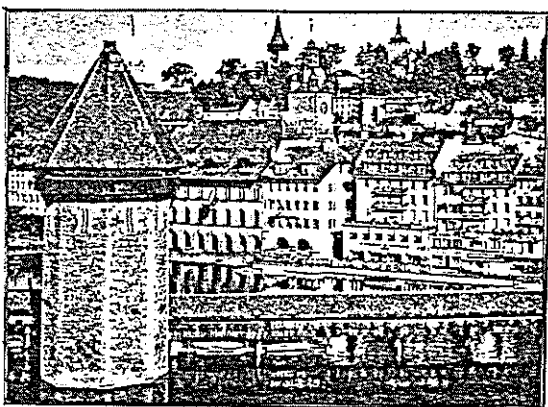
橋の途中で折れ曲がった所にある八角形の「水の塔」(写真の塔)は、灯台を兼ねたルツェルン防衛の塔で、この塔は橋よりも古く、ルツェメンのシンボルとして市の公文書の保管所や監獄塔になっていたらしい。

カペル橋を眺めながら更に下流に向かって歩くと、スイス連邦発祥の地の四つの国の国旗を描いた建物があり、其の時代の民族衣装をまとった人達が旗の下に描かれていた。茨の日々から処世の智慧をさぐった農民等が、その力を郷土に結集した一揆の姿を表現し、勝利と栄光を永遠に記念しているのである。

国と国、人と人との抗争が如何に愚かなものか。東洋では「蝸牛角上の争」(莊子)と云ったことを此処の人達は実行し、世々代々其の道を歩んで来たのであつた。

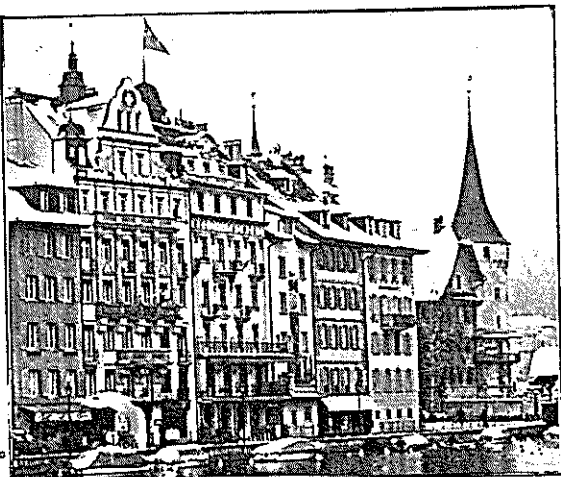
現代に生き未来を展望する時、その歴史や古典を学ばなければならない。それは人間の英知の結晶であり人間苦闘の記録でもある。厳しい世界を生きる上で先人の智慧を踏襲したいものだ。「国大なりといえども、戦いを好めば必ず亡ぶ。天下安しといえども、戦いを(戦備)怠らば危し」の名言を忘れてはならないのだ。

此処を去って旧市庁舎前の橋の上に佇むと、カモメの大群が欄干の上に群がり、ロイス川兩岸に連なる旧市街は一望であつた(次頁に写真あり)。オーストリアの支配下にあつた旧市街は独立前にはルシアリア(漁村の意味)と称したが、現在はスイス共和国の一番古い町として発展し、全国で7番目の大都市となっている。そして欧州の三大音楽祭やカヌー大会、ヨットレースも行われ、観光の町として栄えている。



ガイドの説明によると、GNP世界第一のスイス人の平均月収は約40万円、小中学校教師の初任給も40万円で、90万人の外国人が出稼ぎに来ており、物価は安くて20年間仕事に励むと一生懸命に生活が出来るそうだ。そして外国人は半年以上滞在すると預金することが許可され、銀行預金の利子は3、5%だが物価が安いから生活が可能らしく、羨ましい限りである。(右は市街風景)

バスは湖の北側にある大寺院の尖塔を眺めながら、ライオン記念碑へと進んだ。小さい広場の右手にある岸壁に、心臓を打ち抜かれて横たわるライオンの彫刻が刻まれている。



フランス革命の1792年8月10日、衛兵として王家に仕えていたスイス傭兵が、押し寄せる革命派の前にパリのチュéry宮を守り、殉死する悲運にあつた兵士の忠節を記念する碑が此のライオン碑で、日々供養が行われている。日本人も殉国の英霊に対する慰霊に就いては大いに反省すべきだ。戦争の責任は決して一方にあるのではなく、責任云々を度外視して国をあげての報国精神に感謝すべきである。

渺々とした山間の小国が六合を以て家となし、剣をもつて戦うものは剣によつて倒されると云う大原則を堅持し、国民の連帯意識に燃えて今日を築いたスイス国民に感服するばかりであつた。

如何なる星のもとに生まれたのか、私も戦争という数奇な運命に翻弄されて生きのびたが、戦争はやがて戦争自らを否定し、世界に絶対平和の理想を実現したいものである。枚挙にいとまがない先駆的で新奇な感想を抱きルツェルンを後にした。

峠を巡る旅

ルツェルン〜ツェルマット (5頁地図参照)

四つの森の国の湖畔をバスは薄霧をついて、本日の目的地「ツェルマット」へと轟進した。歴史の重みをもつた農村は湖に流れる河川流域に発達し、予想以上の耕作面積が広がって裕福そうに見えていた。(下、田舎の家にも左端に国旗が描かれている)

地図を拡げて何の道路を進行するのかと運転手に尋問すると、彼は図上に指差して経路を示した。この冬期に3000m級の峠を越す道路の走行は、日本を発つ時から氷結を心配していた。しかし、スイスは峨々たる高峰地帯にも高速道路が走り、除雪が徹底して私の思いは杞憂にすぎなかつた。

スイスには2000mを越える峠越えの街道が16ヶ所もあり、歴史を刻み眺望の優れた峠



が進路に集中しているものの、今は完全に征服されて冬期も心配はない。

夜の帳が下りて車窓からは道路標識の街灯しか見えない。峻険な峠から氷河地帯を通る景観は、手に汗を握る難所だと予想していたが、これらは殆どトンネルが貫通して峠越しは解消されている。しかし夏季には峠を巡るバスが運行されて、自然の保持と観光にも意を尽くしているということだ。

我々の進行するグリムセル峠（2165m）は18世紀末にフランス軍とオーストリア軍が戦った古戦場で、峠にある湖は「死の湖」と云われる名所である。荒々しい生の自然も夜間では流血の戦史を想起するだけで、往時のロバや馬車で山越えした苦勞が偲ばれたのである。

物思いの中に漸く市街地の電燈が谷間に見え隠れして、中には高層建築が光に照らされていた。数え切れないトンネルを通して難所の山脈を通過し、いよいよローヌの谷に入ったのであつた。

ローヌの谷はスイス最大の谷で豊かな田園が広がり、今でも民族色が残っているという。東西に流れるローヌ川はジュネーブのレマン湖に注ぎ、地中海に流れているが夜間では網膜に写らない。明後日のイタリア行では是非とも眺めたいと期待していた。

ローヌの谷で最初に気付いたのは雪の無いことであつた。3000m級の連峰に囲まれた谷は、雪雲が遮られて降らないのであろう。そしてローヌの谷の発達の原因も雪の無いことではなからうか。

ローヌ川の支流であるフィスパ川の谷に入ったバスは、テッシュ駅の大駐車場で停車した。ツェルマットは観光バスを含めて一般車の進入を許さず、テッシュ駅から登山電車に乗り換えなければならない。自然環境の保護のために喜ばしい事である。

11時間にも及ぶ強行軍のすえ夜の9時、深沈と更けたツェルマットに到着し、駅前のアンバサダー・ホテルに旅装を解いたのである。憔悴しながら遅い夕食を駅前のレストランで済ましたものの、ホテルの風呂の湯が出ないのには情け無い思いであつた。スイスで最も奥深い登山口の町では無理なのかも知れない。

11月24日（木） 晴

マッターホルンとツェルマット

早朝の5時に目が覚めた。7時のモーニングコールまでの時間は、準備してきた予備知識の再読に耽っていた。満州のチチハルでは零下44°を体験したが、風邪に弱い私は念をいれて防寒の準備を整え、これ以上の耐寒装備がないほどに着込み、体重は5kgも増えたのではなからうか。

漸く夜が白々と明け始めると、四面を山で囲まれた^{スリッパ}摺鉢の底にあるようなツェルマットの街が見え出した。人口3、500程度の山奥の屋根は薄らと雪をのせ、梢の氷づいた町並みは流石に標高1、700mの寒々しい感じであつた。

ツェルマットはマッターホルン（4478m）山麓の世界に名高いアルペン・リゾートで、夏冬を問わず観光客を集め、年末年始や7～8月は世界各国からの人で混雑し、狭い通りは歩行者天国のようだという。費用の格安だけを考慮していた我々には、静かなツェルマットを楽しむには最適の時期だったのかも知れない。

僅かながら生えている針葉樹を窓越しに眺めると、気品の高い「玉海金山」と形容したいマッターホルンが、暁色微茫、冷爽一色の中に濯々として明眸皓齒の雄姿を現わしていた。

不安と危惧に駆られていた天候は青天白日の好天に恵まれ、偶然の幸運であろうか、「罾網で鯨捕る」気分と云わなければならない。美と荘嚴な霊峰を眼にして齡甲斐もなく狂喜した早朝の一瞬であつた。

静中に鋭さがあり雄渾な名峰に囲まれての住いは、総てを忘れて長寿は疑いなしと考へながら、駅前のレストランで朝食を済ませ、零下5°の肌を刺す寒気にふれながら登山電車は9・40に発車した。(上図はツェルマット～マッターホルンの地図)

ヨーロッパでは珍しく改札があり、レンガ色の登山電車は急勾配を登るためか、床が階段式になっている。本日のマッターホルンの観光客は我々一行の30名に過ぎず、2輛連結の車内は空席ばかりで、小奇麗な客車の暖房はきき過ぎて、足、腰にホカロンの懐炉を入れた私には汗ばむほどであつた。

電車が唐松林に登攀して行く颯々とした松籟の響きの中に、マッターホルンは我々を招くように近づき、文字通りの天に昇る心地がし始めた。それだけ他の峰よりも高く孤立して「アルプスのシンクス」とか「アルプスのピラミッド」などの愛称で親しまれ、天を突いて聳える迫力を見る者を威圧して畏敬の念を抱かすのであつた。

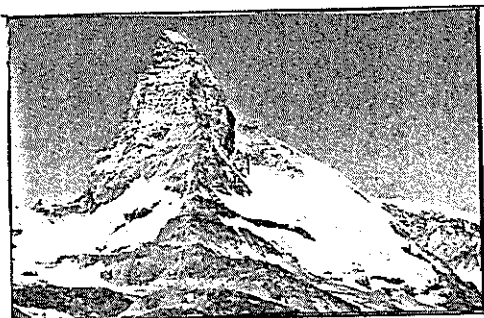
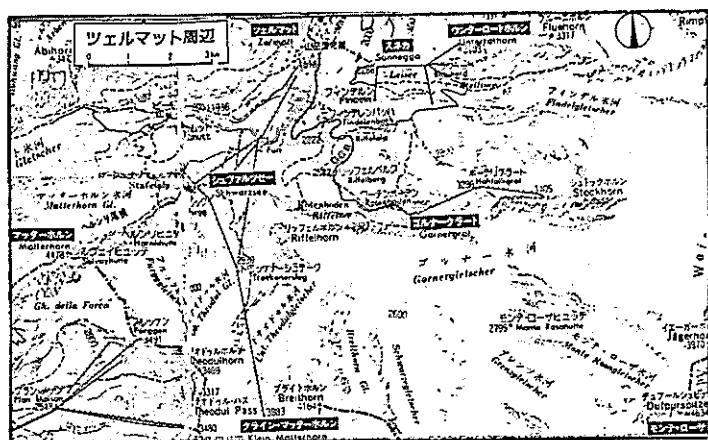
四方の峰々は氷河を形成して仙境の感じを受け、幾つかの駅では鉄道従業員を下して、電車はゆっくりと喘ぎながら登って行った。標高2,000m附近で電車が反転するとマッターホルンは真後ろとなり、下界のツェルマットの町並みが眼下に展開して、灌木の混った日当りのよい台地を更に進んだ。

終点のゴルナーグラート駅(3090m)には10・25に到着し、零下17°であつたが快晴の直射日光に暑さを覚えた。駅員の話では我々は実に幸運に恵まれたのであつた。(下の写真はマッターホルン)

稜線の一角にある駅前に一軒のホテルが建ち、その後方が展望台(3135m)となっている。氣息奄々として20cmばかりの雪を踏み分け、息絶え絶えながら無念夢想で展望台に達した。これが将に頂点に有りという「有頂天」であろうか。

展望台から西方6kmにあるマッターホルンは1kmほどの近くに見えて、岩壁の山肌も手に取るように映っていた。

ツェルマットを取り巻く4,000m級の峰は、大パノラマのように360°に亘つて



展開している。其の中で私の視線を釘付けさせたのはマッターホルンの三角錐の東壁で、我れを忘れて呆然と眺めていた。陽の光が地球を取り巻き、夢の光のような静けさの中に、他に類のない「方外の山」マッターホルンは超然と孤立し、身を抜山蓋世の佳境に置いたよう気分陥つて、神気を感じていたのであつた。

目を四周に巡らすと、ゴレナー氷河を越えた南側にイタリア国境のモンテ・ローザ（スイス最高峰で4 6 3 6 m）、リスカム（4 5 2 7 m）、カストール（4 2 2 8 m）ポリュックス（4 0 9 2 m）、ブライスホルン（4 1 6 4 m）の白皚々の峰が起伏して、山が生きているようであつた。

西側にはワイスホルン（4 5 0 5 m）、チナール（4 2 2 1 m）、の峰々が白く美しく陽に輝き、北側にはシュトラールホルン（4 1 9 9 m）山群など、何れも4、0 0 0 m級の威容が展開し、羽化登仙のような興奮の虜になつて応接にいとまがない。

鶴の翼を拡げた鶴翼の陣形の中に、秀麗極まるマッターホルンは恰も白い大軍を統帥しているようで、千鈞の重みを持っており、我が身に翼があればと、もどかしい思いがしていた。此の雄姿艶麗、神秘的な宇宙の光景を私の下手な「蛙鳴蟬噪」の文章では、表現できないのは誠に残念だ。

登山電車の都合により突然、展望台下のホテルで昼食をとる予定が変更され、下山することになった。然し乍ら本日は懸念された寒さも肌に感ぜず、天高く気も清く仰いで宇宙の大なるを見たようで、忘却陶醉の境を満喫できたことは僥倖であつた。何時までも恍惚として飽くことのない眺望に感動し、後髪を引かれる思いで乗車した。

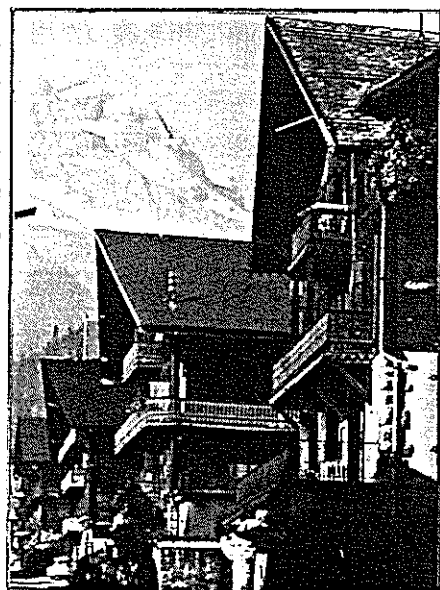
マッターホルンの秀峰が我々を見下す中を、電車は唐松林を通過して下ると、ツェルマットの街は指呼の間に見え始め、1 1・0 5に駅に到着した。端麗毅然と聳えた霊峰に天地正大の気を養い、何か一つ大事を仕上げたような清澄な心境で、レストランでの昼食となつた。

午後は自由行動となり、ツアーの人達はドイツ式の町並みに並ぶ商店街を散策した。駅前にはホテルの送迎用の電気自動車が待機し、道路では純真無垢な子供達が笑みを口元に浮かべてソリに乗っていた。

閑散期のメンストリートの店に日章旗が掲げられ、此の辺鄙な山奥にまで日本の経済力が浸透しているのは驚きであつた。

1 9 世紀に早くも登山鉄道が開通したツェルマット、静かな繁華街の正面にマッターホルンの山が、重く垂れ下がるように姿を現わし、もの言わぬ屋根瓦は黙々と歴史を語り、流石にツェルマットらしい街並みである。（右は街並み風景）

ホテル・モンテ・ローザの通りに面した壁に、ウィンパー（英国）のレリーフが埋め込まれていた。彼（1 8 4 0～1 9 1 1）等一行7人は1 8 6 5 年7月1 4 日、アルプス最大難関のマッターホルンの初登頂に成功し、下山に際して4人が転落死した。其の栄誉を称えるレリーフを見る時、心境は如何であつたのだろうかと思え



てくるのであつた。努力なくして人生の楽しみは味わえず、また幸福の秘訣はしたい事をして満足する事ではなからうか。

ウィンパーと時を同じくして、同年同月の17日に南のイタリア側からも登頂に成功しているが、氷食尖峰の斜面は45°前後という四角錐の鋭さ、見た者しか実感が湧かないだろう。

レリーフを過ぎた教会前の広場には冷たい空気の青空に、赤い実をつけた梢が伸びて美しく、下にマーモットを表わした噴水があり、勿論冬期だから水は出ていない。此の辺になると道は狭くなって商店の連なりは途切れ、ホテルや貸別荘となつてい

帰路、日本人の店員のいる店で孫達への御土産を求め、四方の山の自然美に眼を向けながらホテルへと急いだ。静かなホテルの部屋でメモの整理に時を過ごし、今日の天上に遊んだ恍惚と充実感に酔つた光景を思い浮かべていた。そして人間の世界では一人では生きられず、孤独では生存に不安を抱くのと異なり、山はこれを無視するように独り毅然としている事を、強く印象付けられたのであつた。

11月25日(金) 晴

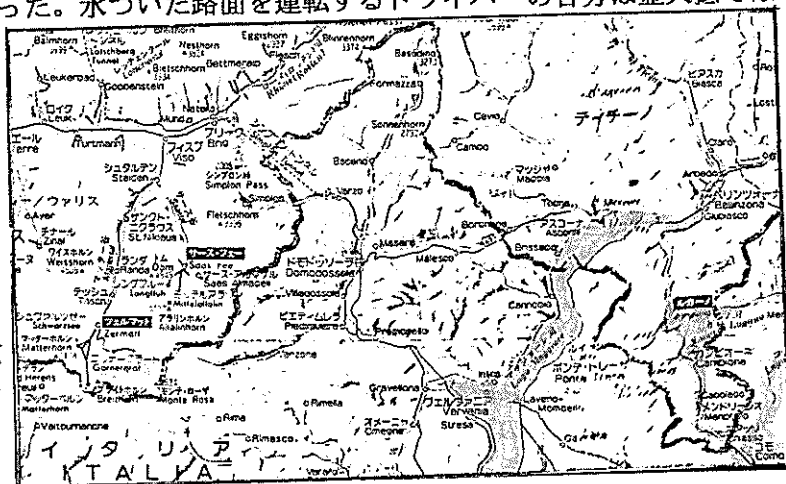
アルプスを越えて伊国境の湖水地方へ

瑞象を顕現していたマッターホルンの余韻爛々の中を、「サヨナラ」が人生だと思いながらツェルマットを9・00に出発し、登山電車をテッシュで下車してバスに乗り換えた。太陽の光を一杯に浴びた山は我々に活力を与え、朝の新鮮な空気を吸い込みながら、本日の山越えの踏破に心を励ましていた。

昼間に見るフィス川兩岸は峻峻な山容が怒濤のように拡がり、千仞の谷肌は岸壁を現わして山頂だけが陽に照らされ、陽の陰になった谷間の唐松は雪を頂いて寒々しい感じがしていた。バスが下って行く左側には電車のレールが走り、点々と見えている建物はスキー客や登山者のホテルである。(下図は本日の経路図)

シュタルテン部落で川を渡つた附近の紅葉は美しく、出勤途中の観光産業に従事する人達の影が目立つて来た。再び川を横断した谷間の斜面に狭隘な耕地が作られ、車は七曲がりの急坂を下った。氷づいた路面を運転するドライバーの苦勞は並大抵ではないだろう。

紺碧の南の空に聳えるモンテ・ローザ(4636m)は平和な曙光が溢れ溢れて、何もかも忘れて注視していた。ローヌ川と合流する小奇麗なフィスの町から道路の幅員は広くなり、スイス東西を結ぶ鉄道は複線電化されている。



細長く続くローヌ川沿いには工場が各所に建ち、スイス経済の原動力をなしていた。次ぎのブリーク附近は谷間が大きく広がって、東西10kmにも及ぶ市街地を形成し、イタリアを結ぶ鉄道、自動車道路の要衝としてローヌの中心地の一つとなつている。

スイスの国土は殆ど山岳地帯で、あるのは農場ばかりだ。他に住めそうな場所がないから自然に谷間に集中し、スイス人は地理的欠陥の克服に迫られて、時計産業や絹織物等に総結集したのである。

世界でGNPは最も高く、インフレ率も最低であり、通貨の安定度もまた最高と云われているが、地理的環境が其の国の文化や政治経済に与える影響を痛感した。

日本を発つ時、自動車はブリークから峠を越えるのか、それともカートレンに乗ってシンプロン・トンネルを通過するのかと心配していた。アルプス越えの難路を想像したから無理もないことである。しかし一昨日と同じく戦々たる連山の下にはトンネルが開通し、有名なシンプロン峠に向かってバスは羊腸の急坂を疾走した。

山も谷も木も凡てが沈むように肅然として、山勢は相迫って山狭の趣は寂寥であつたが、自然の姿は憂鬱という感じは全くない。深山巖崖の道路から網膜に映っている山々峰々は恰も聖者の群のようである。

眠るような静けさの谷に陽がさし始めて谷底に其の影をおとし、強烈な自然の魅力が車窓に展開して、シンプロン峠の頂上に達した。峻厳な山々が重畳として連なる景観は山河襟帯の文字通りに優れ、アルプスの気宇壮大さを味わつたのである。

シンプロン峠(2005m)はスイスで最も有名な峠である。

ナポレオンのイタリア遠征を記念するイーグル像が頂上に立ち彼の栄誉を称えていた。奇想天外な大遠征は無数の馬蹄が入り乱れ、疾風のように席卷したことだろう。(右がイーグル像)

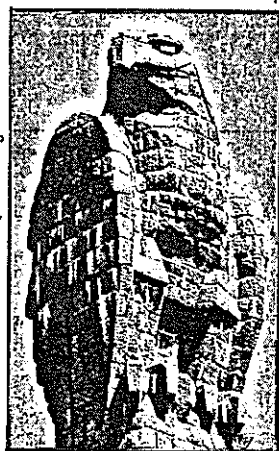
巨魁ナポレオンを卓越非常な人物として学んだ昔が懐かしい。彼の言葉は莊嚴華麗で若い時代の我々の魂を揺さぶり、獅子奮迅の活躍をした彼の艶麗優美な英姿に憧れたものだ。然し乍ら、其の陰には虎狼のような残忍性と人命軽視の思想があつた事は否めない。戦後40数年を経た戦闘体験者の一人として、戦争は人類最大の敵であり、人類への憎悪だと力説する。

ローヌの谷と北イタリアを結ぶ此の峠には、2世紀頃から細々として道があつた。それを大規模に改修したのがナポレオンである。イタリア遠征のため軍隊を通す必要から、5年の歳月をかけて峠越えの道を改修したのであつた。

峠の下を貫く鉄道シンプロン・トンネルは1905年に完成し、19.8kmという長さは上越新幹線の大清水トンネル(22.2km)完成までは、世界最長の記録を持っていた。現在は列車フェリーが走っている。

峠を越すと強い太陽の光を遮る峰も低くなり、暖房のきかない車内でも温度が上昇した。道路の左側の断崖はツララとなつた氷の彫刻が美観を呈し、少し下つたシンプロン村では氷河が目の前に迫っていた。

久しぶりに緑一色の農村風景が眼に映り、大自然のアルプスの南北の差は想像以上で積雪はなく、北側の木造建築は一変して石造建築となつていた。自然に適合した人間の智慧は素晴らしい限りだ。



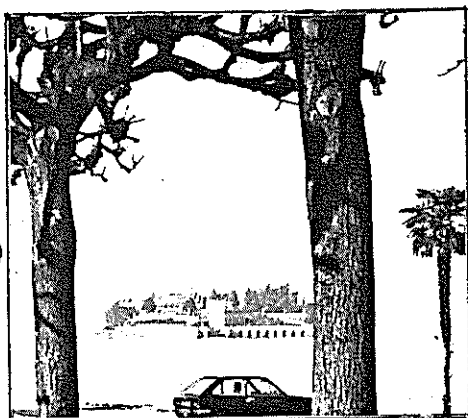
車はサンフランシスコのヨセミテ公園のような大岩石の谷を通過し、氷結した溪流を下に見て11・30に国境に着いた。国境の町「ゴンド」でパスポート、チェックを受けてイタリア領に入ると、一段と日差しは強くなつて山頂にも雪は見え、緑と紅葉が眼を楽しませていた。

岩を洗い滔々とした流れの沿道は坦々と続き、短時間のうちに変化する地形は我々を翻弄させ、日本では見られない現象である。裕福さが溢れた田園地帯は極端に車の数が増加し、眩しい陽を受けて前方は明瞭に見えない位だ。一直線に延びる街道の工場も濃々と煤煙を吹き上げ、教会の尖塔が聳える光景はイタリアらしい感じだ。

マッジョーレ湖畔(18頁地図参照)に接近すると平たい石を造る工場が並び、沿道の家屋の屋根は全て平石葺に変化して、異様な建築に目を奪われていた。湖畔から北に進路をとり、湖水は鏡のように紅葉を写して悠揚迫らず、文字通りの明鏡止水の景勝であつた。

リゾートらしく湖畔にキャンピングカーが点在し、山手には葡萄畑が蜿蜒と延び、観光と田園を兼備した保養地として有名な所だ。

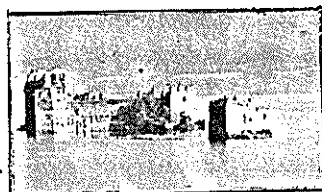
バスはストレサの町の湖畔に停車した。湖に面して観光ホテルが軒を連ね、湖上に浮かぶ島「ペラ島」はロマンチックな感じで、バロック式の館や古い礼拝堂が見えていた。(右の写真)



湖岸に沿った街道に小公園が設けられ、高い糸杉の並木やシュロの木、落葉した樹もあれば青々とした針葉樹も交じり、黄色い実をつけた柿の木は珍しく、真っ盛りの紅葉の丘などの眺めは、金で買えない別天地のような感じだ。

家屋の切れ間のない数十kmに及ぶ湖岸街道を快走して行くと、右手湖上に浮かんだ古城が見えていた。詩情をそそるような古城は昔の王侯貴族の別荘であろうか。土台が沈下して水面下に沈んでいるようである。(右下)

イタリア領から再びスイス領に入った国境の町「カノキオ」に着きパスポートの点検を受けたが、国境線は犬の牙のように噛み合っている。



遅い昼食となったロカルノは人口29,000の都市で、アルプスの人達は此処の太陽と美味しい食物に憧れ、スイス人のハネムーンや老後の安住の地となつているそうだ。11月とはいえ暖かい日差しが肌に感じ、湖の美観は旅の武器であるように、ヨーロッパのリオデジャネロと称されて、昔から芸術家が集まって来たのである。

本当に点的な飛行機の旅では決して味わう事の出来ない、面的な眺望は連続して目を保養してくれ、飛行機の飛びたつ機影を見つめて4時にロカルノを発ち、車は南下して再びスイスらしい山岳道路を走った。

釣瓶落としの晩秋の太陽は山影に沈み、街灯の明かりをたよりにルガーノ湖(18頁参照)へと進み、僅かな残陽が湖面を赤く写す夕暮の景色を眺めて、漸くミラノに通じる高速道路に入った。ハイウェイの車の洪水は日本と変わらず、スイス南部とイ

タリア北部の豊かな経済を如実に示していた。

街灯の照明で照らされたスイス領のルガーノの町は高速の下に見えていた。ルガーノ湖畔の国際的なリゾート都市として景勝にも恵まれ、スイスでは最も刺激度の少ない土地柄と云われているが、シーズンオフの廉価なツアーでは観光の時間もない。

ルガーノから20分も走ると3度目の国境の町「キアッソ」に達したが、検問に30分も要してイタリア領に入った。検問はスイス時計の輸入を監視することが目的らしく、彼等は日本の時計産業の優秀さをご存じでないらしい。

長時間のバス旅行は終わりに近ずいたものの、コモ市内は自動車のラッシュ時で遅々として進まず、市内通過に30分以上もかかってホテル到着は6・30であった。

3日間のスイス紀行は浮き世離れした美観を楽しみ、足を万金の流れに濯いだような感じであった。スイスと別れるに当たり、スイス伝説の英雄「ウィリアム・テル」の伝説を簡単に書くことにする。

ウィリアム・テル

息子を連れて町に出てきたテルが、竿の先につけたオーストリアの代官ゲスラーの帽子に頭を下げなかつた事を咎められ、息子の頭の上にのせた林檎を弓で射るように命ぜられた。テルは見事に林檎を射貫いたという伝説で、右の写真の像が四つの森の国の湖畔にあるアルトドルフの中央広場に立っている。

(12頁地図参照)

アルトドルフで起った事件の弓の名手テルを主役とするスイス建国の歴史を、ドイツの劇作家シラー(1759~1805)が劇化し、これが評判になってテルと林檎、スイスの自由と風景の美しさが世に伝えられた。

シラーの劇をもとに作られたイタリアの作曲家ロッシーニ(1792~1868)の歌劇が、テルの人氣に拍車をかけた。明治時代の日本の教科書にもテルは歴史的人物として登場している。

しかし結局は後世の作り話だという結論だが、度重なるオーストリアのハプスブルク家との戦闘を、スイスの子孫に伝えようとして勇敢に戦った祖先を称え、スイス人の精神を具体的な形で表わそうとしたもののようだ。

テルは特定の歴史的人物ではない代わりに、全てのスイス人の象徴である。王でも将軍でも政治家でもない、ただの素朴な猟師を建国の英雄としている国は他にあるだろうか。テルはスイス人の魂を象徴し5フラン貨幣にテルの顔が刻まれている。



11月26日(土) 晴 コモ

コモ市はアルプス山麓にある氷河湖であるコモ湖(海拔198m、面積146km²、深さ410m)の南西端に位置し、中世の寺院の多い人口20万の都市である。

絹織物、ウェルヴェット、レンズ等の産業が盛んで、古来から風光明媚な別荘地、観光地として繁栄し、一般にフランス製品として名高いネクタイ等の絹織物は、コモ周辺で生産されたものと云われている。

コモ郊外のドンコは1945年4月28日、ムッソリニーが殺された地だと知らされると、当時を回顧しながら人間の無常を感じ、「朝に紅顔あつて夕に白骨となる」の経文を想起させられた。

北イタリアの朝の気温は零下に下がっていたが、空は晴上がって周囲の山は旭日に赤く染まり、登山電車は頂上に向かって登っていた。湖面は穏やかに水をたたえて光を反射する爽快な中を市街地へと進んだ。

欧州の各都市と同様に両側に駐車する道路を縫い、中世の街並みを眺めながら20分も過ぎると、コモ湖の遊覧船が客待ちするように浮かんでいた。(上の写真)

次第に東の山の上に姿を現わした太陽は水蒸気に拡大されて特別大きく、湖畔の並木は落葉して寂しい風情を呈し、下弦の月が白く空に浮いていた。

郊外は一面の霜で覆われて耕地整理された畑の麦は芽を伸ばし、唐蜀黍の刈り取った田園地帯の高速は一直線に走っている。イタリアでは北の人間が働いて南の人間を養っていると言われているが、その言葉通り北部の産業は発達して工場も多く、其の中をコモから59km南のミラノへと直進した。

ここでイタリアに関係する概要を記述しておく。

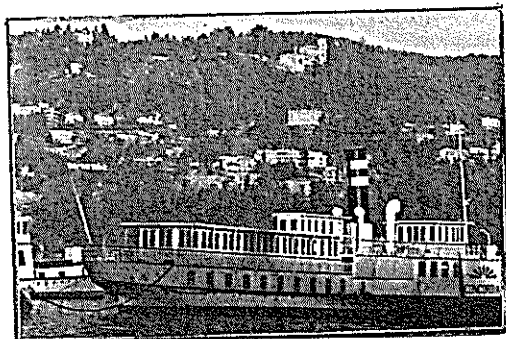
イタリア関係の概要

イタリアの歴史を繙いてみると、私の能力では簡単に記述することは出来ない。しかし我々として知らなければならない関係事項の数件を、簡単に取り上げてみた。

全般的には世界の中心の一つではないという事で、且つ静止していない以上、此の世界では並立状態は困難なようだ。単一なものに帰一したがる癖に、反面、四方に拡散したがるのが此の世界の習癖である。特に宗教の仮面(?)を被って侵略の魔手を伸ばし、排他相剋する運命は洋の東西に拘らず存在し、遠交近攻策や合従連衡もまた同じようである。

「キリスト教」

イエス・キリストを神の子とし、唯一絶対の神によつて魂の救いを得ようとする宗教で、愛と正義、人類の罪(原罪)、キリストによる贖罪を説いている。



初期には厳しい迫害を受けたが、4世紀初めにローマ帝国が国教と認めるに及んで急速に発展し、やがて西欧社会の精神的支柱となつた。東方教会（ギリシャ正教会）、西方教会（ローマ・カトリック教会）、プロテスタンシ諸派（7頁に記載）、英国教会などの宗派があり、信徒数は世界人口の4分の1（約10億）という最大の宗教である。

「キリスト教とローマ」

現在のイスラエルの北方地区・ガリラヤ地方のナザレでマリアが受胎の告知を受け、エルサレム南方10kmのベツレヘムに於て、ユダヤ人マリアを母として生まれたのがイエスである（紀元前4年頃）。

イエスはヘブライ語の救世主で、キリストとはギリシャ語の「膏を注がれた者」の意である。別称をロゴス、イマヌエル、メシアとも云う。数年前にイスラエルを一周した私にとっては懐かしい所で、旅の成果は計り知れない。

イエスはヨハネの運動に共鳴してヨルダン川で洗礼を受け、ヨハネの処刑されたのを契機にイエスは宣伝活動に入った。荒野で苦難の生活を送った後、ガリラヤ（イスラエル北部）で神の福音を説き多くの奇跡を行ったと伝えられている。

しかし、ユダヤ教からみれば型破りなキリスト教の思想はユダヤ人から憎しみを買うばかりで、当時のローマの総督であつたピラトにユダヤ人はキリストを引渡し、民衆扇動罪でゴルゴタの丘（エルサレム）で十字架にかけられて刑死した。

イエスの弟子パオロは熱心にキリストの福音を説いて廻り、その足跡は小アジア帯からマケドニア（バルカン半島南部）、ギリシアそしてローマにまで及んだ。

ローマに福音を伝えることを熱望していたパオロは自分のローマ市民権を利用し、皇帝に上訴した囚人として58年にローマに護送されることになった。ローマに着いたパオロは2年間軟禁状態であつたが、其の間にローマ人に福音を伝えたと云う。

こうした使徒パオロの殉教や他の使徒達の熱心な伝道によって、キリスト教の舞台はエルサレムからローマに移った。ローマ帝国の一属州で発生したキリスト教はローマ帝国の迫害を受け、ついでローマ帝国から公認されて国教になり、ローマ文明圏がそのままキリスト教世界となつた。パオロが必要であつたのと同じく、ローマ帝国の存在が不可欠であつたのである。

長い年月にわたる迫害を受けたのち、313年のコンスタンティヌ帝のキリスト教の公認による「教会の平和」から、絶対的な権力を持った法王の時代となり現代へと推移したのである。

「ユダヤ教とキリスト教との関係」

キリスト教運動がユダヤ教の一分派として発生し、その中心的な担い手もかなりの期間はユダヤ人であつた。しかし属州ユダヤのローマ帝国の冷酷残忍に対して反ローマ感情が高まり、ユダヤ戦争となつて立ち上がった。

キリスト教徒は戦争に際して中立的な態度をとり、対ローマ戦争に全く参加しなかった。それはキリスト教徒の信条（無抵抗、隣人愛、愛敵の教えなど）から当然の行爲であつたようだ。

対ローマ戦争に参加したユダヤ教徒にとつては許し難い行爲であり、決定的に分離することになったのである。

「ローマ帝国」

「ローマは一日してならず」といわれるが、確かにチベリス河畔の小さな都市国家から、地中海とヨーロッパに跨る大帝国内に築き上げる迄には、約8世紀が必要であつた。

ローマは雌狼に育てられた双子の兄弟が建てたという伝説があるが、最初は王政をとり前6世紀から共和国になった。貴族と平民の対立の中で前3世紀にはほぼイタリア半島を平定し、更にフェニキア人（地中海東岸のシリア中部地方）の植民地カルタゴ（北アフリカのチュニス湾岸）との3度の戦争に勝ち、東方に進出して帝国建設を進めた。

しかし領土の拡張と共に政争が激化して「シーザー」（100～44 B、C、イタリア語でカエサル）の登場となつた。このころ現在のフランス、イギリスまで征服して帝国の版図は広がった。前1世紀アウグストゥスによつて帝政が樹立されて黄金時代を迎え、地中海を「我れらが海」とするローマの平和が続いたが、領土の拡張と共に内憂外患に苦しむようになった。

ゲルマンの民族移動（後記）が激化した4世紀末には帝国は東西に二分され、西ローマ帝国は476年に滅びた。文化における寄与としては「すべての道はローマに通ず」と云われた道路などの土木建築や、近代ヨーロッパ諸国の法の源となつたローマ法などがあげられ、ラテン語は長くヨーロッパ共通の言葉として使われた。

「キリスト教の公認」

古代ローマ帝国の成立（紀元前27年）とほぼ同時にユダヤに誕生したキリスト教は、「異邦人の使徒」パオロの精力的な伝道活動によつて、2世紀には帝国内の都市に信徒の共同体を形成するようになった。

ローマ帝政が専制化を強めた3世紀に入ると、キリスト教徒に対する迫害が組織化され、303年の迫害令によつて頂点に達した。しかし帝国内のキリスト教徒は相当数にのぼり、コンスタンティヌス（280～337。324年全土を統一して独裁。330年コンスタンティノープルに遷都）と、リキニウス帝は312年、「ミラノ勅令」を發布してキリスト教を公認した。

公認後のキリスト教会は皇帝権力の庇護と介入を受けつつ帝国統治に組み込まれ、392年に国教に採用された。

「民族の大移動」

ヨーロッパ史上の民族の大移動は、4～6世紀のゲルマン諸族（ライン、ウィストゥラ、ドナウの3川の流域の民族）の西ヨーロッパ侵入（第1次）、9～11世紀のノルマン人（北ゲルマン系の民族で元来はスカンディナヴィア地方に居住）の活動（第2次）である。

第1次はドナウ川左岸の西ゴート族（ゲルマンの1派）が375年にローマ帝国領内に移住したのに始まり、476年に西ローマ帝国を滅ぼして西ヨーロッパ各地にゲルマン人の国を建てた。第2次は北欧を居住地とするゲルマン民族の1派ノルマン人が、初めて「バイキング」として海上を移動し、やがて北欧3国のほか北フランス、南イタリアにも定住して建国した。これらによつてヨーロッパ文明は従来のラテン的要素に、ゲルマン的要素が加わることになった。

「東ローマ帝国」(ビザンティ帝国)

首都はコンスタンティノープル(現イスタンブール)。ローマ帝国が東西に分裂した396年から、オスマン・トルコに滅ぼされた1453年まで一千年余り続いたが、支配地域は時代によつて異なっている。

ローマのキリスト教精神と帝国理念を受け継いだ教皇(皇帝)主義をとり、東欧諸民族をキリスト教化して東方教会(ギリシア正教会)を築いた。古代ギリシア文化を尊重して古典の保持に努め、古典古代と東方オリエントの伝統を融合した独自のキリスト教美術を生み出した。

「神聖ローマ帝国」

11頁に記載。

「中世ヨーロッパ都市」

ヨーロッパでは封建社会が安定した11～12世紀から、ローマ帝国の衰亡と民族移動の混乱で衰えた商業が復活し、それによって都市が発展した。古代の消費都市とは異なり経済活動のための共同体であったところに特徴がある。

市民は同業組合である「ギルド」を作り、国王や封建主から自治権を獲得して、それぞれ都市法を持っていた。周辺の農奴も都市に逃げ込んで1年たてば自由な身分になれたから、「都市の空気は自由にする」と云われた。

遠隔地を結ぶ通商路沿いに数多くの都市が出現し、都市の諸制度とそこにおける生活意識は、近代の市民意識の形成に重要な貢献をした。しかし都市と称しても人口5万を超えるものは極めて稀で、普通は5千人以下であった。

「十字軍」

11～13世紀、ヨーロッパ各地のキリスト教徒がイスラム教徒から、聖地エルサレムを奪回するために170余年に7回(一説では8回)行った遠征である。

一時はシリア、パレスチナにエルサレム王国、コンスタンティノープルにラテン王国を建国したが、統率を欠いた為にイスラム側の反撃で当初の目的を果たさないまま終わった。

これにより教皇権と封建貴族の地位は失墜し、王権の力が強まった。当時のヨーロッパは中世の転換期(12世紀ルネサンス)に当たり、農業、商業の飛躍的な発展により、内部に充満したエネルギーが十字軍運動となつて現われた。

経済活動は活性化され、東方貿易による異文化の摂取によつて非西欧化世界への視野が開け、都市は益々発達して行った。

「封建社会」

主君が臣下に封土を与え、臣下は主君に忠誠を誓い、軍役などの奉仕をする主従関係を軸に編成された社会で、西ヨーロッパでは11～12世紀に確立された。

この関係を皇帝や国王を頂点にして貴族の間に網の目のように張り巡らされ、「領主のいない土地はない」とまで云われた。封土の単位は荘園(マナー)で、その領主の貴族は農奴を強制的に耕作に従事させたばかりか、裁判権を始めさまざまな特権を

持ち、たとえ国王でも介入できなかつた。「朕の臣下の臣下は、朕の臣下ではない」と云う言葉が封建社会の権力の細分化を表現している。

中世ヨーロッパの封建社会では、戦う人（貴族、騎士）、祈る人（聖職者）、働く人（農奴）の三身分が厳然と区別されていた。

「ルネサンス」

原義はフランス語の「再生」で、我が国では「文芸復興」と訳されている。古代ギリシア・ローマ文化と、そこに見られる人間性の自由な発露の復興を意味している。

狭義ではイタリアに始まる14～16世紀のヨーロッパの政治、経済、文化の革新運動である。

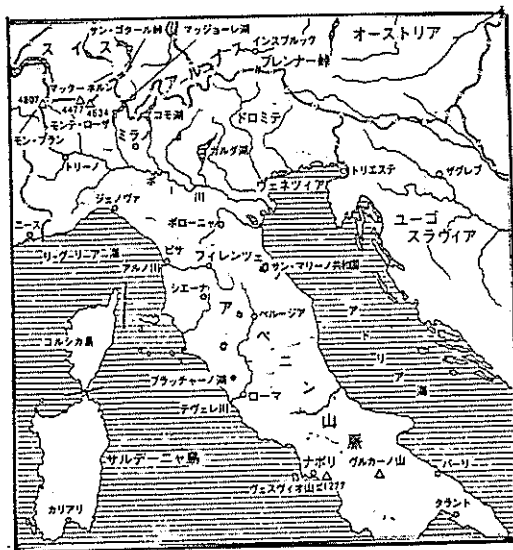
東方貿易で富を蓄えた都市商人をパトロンに、ヒューマニズムの発露を基調とした芸術、学問が現われ、次第に西ヨーロッパ各地の宮廷や国家と結び付き、個人の開放、自然の発見、古典の復興など独自の成果をあげた。

「メディチ家」と「フッガー家」

農業の発展で豊かになった中世以降のヨーロッパでは、十字軍を切っ掛けに東方貿易が開始され、各地に都市が発達して遠隔地商業が盛んになった。メディチ家とフッガー家はこうした商業都市が生んだ二大財閥として知られている。

北イタリアでは14世紀以降、大商人・金融業者のメディチ家が、イタリア・ルネサンスの大パトロンとしてフィレンツェ（フローレンス）の黄金時代を築き、一族から教皇やフランス王妃を出すなど、名門として名を馳せた。

フッガー家は15世紀に南ドイツに興り、ドイツの領邦君主や教皇、各国の国王に高利貸し付けを行って大財閥にのし上がった。マインツ大司教がフッガー家への返済のために免罪符の販売をしたことが、ルター（ドイツの宗教改革者）の宗教改革の一因を作った。



ミラノ 概要

アルプス山麓の南、ポー川流域に広がる肥沃な平野に位置し、イタリア第2の都会でイタリア経済の中心地である。ミラノ人が好んで「ミラノが稼いでローマ（政府）が使う」と口にするように、イタリアの主要金融機関や会社の本社が集中している。日本の商社が事務所を設置しているのもミラノである。

ミラノに最初の集落がケルト系種族（ドイツ南西部）によつて作られたのは前4世紀頃だが、史料に初めて現われるのは前222年のローマ人によつて占領された時だ。

3世紀以降ゲルマン諸族の活動が活発化し、ミラノの戦略的重要性が増大してから、その経済的、政治的發展が始まった。北イタリアの行政的中心となつたミラノは、4世紀を通じて事実上の西ローマ帝国の中心となつた。

コンスタンティヌ大帝がキリスト教を公認した「ミラノ勅令」は313年である。

次いでミラノが栄えたのは11～13世紀で、初めはミラノ大司教の主導により、続いてコムーネ（自治都市）の形成によつて行われた。この發展の経済的基礎は商工業の發達で、やがて神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ1世と対立するに至った。

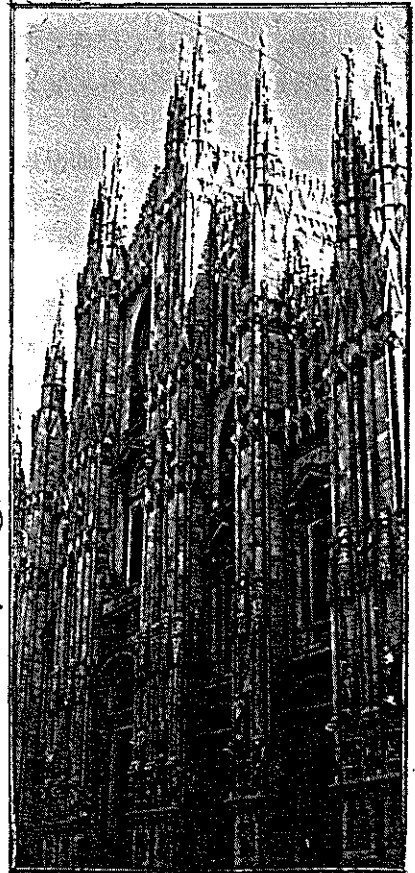
彼は1162年ミラノを占領して破壊したが、やがてミラノは力を盛り返してレニャーの戦いで皇帝軍を破り、その後ミラノの権力は内部抗争に陥った。

14～16世紀のルネサンス時代はヴィスコンティ家とスフォルツァ家の領主時代で、16世紀まで黄金時代が続いた。約500年を費やして完成したゴシック様式のドゥオーモ（大聖堂）は、ヴィスコンティ家の時代のもので、ミラノの代表的な建築物である。（右が其のドゥオーモ）

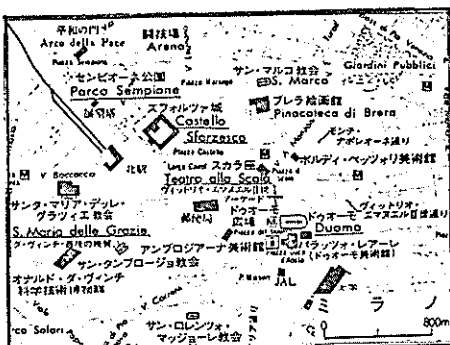
これはローマの聖ペトロ大聖堂とセリビア（スペインのアンダルシア地方）の大聖堂について、現存する世界最大の聖堂の一つとなつている。私は幸いにも三大聖堂を拝観できたのである。

ヴィスコンティ家時代はミラノを新しいアテネにすべく、当時の天才達、レオナルド、ダ・ヴィンチやブラマンテ等を招いた。此の時期のものが「最後の晩餐」でありスフォルツァ城である（写真は後頁）

1500年以降、スフォルツァ家の支配はフランス王ルイ12世によつて脅かされるようになってしたが、やがてフランス軍は撃退された。しかしスフォルツァ家の断絶の結果、ミラノは1535年にカルル5世のスペイン勢力の支配下に入り、スペインの支配はスペイン継承戦争で1706年、オーストリア軍の手に陥るまで続いた。ミラノはスペイン統治時代に衰退したとはいえ、北イタリア最大の都市であり商工業の中心であった。



18世紀初めに始まるオーストリアの支配は1859年まで続き、19世紀の前半には48年3月の「5日間の蜂起」に代表されるように、ミラノ市民のオーストリア勢力に対する抵抗が激化した。イタリア統一後には北イタリア工業地帯の中心となり、更に全国の経済の中心になる素地が形成された。第二次大戦の空襲でミラノは大被害を被ったが、戦後は急速な復興発展を遂げた。



発見光 (右上はミラノ地図)

ミラノ市街に通じる数条の道路には高層建築、近代建築が林立し、世界の大都市に引けを取らない殷賑を極めて雄強な迫力を感じた。石畳の道路を走るバスは市電の間を抜けるように進み、フランス人の運転手は薄暗いビルの谷間で何回となく道を尋ねていた。

中心街に進んだもののガイドの持っているホテルが判らず、土地不案内から小一時間も経過してしまった。縦横に小路の多い市街を地図を片手に運転する苦勞に同情を寄せながら、観光時間の削られる事に苛立っていた。コモから近距離に拘らず目的のホテルに到着したのは10時であつた。

2、3日前までは寒波の来襲で氷点下20°まで下がったらしいが、幸運にも今日は快晴に恵まれて、名にし負うミラノ観光に絶好の日和であつた。

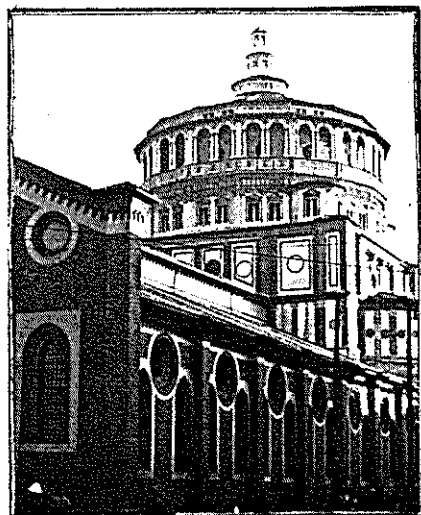
新市街を通過するモスコ通りは1943年に破壊され、その跡地にアメリカン・スタイルのビルが高さを競い、ナポレオンが35年間支配した遺跡は円形競技場になっていた。(上の地図参照)

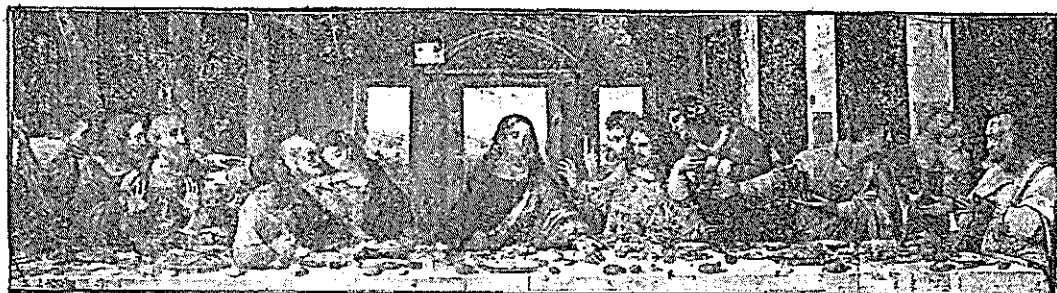
大阪と姉妹都市であるミラノは人口も同じく180万で、ミラノ州は500万、日本人居住者は5000人、留学生250人のうち音楽関係の者が断然多いのもミラノらしい。古い町並みに入ると芸術の町の空気が漂い始め自然に引き付けられて行った。

「サンタ・マリア・デッレ・グラツィ教会」

この教会はミラノのルネサンス建築の代表(1466~90、ソラーリ作)で、未だにゴシック様式の跡を残している。ゴシック様式は中世後期の一般キリスト教芸術様式で、イタリア人がゴート(ゲルマン民族の一派)の芸術を此のように呼んだことに由来し、ロマネスク様式(地方化されたローマ様式の意で、ゴシック以前の10~13世紀に行われたキリスト教芸術様式)を発展させたのである。

右の写真のように建築は高さを増し、屋根が弓形に作られ、支柱支壁や飛梁などを使用してそこに最高度の光と空間を求め、ステンドグラスは天国への





憧憬を現わし、彫刻・絵画も神と自然の秩序に従うように力強い表現を示していた。

教会前の左側の入口を入ると、その奥にルネサンスの巨匠「レオナルド・ダ・ヴィンチ」(1452~1519)が42歳の時から2年間を費やして画いた、有名な「最後の晩餐」のテンペラ画の壁画が、漆喰塗りの壁に画かれていた。(上の写真)

壁画は湿気のために残念ながら随分剥落していたが、厳粛且爛熟した芸術の粋を尽くし、名画は生々として精気を発散し、我々の目に焼き付き心に刻まれたのであつた。

然し乍ら世界で絵画を理解できる人は僅少ではなからうか。私も亦、理解したふりをして一人に過ぎないかも知れない。ただエルサレムのシオン丘に建っていた最後の晩餐の部屋を思い浮かべていたのである。

なお第二次大戦では爆撃を受けたが、この建物は奇跡的に被害を免れ、絵に遠近感を与えている窓ガラスも残っていた。

「最後の晩餐」の壁画の反対側の壁には、キリストの^{パレット}にされた壁画が描かれ、これらの絵は修道院の食堂の壁に描かれたものである。

余韻が暫く抜けないうちに外に出ると、ミラノのガイド・ブック(日本語版)を売っている商人が日本語で叫び、飛ぶように売っていたが、15年前にイタリアを訪れた時には想像も出来なかつた光景である。

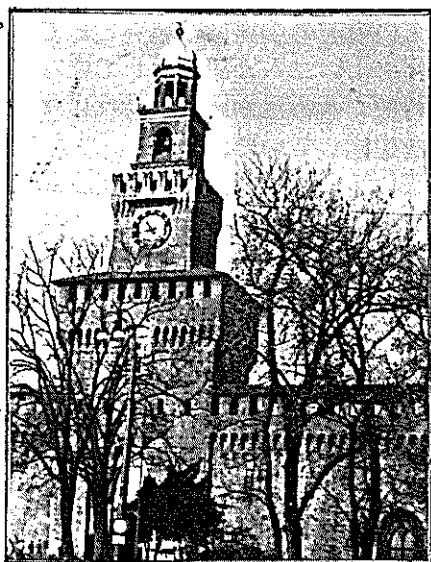
バスに乗り込んで治乱興亡の歴史の街を進み、教会と本屋、金融機関が軒を連ねて並らぶ一方では、盛んに地下鉄工事が行われていた。地下には運河があり、古跡の多いことから工事は遅々として進まないようである。

「スフォルツァ城」

バスはスフォルツァ城前の広場で停車した。ルネサンス時代のミラノ領主であつたスフォルツァが、15世紀に造った方形、レンガ積みの大きな城で、前領主のヴィスコンティの城を改造したものである。

ミラノ城とも云われる此の城は、その後スペインの総督も改築の手を加えており、その後は種々に利用されたが、現在は美術館として絵画、彫刻、工芸の蔵品を公開している。

正門は右の写真のような時計塔が聳え、其の両翼の角は円形の展望塔となっている。残念ながら時間が許さず内部の観覧は割愛されてしまった。



「スカラ座」(右の写真)

ミラノ城の南東にある世界に名だたるスカラ座前の広場で下車した。(28頁地図)

ミラノは音楽的には重要な都市である。ミラノの守護神・聖アンブロージョ(343~97)は4世紀、ミラノの大司教の地位にあつたとき祈祷の聖歌を創始し、現在もミラノでは此のアンブロージョ聖歌が歌い継がれている。オペラの響きが虚空に充滿している感じをうけながら、広場の前に立った。

今日、音楽家たるものの凡ての夢は、オペラ歌手として脚光を浴びる事だろうと、堂々として建っている殿堂を眺めていた。

スカラ座は其のメッカ的な存在として世界のオペラ界に君臨し、1778年、サンタ・マリア・デッラ・スカラ教会に建てられたもので第二次大戦で戦災にあつたが、修復されて今日に至っている。

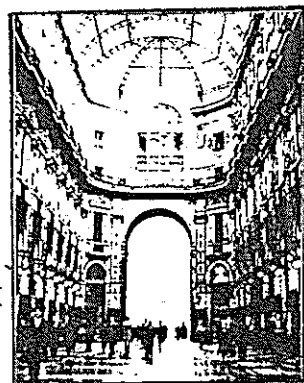
附近の市街にある商業銀行は世界で第6位を占め、保険会社等も数多く建ち並び、蜘蛛の巣のようになっていく道路は古代の名残りをとどめていた。一行は広場からエマヌエル2世アーケードへと案内された。



「ヴィットリオ・エマヌエル2世アーケード」

1877年に建設されたアーケードは、右の写真の通り天井がガラス張りになつている十字形の通路である。両側には商店やカフェ、レストラン等が連なり、万街は銀ぶらのように群衆で埋まり、若者のデートの場所に相応しい所だ。

入口の前の広場には颯爽として黒マントに黒い帽子を被り、恰幅のよい二人が毅然として立っていた。警官であろうか軍の将校であろうか。若い時代にマントを着用して闊歩したことを想起していた。



吸い込まれるようにアーケードの中に入り、求心的な心理状態で眉尻を吊り上げながら、一時の散策を楽しんだのであつた。

「ドゥオーモ」(大聖堂の写真は27頁)

此のミラノ大聖堂はイタリアに於けるゴシック建築の代表的な教会で、1386年にヴィスコンティ家のもとに工事が始められた。この工事には北イタリア、フランス、ドイツの大工が携わり、15~16世紀と工事が引き継がれ、正面(27頁)が完成したのは19世紀になつてからである。都合602年の歳月を要したというから、長期の工事の為か、黄色い正面は他の部分と調和していない恨みがある。

教会の規模は奥行157m、幅は最長部で91m、聖母マリア像の立つ尖塔の高さ108m余りである。更に目を見張る尖塔の数は135本、内部の大黒柱は52本、

162ヶ所に窓ガラスが設けられて、ステンド・グラスも壮大美麗であつた。子午線が地面に貼ってある大理石にモザイクで描かれ、パイプオルガンのパイプの数は13、200本で世界一である。

自己を神格化した彼のナポレオンは、この教会で戴冠式を挙行したと云われているが、荘厳で格調高い教会は自ずから畏敬の念を抱かせ、己を忘れて敬虔な神への祈りを捧げる信徒の姿は、高尚な芸術のようであつた。殉教者は確かに完全な幸福な人だと羨望した次第である。

教会前の乗馬姿の銅像にカメラを向け、再び振り返って大空に聳える尖塔を仰ぐと、此の時代の足音が聞こえて来るような感じを受けていた。私にとっては大きな磁石となつていた北イタリアの劈頭に、先ず神霊なドゥオーモ参観の宿志を果たして、歓喜に胸を震わせながら、立ち去り難い思いでバスに乗車した。

1時に昼食を終えて沃野の中を駆けるように、400km彼方のベニスへと疾走した。

ヴェネツィア

ミラノからの高速道路にゆられながら睡魔に襲われていた。移り行く車窓風景はフランス、ドイツ顔負けの葡萄畑が広がり、ガイドの説明では赤ワインの産地であつた。

ヴェネツィアに近づくにつれて、アドリア海の温暖な気候の影響で麦の芽は高く伸び、自然界の不思議な威力と波乱変転の歴史を想い浮かべていた。

騒々呼として民族争奪の坩堝となつたイタリア北部は、温かい繁榮の陰に冷たい分離闘争があり、その爪痕が残っていないかと興味を抱いて眺めていたのである。

ヴェネツィアの概要

水の都ヴェネツィア（英語はベニス）はアドリア海の浅瀬に作られた118の小さな島、150の運河、そして645の橋からなっている。文明都市で車の走らない唯一の町で、交通機関は水上バス、モーターボート（タクシ）、そしてゴンドラである。

ヴェネツィアの起源はイタリアの他の主要都市と異なり、西ローマ帝国崩壊後のことであり、568年のランゴバルド族（ゲルマンの1部族）のイタリア侵入に脅かされた、アドリア海の住民が、海上の島や干潟に避難して定着した時に遡る。

それまではこれらの島々や干潟には、漁民や製塩業者が僅かばかり働きに来ていたに過ぎなかった。

移住民たちは建前としてはビザンチン帝国（東ローマ帝国）に属しながら、地理的遠隔の為に厳しい支配を免れ、「護民官」を選出して事実上の自治を行い、697年には総督を選んで共和国を樹立した。

“【護民】我々の陸軍士官学校時代には上級生が護民と称して新入生を指導したが、この語源は此处から来ているのではないか。イタリアに生まれた護民官は、共和制初期に設けられた官職で、貴族と平民との抗争に当たり、平民階級の権利擁護を任務として設けられた。平民から選出された其の身分は神聖不可侵であつた。”

8世紀に入ると内紛のため共和国としての発展は停止したが、外敵の脅威に曝され

て自ら団結し、836年にはサラセン人（アラビヤ民族の一派）の、900年にはマジャル族（ハンガリー）の攻撃を撃退した。しかし991年には彼等はサラセン人と商業上の条約を結び、従来の武力による抗争から、貿易の実利を目的とした平和政策に移った。

やがて十字軍の往来に便乗して、ヴェネツィアは文字通り東西貿易の最大の中継地となった。一方、国内では富裕な商人貴族の階級が頻りに政治権力の獲得を策し、12世紀中頃から13世紀の末にかけて、政治権力を握った「大評議会」も力を失い、名義上は共和国でありながら、事実上は寡頭貴族政治の国に変わった。

13、14世紀は貿易の競争相手ジェノヴァとの闘争に終始したが、1378～81年の戦争で遂にジェノヴァを屈服させた。しかし15世紀の中頃に至って一段と激化したトルコの攻撃により、ヴェネツィアの繁栄は大きく傾いた。

それでもヴェネツィアは領土拡張策に固執し、1481年にはフェララ公国（イタリア北部、ポー川流域）と開戦するに至り、遂にヴェネツィア打倒を目指す「カンブレー同盟」（1508頃）を招来して、孤立無縁の状態に陥った。

さらに15世紀末の新大陸発見とインド航路の発見とは、東西貿易の中継地としての地位を失い、衰運のヴェネツィアはここに致命的な打撃を蒙った。

1797年、ヴェネツィア共和国はナポレオンに征服され、領土の大半を奪われた。1866年、プロシア＝オーストリア戦争でオーストリアが敗れると、オーストリアの支配下にあつたヴェネツィアは人民投票の結果、既に1861年に成立していたイタリア王国に編入され、今日に至った。

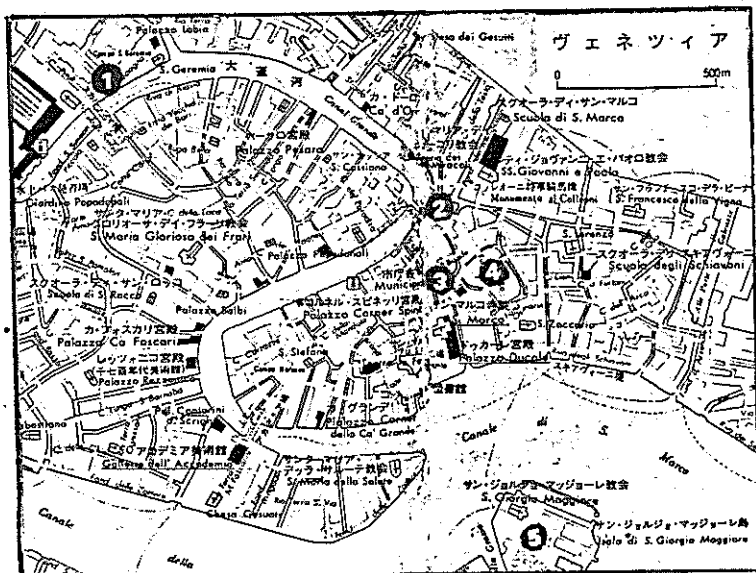
この間、823年にはアレクサンドリア（エジプト北部）より、聖マルコ（イエスの弟子でパオロに従って伝道し、ペトロにも従事）の遺骨が運ばれ、後に現在のサン・マルコ寺院が建設された。この福音伝道者の象徴が獅子であつたことから、金獅子が此の共和国の紋章となつている。

十字軍の基地であつたヴェネツィアは香料、織物、宝石などの東方貿易に手がけ、東方に旅行したマルコ・ポーロも此の町の人であつた。

観光

アドリア海にかけられた橋を渡りながら、西に傾いた夕日が海面に映る美景を眺めて、午後4時30分、サンタ・ルチア駅近くのグランドホテル・プリンチベに到着した。

アドリア海の女王のベニス、海の上に造られた人口9万の街は網の目のように運河が走り、夢の景観が展開していた。



ホテル（前頁地図①）で休憩の後、駅前の乗船場からNo. 1の水上バスに乗船した。

唯一の交通機関である船上から、好奇心を抑え切れない眼で兩岸を凝視していた。特別な旅情をそそる大運河には、行き交う水上バスの他に遊覧船や小舟が走り、彼の有名な

遊覧のゴンドラ（右下写真）は冬期のために多くは繋留されていた。

未知の世界にふれる感動の虜になっていると、眼前にリアトル橋が大きく浮かんでいた。（右上写真）

1592年に建った橋は長さ48m、幅22mのアーチで、上部は店が並んでいる。此の商店街を観光する時間はなく、格安旅行の嘆きであった。

釣瓶落としの秋の日は短く、街灯の光が水面にきらきらと映り始め、虎視眈々と写真に収めたい一心でシャッター・チャンスを狙い続けた。リアトル橋（地図②）を過ぎて直ぐ我々は下船し、縦横無尽の網の目のような狭い道路を歩いた。モロッコの迷路であるメディナと同様で、一人では全く自信のない道だ。

土地の狭いことから此の様に狭くしたのか、或は夏の強烈な日光を遮り、日影をつくるために狭くしたのか、昔のベニスの商人の智慧であろう。

生き馬の目を抜くような迷路は股賑を極めて商店街は金銀瑠璃で飾られ、人の波に流されるようにサン・マルコ広場（地図③）に押し出されて行った。

「サン・マルコ広場と寺院」

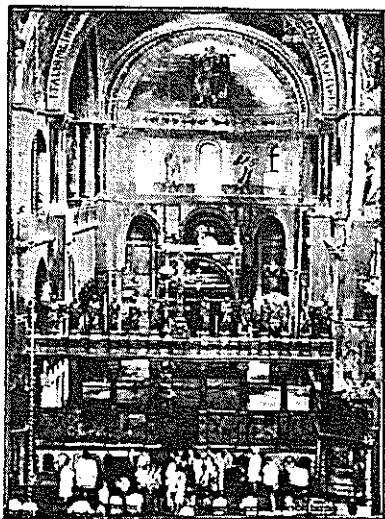
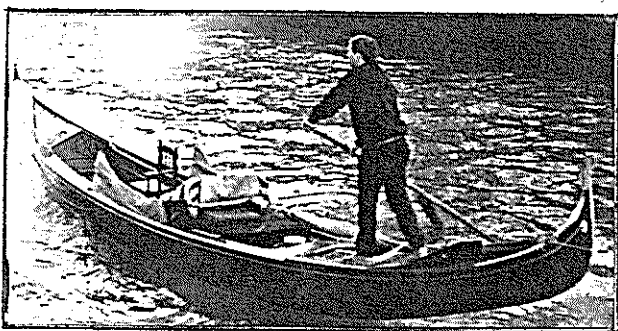
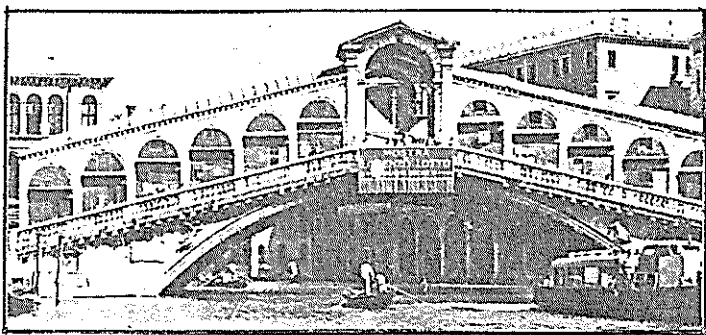
世界で最も美しい大理石の此の広場はベニスの中で、柱列の回廊が三方を取り巻き、東端がサン・マルコ寺院である。（地図③）

その向かって右側の大統領官邸から大運河に通じ、海上にヴェネツィア・サミットが開催されたマジョーレ島（地図⑤）が煌々と照らされていた。

広場に使用された大理石はイタリア産ではなく、遠くギリシャ、エジプトから運んで来たもので、昔のベニスの経済力の偉大さを表現していた。

ベニスの地下には運河が流れて1年間に2、5cmも地盤が沈下し、何れは埋没する運命にあるそうだ。

大寺院も例外でなく、地下に松杭を打ち込んで其の数は数え切れないと云う。寺院の門のモザイクは



傾斜してガタガタの状態であつた。満潮時の或る時は広場にも50cmほどの水がたまり、商店は慌てて二階に引っ越しするという自然条件に悩まされているようだ。

寺院の内部（前頁の写真）は小さな照明だけで薄暗く、充分に拝観できなかったのは残念至極であつた。

11～15世紀にかけて作られたマルコ寺院は、ロマネスクとビザンティン様式の混合した建築で、上の5つの円蓋は東方的である。前記したように福音伝道者の聖マルコの遺骨が納められ、世界の信徒の視線が注がれているのである。

寺院の中に入るとガイドは声を殺して説明を続けたが、彼の態度は神聖な教会を冒瀆してはならないと、率先して範を垂れていた。

「ガラス工場」

サン・マルコ寺院の裏手にある小運河を渡ってガラス工場に案内された。（地図④）ベニスにはイギリス、チェッコと共に世界の三大ガラスの名産地として知られている。

先ず製造課程の説明と実験が行われた。1300°に熱した灼熱のガラスを炉から取り出し、小さな小手一つで瞬間的に作る技術に驚嘆の眼を向けていた。精巧に作り出した製品を冷却するのに24時間を要し、種々の色に着色する技術は秘中の秘で、混入する酸化物によつて多彩な色が出る事は不思議である。多分酸化物の種類で色が変わる宝石と同じ原理だろう。

展示即売場の店員は全て流暢な日本語を話し、それに釣られて絢爛豪華な製品に食指が動くのは当然だ。優柔不断は禁物とばかり記念に数点求める事にした。

「温かい人情」

東洋の香水が西洋への文化の架け橋となつたヴェネツィア、ベニスの商人が東洋の品々を輸入して流行させたベニスに心が引かれ、情緒あふれる雰囲気や堪能したいと幻想に陶酔していたものの、瞬間に短時間の観光は時間切れとなつてしまった。

大体に於て、ミラノとベニスを一日で観光すること事態が無理な話で、安かろう悪かろうを承知では文句も云えない。

再び国際色豊かな繁華街に戻り、迷路の雲集霧散する雑踏をくぐり抜けて乗船場に辿り着き、もう少し時間があればと溜息をもらしながら、ゆっくりと波一つ立てずに流れる、真っ黒な水面を見つめていた。

回顧すると、15年前にイタリアを訪れた時は西洋の没落という風評だったが、今や旭日昇天の勢いで隆盛を極め、榮枯盛衰は浮き世の掟どころか、測り知れない底力を感じたのである。

No.1の水上バスに乗船し、申し渡されていた通りに5つ目の所で下船した。然し乍ら婉婉とした大海が広がっているばかりでホテルらしい建物は見えない。ホテルの名前を示して尋ねたが要領を得ず、言葉の通じないことは不安な心理を駆り立てて、浮



かれ気分は吹き飛んでしまった。タクシのいない街だから尚更であつた。

不安そうな顔付で下船場に戻り係員に尋ねると、慇懃な態度でこの船に乗るように指示してくれた。水上バスの乗務員も見知らぬ旅人の私に、親切に対応して自分に任せておけと手真似で合図し、10ヶ所ばかりの船着場を過ぎて漸くサンタ・ルチア駅で下船する事が出来た。

未だ間違いの原因は判明できないが、ベニスの人達の温かい心に感銘し深い思い出となつた。地理は経済をつくり、経済は人情をつくと謂われるが、全く同感である。そして人情が歴史をつくり、世界を支えるのではないだろうか。

フィレンツェが衰退した後、ベニスがルネサンス文明の中心となつた其の遺産が、今も尚、熱い親切心となつて受け継がれている感覚であつた。

11月27日(日) 晴

朝食の弁当を手にしてホテルを7時に出発したが未だ暗黒の世界である。茫々とした運河の灯はロマンチックに我々を見送るようで、岸を洗う波音一つ聞こえない静けさであつた。昨夜のサン・マルコ広場からの帰途、更けゆく夜を迷い迷って帰還したことが脳裏に浮かび、寂寥の中を西進した。

東天が白み始めて教会の塔が瞭然と眼に映り、田園地帯は薄い残雪に覆われて寒波来襲の跡を残していた。次第に赤みを帯びた太陽は一斉に水蒸気を気化させて、今日も上天気恵まれたのである。

ポー川の橋梁を通過したボローニャ附近の山々は白く輝き、幾つかのトンネルを抜けた盆地の底に工業地帯が展開し、市街の白い屋根雪と丘の紅葉とが相俟つて格好の美景であつた。

「ボローニャ」

アペニン山脈の北側にある此の街は、古い大学都市として多くの文化遺産をもっており、現在は北イタリアの有数な工業都市である。又、ソーセージで有名な食通の街でもあるそうだ。

古代イタリアの一地域であつたエトルリア以来の歴史を誇り、11～14世紀にかけては自治都市、16世紀以降は教会領となつた。大学の創立は425年の昔に遡り、自治都市時代にはヨーロッパ各地から学生が集り、13世紀には学生数は1万人を数え、中世ヨーロッパの学問の一大中心地であつた。

大学の特色としてはローマ法、神学、そして科学に秀で、マルコニー(1874～1937。伊の電気技師で無線を発明)も此の学校で研究していた名門校である。

ボローニャを通過して、この南方80kmのフィレンツェへとスピードを上げた。



フィレンツェ

平野は僅かにピサ附近だけという山の多いトスカーナ地方（35頁地図参照）の、アペニン山脈と丘陵とをぬって流れるアルノ川の流域に位置している。フィレンツェとは「花の都」の意味で、英語ではフローレンスという。

ルネサンスの花が開いた都という此の町は、現在イタリア第8番目の50万都市で、町そのものが美術館といってもよく、優雅な町のたずまいと相俟つて世界に類のない美しい街と云えるだろう。

ルネサンスの遺産は数え上げると切りがなく花の聖母教会のドゥオーモ。ルネサンス貴族の豪華な邸宅、ルネサンス美術の殿堂、ウフィツィ美術館やミケランジェロの彫刻など、次ぎから次ぎへと応接にいとまのない街である。

概要

古代ローマ人が建てたフィレンツェは小さな宿場町で、313年には司教が居たことは知られている。6世紀までにゴート人（ゲルマンの一派）、ビザンチン帝国、ランゴバルド人（ゲルマンの一派）に順次占領されたが、その後この町が再び繁栄する11世紀の末頃まで、全く知られていない。

11世紀の後半に女侯マケルダは町の住民を従えて周辺の封建諸侯と争い、又、住民にはかなりの自由を許していた。1115年にマルケダが死亡し、その遺産をめぐる皇帝と教皇（法王）の間に紛争が続くと、これに乗じて町は自由なコネーム（都市国家）の体制を整えて行った。

13世紀に入り、諸豪族の権力闘争のために町は分裂し、皇帝派と教皇派の抗争が合流して紛争は複雑化した。しかし此の間も町の経済は発展を続けた。羊毛商のギルド（商工業者の同盟団体組織）は特に強力となり、商人階級はやがて政治の面にも主導権を握るようになった。1282年にはギルド総代によつて政庁が樹立されている。

13世紀頃には、イギリス王に対する貸倒れに始まった大恐慌や、ペストの大流行などが加わって動揺したが、七つの強大なギルドによる寡頭政治が確立した。この間外部に向かってはミラノと連戦してこれを降し、又、1406年にはピサを奪取して待望の海への出口を獲得した。

薬種業から身を起したメディチ家は金貸業で巨万の富を蓄え、下層の民衆の味方でもあつた「コシモ・デ・メディチ」が民衆と手を結び、名目上はともかく事実上の独裁者の地位についた。彼の孫の大ロレンツォ（1469～92）は、共和政治を名ばかりのものにして、巧みな外交によつてフィレンツェをイタリア半島内の勢力均衡の要にすることに成功した。

ロレンツォの治世にはイタリア・ルネサンス文化が最盛期を迎え、フィレンツェの商業活動は全ヨーロッパを風靡とた。しかし彼の不肖な子ピエロは1494年、フランス王シャルル8世に屈辱的な譲歩をしたため、激怒した市民によつて一族と共に追放された。

1531年、フィレンツェに帰還したアレッシンドロ・デ・メディチは、神聖ロー

マ皇帝カルル5世から「フィレンツェ公」の称号を与えられたが、その後、従兄弟のロレンツィーノに殺害された。

次いで傍系のコシモ1世が位に就いたが、彼は1569年、教皇ピウス5世から「トスカナ大公」の称号を受け、以後メディチ家は1737年の血統が絶えるまで、トスカナに君臨した。

フランス革命に際しては時の大公は中立を宣言したにも拘らず、フランス軍に追われて一時オーストリアに逃れた。

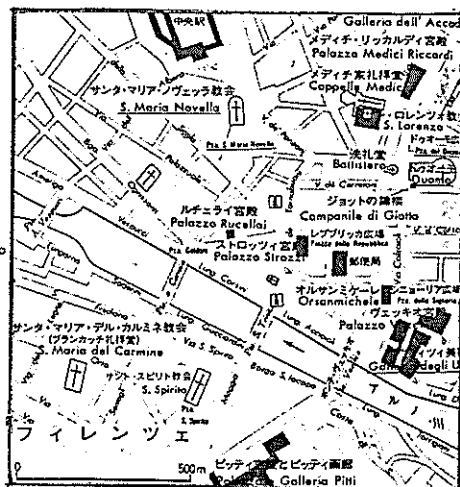
次ぎのレオポルド2世も民衆に追われて逃亡し、1849年、オーストリア軍に支えられて帰還し復位したが、やがて起ったイタリア統一戦争のさなか遂に廃位され、1859年、オーストリア支配は終わりを告げた。

1861年のイタリア王国成立と共にトスカナ地方は王国に編入され、65年から70年までフィレンツェ王国の首都となつたが、ローマがこれに取って代わった。

第二次大戦中フィレンツェは非武装都市の宣言を行ったが、市内外は被害を受け、撤退するドイツ軍はアルノ川の橋を爆破した記録がある。

文学では13世紀後半にダンテ（1265～1321、詩人）が現われ、美術では14世紀にジョットが活躍し、建築ではブルネレスキ（1377～1446）、レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452～1519）、ミケランジェロなどの巨匠が、彫刻ではギベルティやドナテロ（1386～1466）などと、ルネサンスの代表的人物が続出している。

複眼光（上は市内地図）

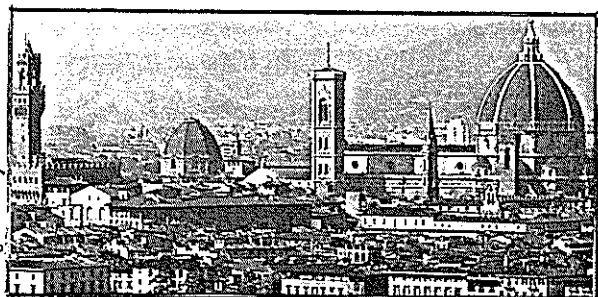


「洗礼堂」（下及び次頁写真の8角形の建物）

ドゥオーモ（花の聖母教会）前の8角形の洗礼堂は11～13世紀のもので、白い濃緑色の大理石の外装は11～12世紀の作である。清楚で落ち着いた洗礼堂は歴史的な魅力と過去の栄光を感じさせ、ギベルティ（1378～1455、彫刻・建築家）作のレリーフ（浮彫）の青銅扉は我々の目を釘付けにしていた。この扉がミケランジェロ（1475～1564、彫刻・建築家）によつて「天国の扉」と名付けられた有名なものだ。1425年から28年間という長年月を要した此の傑作は、旧約聖書の挿話が10場面に分かれている。

この扉から内部に入ると其の円蓋は、「最後の晩餐」「創世紀」（何れも旧約聖書の項目）などを題としたビザンティンのモザイクで飾られ、フィレンツェに於けるルネサンスの盛美に単純の眼を奪われるのである。

（右は洗礼堂とドゥオーモの全景）



「ドゥオーモ」

別名を「サンタ・マリア・デル・フィオーレ」と詩的に呼ばれている。

「花の聖母教会」はフィレンツェ共和国の宗教の中心で、白とピンク色と濃い緑色の大理石で幾何学的模様飾られた外部の美しい建物である。

1296年に工事が始められ、高さが106mの大円蓋はブルネレスキの設計によって造られた。(1420～34)なお正面の部分は19世紀になつて完成されたもので、千鈞の重みを持つように聳えている。(右の写真)

内部に入ると三廊式(身廊部と側廊部が二列の柱列によつて分けられている)となつていて、柱と柱の上が廊下となつている珍しい建物だ。

大円蓋の下は八角形を形づくり、単純で清澄な巨大な空間は、外部の多彩な華やかさとは対照的である。

素晴らしい壁画やレリーフに飾られた教会中央の祭壇(1497)は、町の本山らしい神々しさが漂い、敬虔な祈りを捧げている信徒の姿は、幸福そのものの感じてあつた。

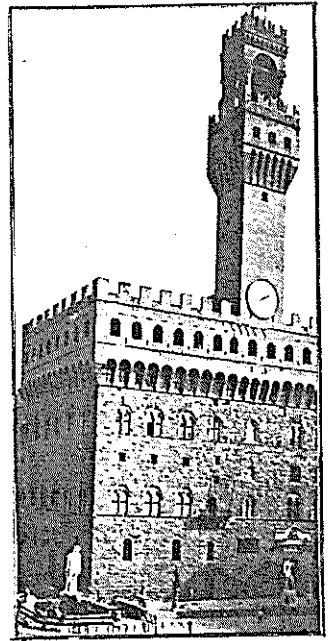
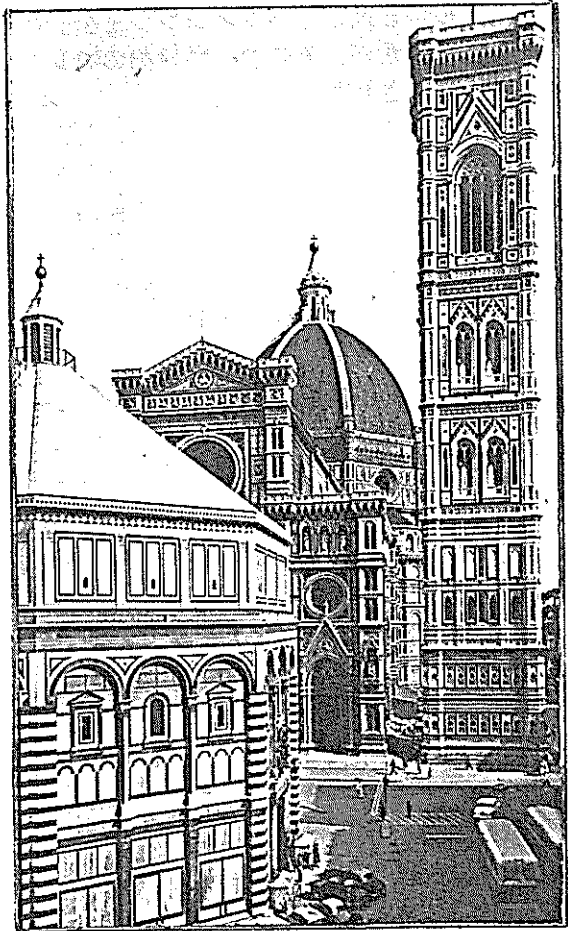
宗教は異教徒の我々にさえ心の安住を与えるようで、精神的な美しさは物質的な栄誉に優り、ルネサンスの含蓄の深さが肌に感じて来たのである。

「シニョリーア広場」

フィレンツェ共和国の政庁舎であつたヴェツキオ宮殿の前の広場で、支配すると云う意味を持っている。〔右はシニョリーア広場とヴェツキオ宮殿(時計のある建物)〕

フィレンツェの中心であつた広場は13～14世紀に開かれ、世界で最も歴史と美術に富んだ広場といわれている。(ヴェツキオ宮殿は現在は市庁舎となつている)

広場は現在工事中で掘り起こされていたが、ミケランジェロのダヴィデ(1010～970B.C. ユダヤ第2の王で予言者。キリストの祖先。この広場の像はコピーで原作はアカデミア美術館蔵)の像などが立っていて、恰も野外彫刻美術館の感を呈していた。



宗教改革の先駆者であつたザヴォナロラ（1452～98）が、教会の腐敗とメディチ家の専政に反対して民主的改革を断行し、フィレンツェに厳格な神権政治を施行して、教皇により異端者として火刑に処せられたのも、この広場であつた。

時が移りムッソリーニがヒットラと会見した場所として、我々の記憶に残っている所でもあるが、求心的な磁場を形成した歴史の広場は、生々流転して血なまぐさい臭いは今はなく、此処から無限の平和を見つけて欲しいと念願して去つたのであつた。

「ウフィツィ美術館」

ルネサンス絵画の最も重要なコレクションで有名な美術館であり、ルーヴルでも此のようなイタリア・ルネサンスの美術は見られないだろう。

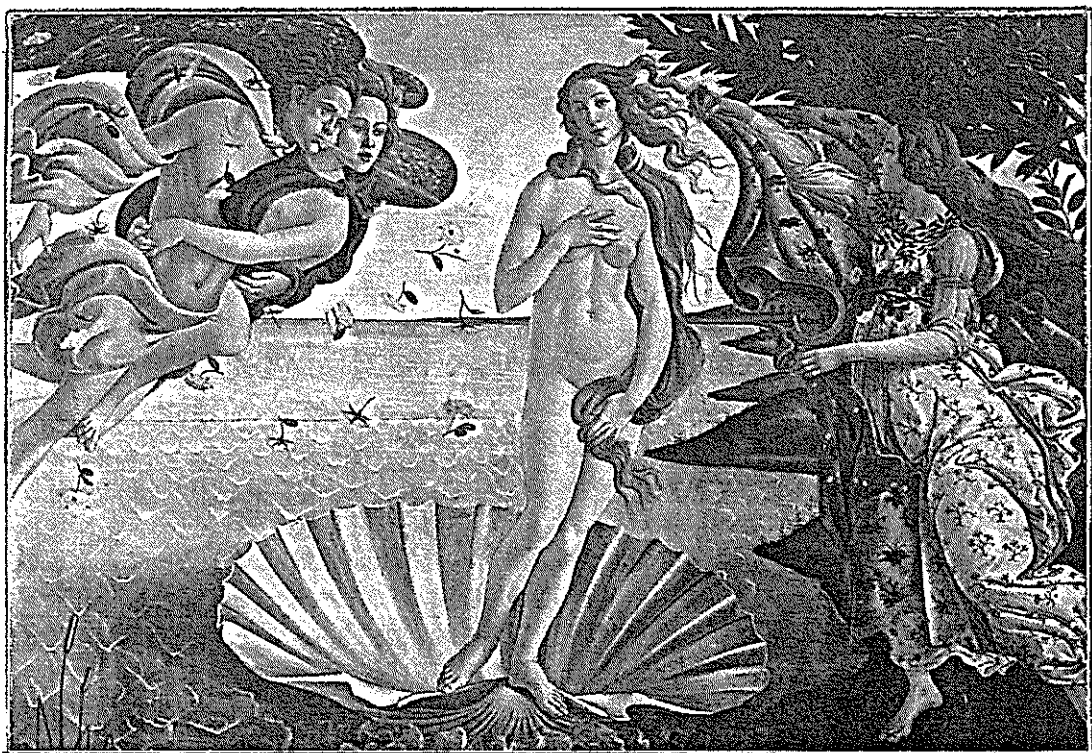
建物はヴォザーリ（1511～74、画家・建築家）によつて1574年に建てられ、メディチ家の事務局のあつた所である。

2階にはデッサンと版画の部屋もあり、3階は絵画館となつていて、ボッティチェリ（1440～1510、画家）の「春」と「ヴィーナスの誕生」（下の写真）、レオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」は特に有名だ。

一行は順を追って案内されたが、メディチ家やフッガー家のコレクションで埋めつくされ、ギャラリーは人の波が錯綜して人の息で蒸れそうであつた。一世を風靡したルネサンスの巨頭たちの作品に目を奪われ、陶醉しているのであろう。

門外漢の私には窺い知る能力はないが、声なくして人を呼ぶ芸術品から、作者の息づかいが伝わって来るようで、垂涎三千丈と形容したい美は永遠の幸福を与えていた。

絵画は宗教画が多く、何物にも左右されない純粋な幻想を表現しているようである。

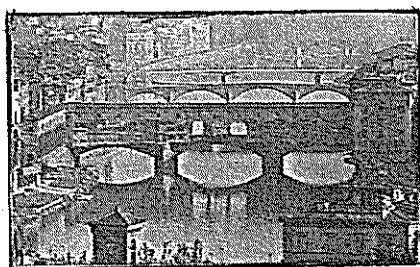


メモをした順序に主なものをあげると、第2室にはチマブエ（1240～1302）作の聖母子、第3室にはマルティーニ（1283～1344）作の聖告、第7室にはヴェネツィオーノ（1400～61）作の聖母子と聖者、第8室にはボッティチェリ作のヴィーナスの誕生、第15、16室にはレオナルド・ダ・ヴィンチの3博士の礼拝と受胎告知、第26室にはミケランジェロの聖家族が掲げられ、爛熟した芸術の頂点の物ばかりであつた。

傍観的な訪問者の私でさえも、数奇な星の下に生まれた時代の激動に翻弄される人間模様の描き方に、芸術の香りを与えられるのであつた。激しく燃焼した彼等の一生は誠に美しい極みであり、努力と熱意なくして成功を遂げた偉業は、未だ嘗つて一つもなかつたのである。

回廊から市街を眺望すると、アルノ川にかかるポンテ・ヴェッキ橋（37頁地図参照）が真下に見えていた。

遠くにはピッティ宮殿のドームやサント・スピリト教会が眼に映り、ルネサンスの町の景観が手に取るようで、興奮のさめない一時を過ごしていたのであつた。（右はポンテ・ヴェッキ橋）



「ミケランジェロ広場」

バスはアルノ川を渡つて坂道を登り、糸杉やオリーブの繁る林の中を通過した。金城湯池の城壁が延々と続いて、往時の首都の遺物が今も尚その威容を残し、有為転変は世の習いだと泰然と構えていた。

市の東南にある丘の広場はフィレンツェの市街を眺める絶好の地で、花の聖母教会や街並みの赤い屋根、ポンテ・ヴェッキ橋等、印象に残る50万都市の景観を一望のもとに瞰下できた。

広場の真中にはミケランジェロのダヴィデ像（コピー）が市街に向かって立つており、中世を謳歌した躍動感の溢れる丘で、空気を胸一杯吸い込んだのであつた。

「夜の散策」

ヴェネツィア観光は時間がなくて失望落胆だったが、今日の「花の都」の見学は幾分余裕があり、概ね宿望を果たした感じであつた。芸術には私のような無知と呼ばれる敵がある。然し乍ら野蛮な私のような者の心を和らげる力を持っており、夜の芸術の街も我々を誘っていた。

夕食後、友人3人と連れ立って市の中心部へと足を運んだ。ホテルの前を流れるアルノ川、煌々として夜空に映る街灯につられてポンテ・ヴェッキ橋に向かった。

花も埃にまみれるような賑わいが左手に拡がり、自然に群衆に合流されるように吸い込まれた。昼間案内されたシニョリーア広場に通じる商店街で、フローレンス銀座という通りであつた。赤い服を着たサンタークロスが小さい白馬と一緒に、雑踏の街角に立っていて人目を引いていた。犬ほどの大きさの馬は珍しく、早速写真に収めて思い出の記念とした。特産の品を展示した明るく美しいルネサンスの街を、至福の境地で散策した印象は強く刻まれている。

11月28日(月)

晴

ピサ

星の数ほどある文化遺産の町、フローレンスの肌寒い朝の外気を浴びて8時に出発。今日はピサまで約100km、ピサ～ジェノヴァは約200km、ジェノヴァ～ニース(仏領)は約200kmの、合計約500kmの強行軍である。

欧米人の一日の行程は約200km程度で東洋人は長距離の習慣があり、アジア人は忙しい旅をするという噂があるそうだ。彼等欧米人の東洋旅行は少なく専ら欧米地域の旅行だからであろう。我々年代の者は未だ貧乏根性が残っているからだろうか。

フローレンスの凱旋門を眺めて進む街道は、イタリア第8番目の大都市の混雑ぶりで、昨夜の繁華街の余韻を思い出していた。アルペン山脈を左右に望んで高速を西に快走し、霜で覆われた田園の中を突っ走的过程中特に目立ったものは、地名揭示の標識の多い事であつた。それだけ市街地が発展している証拠である。

大工場は郊外に集中して其の立ち上る煙は富を表わし、15年前のイタリア経済の低迷期の姿は払拭されて、著しい成長に驚嘆の眼を向けていた。赤ワインの本場といわれる農村は葡萄棚が整然と並び、奇跡の復興を遂げたイタリアの力は、ワインに於ても先進国の独・仏を凌駕する勢いだ。

変化する車窓風景を眺めて約30分、日本の稲沢や久留米のように植木畑が展開し、農村は過疎対策の一端として多角形経営に乗り出して、頼もしい意気込みが溢れている。北イタリアが働いて南を喰わせる言葉は本当のようであつた。

長閑な牧草地に放牧された牛馬に混じって、昨夜のサンターが連れていた現地馬が見えていた。昔の日本や朝鮮馬、中国や東南アジアの馬よりも数段小型で、大きな犬ほどの此の馬はペットだろうか、愛嬌のある愛玩動物である。

ローマ時代の水道橋の遺跡が東西に長く延びている光景はイタリアらしく、未知の世界にふれる変化に飽く事を知らず、高朗な気分を続けて十時半にピサに着いた。

概要

町の起源は紀元前10～6世紀頃のエトルリア人(古代イタリアの北部)が、現在のトスカーナ州を本拠として活躍し、ローマ時代から中世にかけて文化の中心地として繁栄し、中世イタリアでは最も栄えた海港共和国の一つであつた。その頂点は11～13世紀であり、この影響力はトスカーナ地方の海岸地帯及びコルシカ、シチリアの島々にも及んでいた。

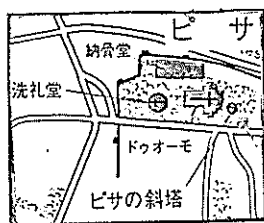
ピサの隆盛はフィレンツェよりも早く12世紀であつた。11世紀初めにイスラム勢力を駆逐して西地中海に進出し、十字軍に参加して東西貿易で儲けたのである。

13世紀になり、競争相手のジェノヴァ(35頁地図参照)、フィレンツェに次第に圧倒され、遂にフィレンツェ大公国の支配を受けることになった。

ガリレオ(1564～1642)が現われたのは其の時代で、それ以来、此地に科学、特に数学の伝統が始まった。

嘗って活発な港町であつたピサが衰退した原因は、河床の堆積作用が著しく水運が途絶えたからで、河口港としての機能を失って南方のリヴォルノに譲ったのである。

『ガリレオは伊の物理学者・天文学者・哲学者で、振子の等時性を発見、落体の実験、望遠鏡の発見による天体観測でコペルニクス宇宙論に一証を与えた。1633年、地動説のために宗教裁判に付されて幽閉された』

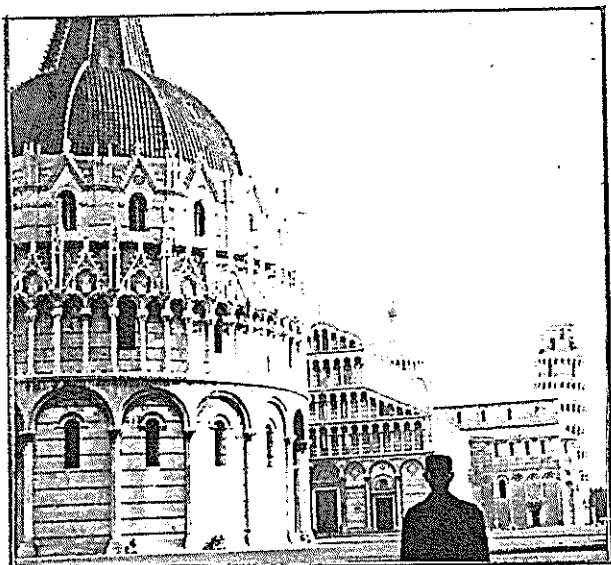


観光

ピサの街を囲む城壁は流転変貌の過去を忘れたように厳然と構え、正面の門より入って一望すると、洗礼堂・納骨堂・ドゥオーモの白亜の大殿堂が超然とした気品を現わした。彼の名声高い斜塔は一番奥に小さく聳えて我々の視神経を刺激した。

垂涎の的だったピサは不気味な静寂に包まれ、福々しく神々しい雄渾な景観に動悸は高まって童心に返っていた。

(上は地図、下は寺院の全景と私)



白眉な寺院を一瞥して初めて、想像を超えた大寺院であることを啓蒙され、露知らない自己の無学に恥入った次第で、新発見のような感懐は一入であり、暫く芝生の上に佇んでいたのである。

大聖堂はイスラム軍を撃破した戦勝記念に建立され、ピサの斜塔もこうした繁栄に支えられて、12世紀後半に起工されたものである。

「洗礼堂」

寺院の最も手前にあるのが洗礼堂で、白亜の上に赤い円蓋がのっている。ゴシック様式の12～14世紀後半の建築で、内部のニコラ・ピサーノ(1273～1348、彫刻家でピサーノ家の創始者)の説教壇(13世紀)は、古代の石棺彫刻から学んだ造形的表現の最初の記念碑であるという。(上の写真の左手前の建物)

直感的に霊気を感じる洗礼堂を過ぎると、左側の庭園を隔てて納骨堂がある。

「納骨堂」

大理石の壁で囲まれた納骨堂は、1944年に戦災で傷んだものを修復したものだ。内部は回廊式になって中庭が設けられ、南側の回廊には14世紀のトスカナ派(ローマ建築の一派)の作品「死の勝利」、北側の回廊にはゴッソリ(1420～97、画家)の旧約聖書からの諸場面(15世紀)が描かれ、その他、多くの彫刻が整然と並んでいた。

悪逆無道の戦争は神聖な寺院までも破壊するとは許し難い。然し乍ら世界に国家の複雑性が存在する限り、残念ながら戦争は世界歴史が終わるまで継続するだろうと、

考えながら一巡したのである。

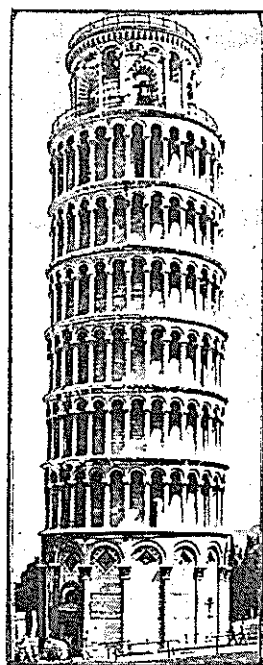
「ドゥオーモ」(斜塔手前の大きな建物、前頁地図)

ピサ・ロマネスク様式の最高傑作と云われ、其の付属する斜塔と共に世界に知られている。工事は1063年に開始され、正面は1200年に完成した。

上部は4層の柱列で飾られ、下部には3つの扉がある。側面も2層の柱列からなり、特に右袖廊入口にある扉のピサーノ作の浮彫(1180年)は、イタリア・ロマネスク彫刻の代表作の一つである。

内部は壮大で明るく、白と黒の縞模様に装飾された5廊式となっており、奥行き100m、間口30mで素晴らしい宗教が生きているような感じがしていた。

大寺院の前には「ガリレオのランプ」と呼ばれるブロンズのランプが吊るされていたが、このランプこそ振子の原理を発見させたものであった。



「ピサの斜塔」(上は斜塔、下は釣鐘)

一番奥に白く燦爛と聳える斜塔を眺めると、童心に戻った感じが込み上げて郷愁をそそるようであった。白大理石の美しい柱列で囲まれた斜塔はドゥオーモの鐘塔であり、1174年に工事が始められたが、傾く原因となつた地盤沈下で一時中断し、1350年に完成した。

高さは北側で55、22m、南側は54、52m、中心から4、5m離れて8%の傾斜だという。1988年の今年1年間で1、22mm傾いたというから、何かの方法を講じないと100~150年後には倒壊すると発表されている。

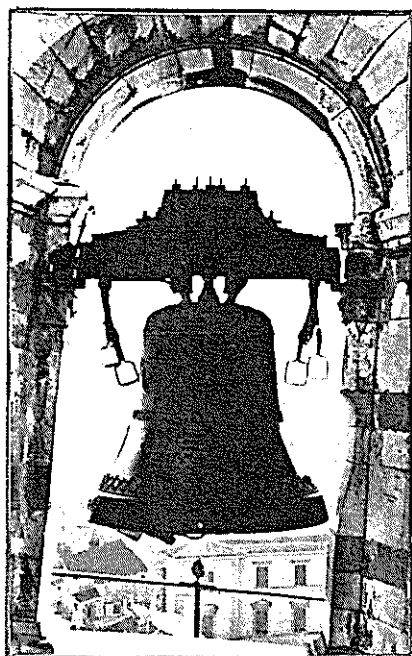
昨年1年間の傾斜幅は過去60年間の平均値と同じだが、87年の0、7mmの傾斜と比べると事態は大きく変化している。

年間の傾斜幅が2mmを超えた時が要注意らしく、世界の七不思議の一つの斜塔は保存して欲しい。

斜塔の正面に294の階段の入口があり、老いの木登りだと思案したが無理を承知で登り始めた。大理石の階段は拝観者の数を示すかのように凹み、傾斜は意識しなくとも自ずから判然とする位だ。

各層にある明り窓から外界を眺めて、かろうじて余喘を保ちながら8層の頂点に達した。

ガリレオの「落下の法則」を実験した頂天に立ち、緑の芝生を敷き詰めた大庭園に建っている白亜の寺院や、11万都市のピサ市街の赤い屋根が手に取るようで、これが所謂、壺中の天と形容する別天の眺



めと云うのであろうか。出る息は入る息を待たずといった登攀の苦勞が、善因福來を招くのだと信じたが、浮き世は心次第で楽しめるものであつた。

頂上の東西南北に吊るされた釣鐘は人物大の大きいもので（前頁写真）、平和の鐘が鳴り響いた往時が偲ばれると同時に、今では戦争の悪に対する警鐘の感じがする。

太陽は真上にあつて一木一草の生命に慈悲の光を放ち、冬を追いやって秋酣の天候にも恵まれた塔上で、宿願成就の喜びを深く噛み締めていたのである。

何時までも感傷に捉らわれている事も許されず、一塊の振り子のように緩つくりと階段を降り、数十の軒を並べた門前市を通過してバスに向かった。

名声高いピサの斜塔と別れたバスの中で、「密を使っても甘すぎず、塩を使っても辛すぎない」と云う、バランスのとれた人間像を脳裏に浮かべていたのである。

ピサからフランス領へ

10・20にピサを発ち、ジェノヴァ（英語はジェノア）に向けて高速に入った。丘陵地帯がつづく丘の上も赤瓦で葺いた家屋で埋まり、自然の緑と調和して美しい眺めであつた。イタリアでは屋根の色は赤色と決められ、大都市から寒村に至るまで壁は白色、屋根は赤色で、スイスの木造建築やギリシアの白一色と対照的であつた。

1時間半ばかり経過するとトンネルの数が増え始め、アペニン山脈を越す高速は北陸高速を通過するようで、土地の狭小なイタリアは我が国と同じく、丘の上まで住宅地が広がっている。

漸くリグリア海が写って来た。長く延びる海岸線は別荘地帯を形成して、凡ての海浜は海水浴場となつていた。スペインの地中海沿岸を連想させるリゾート地は、これから訪れる南仏のコート・ダジュール（紺碧海岸）に続いているのである。

落ち着いた雰囲気の中に天然の良港があり、中世から近世にかけて地中海の覇権を争ったジェノヴァが、視野に入ってきた。

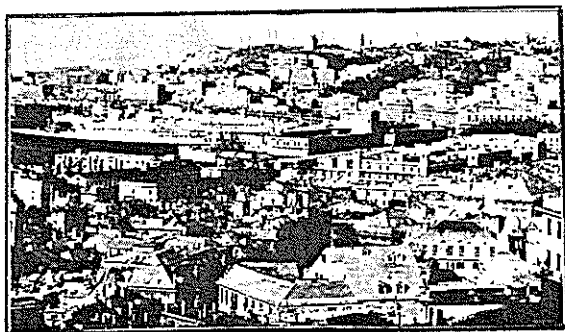
「ジェノヴァ」（26・35頁地図参照、下は遠望）

仏のマルセイユに次ぐ海運業の盛んな85万都市ジェノヴァは、コロンブスの故郷であり、イタリア第一の港町であると同時に工業都市、保養地でもある。

1451年にジェノヴァの毛織業者の息子として生まれたコロンブスは、地球球体説の考えから、西廻りに航海すればインドに到達すると主張し、リスボンに流れて船長となった。後にスペイン宮廷の後援を受けて1492年に出発してバハマ群島に上陸、新大陸発見の端緒を作った。

第2回は1493年にエスパニョーラ、第3回は1498年にトリニダード、第4回は1502年にホンデュラスを発見したが、全てアジアと誤認しつつ失意のうちに没した航海者である。

ジェノヴァ共和国が栄光に輝いた時代は11～14世紀で、1284年にピサに勝利して以来、イタリア沿岸海



域に君臨し、コルシカ島から北アフリカまで支配下に置いた。1381年には東地中海でヴェネツィアの海軍と衝突して力を弱めた。15世紀になると指導者争いから内乱が続いて益々衰退したが、再び勢力を盛り返してナポレオン時代まで続いた。

1797年、ナポレオンにより「リグリア共和国」として民主共和国に政変されたが、1805年、彼のフランス帝国に併合され、ナポレオンの没落後、ウィーン会議の決定によりサルデーニャ王国に併合され、1861年に全イタリアが統一してイタリア王国となったのである。

「国境通過」

ジェノヴァの大工業地帯のスモッグの中に高層建築が林立し、カトリックの国らしく数多くの教会が聳える光景が、リグリア海に映っていた。冬期でも 10° を下ることは珍しいという温暖な海岸でも、谷間の流れは氷結して先の寒波の跡を残していた。

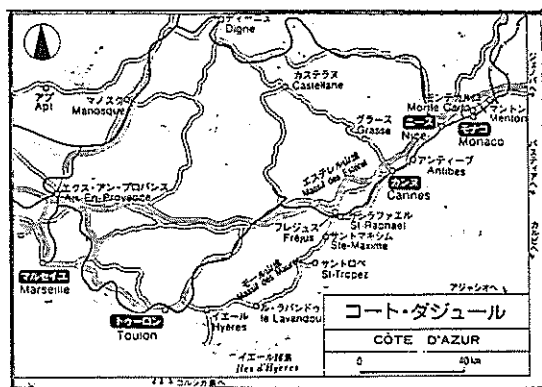
オリーブの繁る沿道からの見晴らしは良く、フランス国境に接近するにつれて様相は急変し、奇岩怪石の岩山ばかりだった。4時半を過ぎたころの道路標識は「ニース 100km」を標示し、地図で見る距離よりも長く感じていたが、曲がりくねった海岸道路の性かも知れない。

陽は西山に迫って薄暮は刻々と深まり、遠くの峰の稜線だけが天空に輪郭を残して、5・30に伊・仏国境の町「サンレモ」に到着した。無限に広がる地中海は黒い空と黒い水平線しか見えず、起伏した街の灯はドロドロとした人間社会を現わしていた。

イタリアを去るに当って其の歴史を回顧すると、戦争の絶え間のなかったことが強く印象付けられ、温かい繁栄の陰に冷たい分離があつた事を忘れてはならず、昔から繁栄を続けた国は皆無であつた事である。

簡単なチェックで国境を通過すると直ぐモナコ海岸だ。モンテカルロの灯が煌々として瞰下され、明日に楽しみを延ばして高速を疾走した。仏領に入った途端に高速道路は街灯がなく、文明国らしからぬ予想外の現象を見たのであつた。

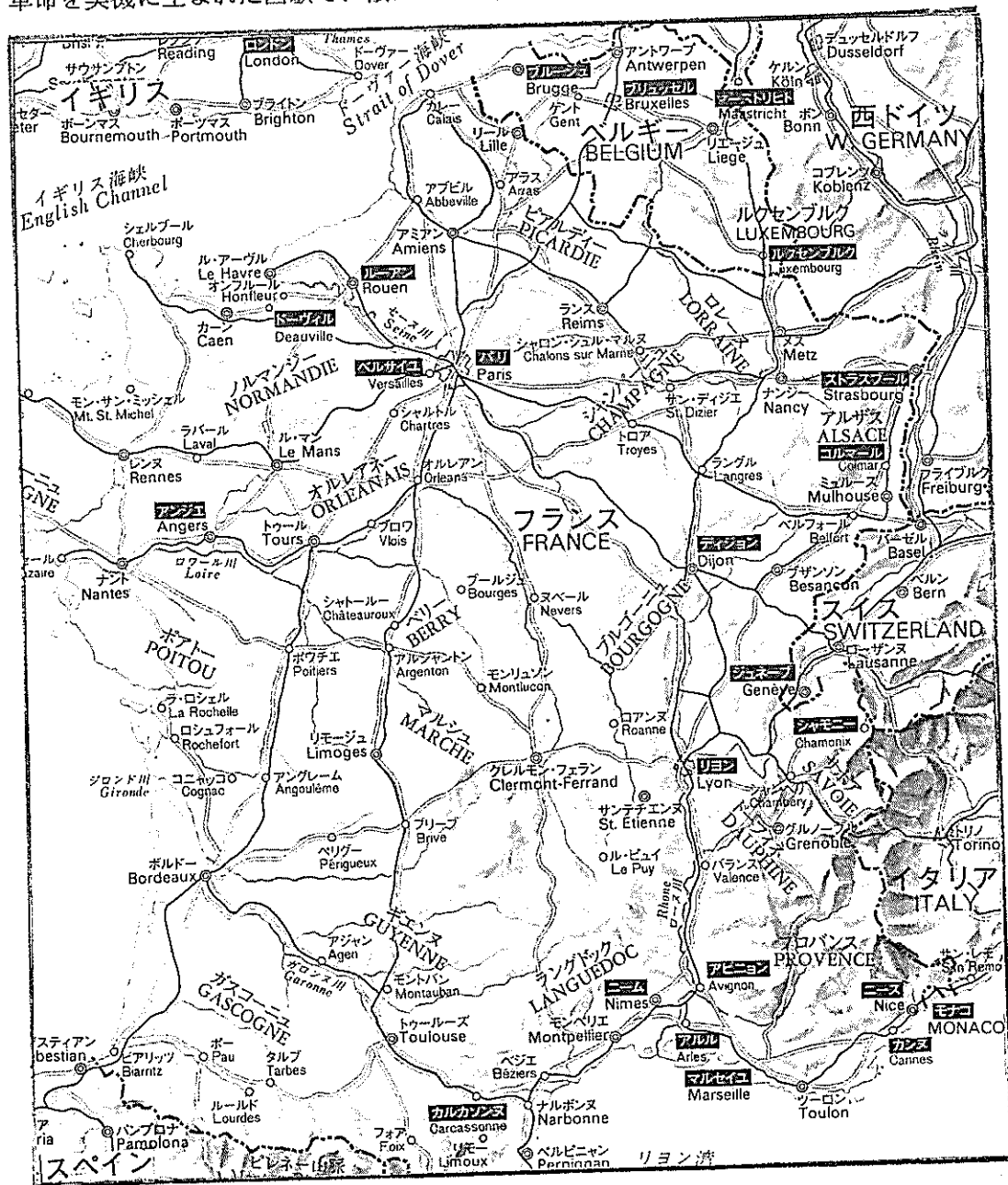
いよいよニース市街の夜景が宝石箱のように網膜を刺激し、6・30にパーク・ホテルに旅装を解いたが、蠟を嗜むようなイタリア料理の拙さから開放されて、新鮮な海の幸を味わって生気を取り戻した事が特に印象的であつた。



フランスの概要

フランス領に入り歴史の概要を纏めてみる事にした。旧制中学時代に西洋史を学んで以来50年を経過し、数回の欧州旅行で得た知識は取るに足らず、それを記述する器でないことは論を俟たない。

フランスの正式な名称はフランス共和国、青年時代に覚えた「ラ・マルセーズ」は革命を契機に生まれた国歌で、懐かしさを覚える。(下はフランス地図)



「先史時代」

フランスはヨーロッパ諸国の中では歴史の曙の早いところであつた。

B、C、2000年頃になるドナウ川（ドイツから黒海へ流れる）を越えてケルト人（ドイツ南部地域）が移住し始めた。一方、南フランスの海岸ではギリシア人によつてB、C、600年にマルセーユ（マッシリオ）が建設され、さらにニースなどの都市が生まれた。そしてローマ支配はB、C、2世紀に始まっている。

B、C、58年、カエサル（英語はシーザー、100～44 B、C、ローマの将軍）はガリア（ケルト人の居住地域の総称）遠征の途につき、遂にガリア全土を征服し、さらにライン川を渡ってゲルマニア（ゲルマン人の居住地域のローマ名）へ、海を渡って更に版図を広げたことは、カエサル自身の「ガリア戦記」の通りだ。又、B、C、43年にリヨン（マルセーユ北方300km）が植民市として建設されている。

「フランク王国」

4～6世紀にゲルマン民族の大移動によつてローマ帝国の西半分（西ローマ）は滅亡し、代りに台頭して来たのが西ゲルマンのフランク族である。（24頁記事に詳細）

「フランク」自由にして勇敢な意味をもつ此の民族は481年、フランク王国初代王クロービス1世に率いられて王国の統合をなし、メロヴィング朝を創始した。496年に彼は先例を受けてカトリック教に改宗した。これはフランスの宗教史を飾る重要な出来事であつた。

後に分割されて支配力を失ったフランク王国をサラセン軍（アラブ）が襲い、それを撃破したのは時の宰相シャルル・マルテルであつた。彼の息子小ペパンが王となつてカロリング朝を築き、小ペパンの息子シャルル・マーニュ大帝の治政下がフランク王国の最盛期であつた。

「ローランの歌」で名高いシャルル・マーニュは各地に転戦して武勲を重ね、現在のフランス、ドイツ、北イタリアを含む大国家を造り、800年にローマ教皇から西ローマ帝国皇帝の冠を受けた。ここに世俗権力と宗教権力との提携が始まった。

しかし大帝の死後、王国は3分割され、各々現在のフランス、ドイツ、イタリアの母体となつたのである。

「カペー王朝と十字軍」

855年、パリはノルマン軍（スカンディナ半島、デンマーク地方の民族）の包囲を受け、これを防衛したユーグ・カペーが王座に就いてカペー朝を創始した。

国王を頂点に僧侶、貴族、農民という枠組みが形成されて、ピラミッド型の封建制度が確立し、封土を媒介として忠誠と保護の関係が信仰にまで発展し、騎士道が育成されたのである。（25頁の記事参照）

この信仰の時代に十字軍が組織され、聖地エルサレムをイスラム教徒から奪還するという大義名分のもと、1世紀半の長きにわたつて何度も十字軍が派遣された。初期の農民十字軍は残念にも滅ぼされ、1212年にマルセーユから船出した数千人の少年十字軍は難破して、奴隷に売られる悲惨な結果となつた。しかし、これらは純粹な宗教的動機を持った十字軍は稀で、王たちが自ら軍を率いて遠征した理由は他にあつた。金銀財宝を持ち帰る夢のほかに対外進出の野望があつたのである。

「アビニヨン捕囚と百年戦争」

14世紀に入ると国王の権力は増大し、ローマ法王との対立が目立つようになった。遂に法王の座をローマからアビニヨン（マルセイユ北方100km）に移し、フランス国王の支配下に置く「アビニヨン捕囚」に到って教会は分裂した。このような時にカペー朝直系の血筋が断絶、イギリス国王が王位を主張した事から百年戦争が始まった。

1世紀に及ぶ戦争の間、常に戦場であったフランスの国土は疲弊した。うちつづく敗戦のさなか農民一揆や暴動が相次ぎ、15世紀からはフランス国内諸公の勢力争いも加わった。この内紛に乗じたイギリス軍はオルレアン（パリ南方100km）を包囲して、一挙にロワール川以南へ進撃しようとした。

此の時、突如として現われたのが「ジャンヌ・ダルク」（1412～31）であった。農民の娘で愛国少女の彼女は、神託を受けたと信じて包囲された仏軍を救出し、各地で英軍を撃破した。市民の歓呼の声と共に入城したジャンヌは更に北上してシャルル7世を戴冠させたが、後にブルゴーニュ軍に捕らえられ、英軍によつて火刑にされた事は特に有名である。後に列聖とされ、シラー、シヨーが劇曲化している。

百年戦争後のフランスは国家統一をめざし、絶対王政への道を進んだ。

「宗教戦争」

ヨーロッパの歴史に於て絶対王政の形成期には必ず激しい社会的抗争が見られる。

16世紀後半のフランスもまた其の段階にあつた。

ユグノー（新教徒）と旧教徒の間の宗教上の対立は、貴族の勢力抗争と相俟つて内乱を引き起こした。（7頁の記事参照）

パリに参集したユグノー派貴族たちが、旧教徒の一斉襲撃にあつたサン・バルテルミ虐殺がこれに拍車をかけ、各地でユグノー狩りが始まった。（1572・8・24、使徒聖バルトロメオの祝日に起った虐殺事件で、シャルル9世の母后カトリーヌがギーズ公らと謀つて強行し、地方都市にまで及んで犠牲は約5万）

8次にわたる宗教戦争の後、新教徒のアンリ4世がカトリックに改宗、ナント勅令（1598）によつて信仰の自由と政治的自由が保証された。これによつて内乱は終結したが、ユグノーの国外流出が続いた。

「ルイ14世と絶対王政」

宗教戦争によつて打撃を受けた経済を復興させたのはアンリ4世であつた。（1553～1610。ブルボン王朝の創始者で在位1589～1610。ユグノーの首領として宗教戦争に活躍したが、サン・バルテルミ虐殺に際して改宗。ナント勅令を發布して絶対主義の基礎を確立した。後日、旧教徒によつて暗殺された）

宰相リシュリユーは重商主義によつて富国強兵策を打ち出し、彼の死後はマザランがあとを引き継いだ。

5歳に満たない新王ルイ14世（1638～1715。在位1643～1715）を擁し、宰相マザランの時代が続いたが、その死と共にルイ太陽王の親政が始まる。「朕は国家なり」とはブルボン絶対王政の最盛期を迎えたルイ14世の言葉として名高く、また彼に相応しい。

「国政に思いを巡らし、その決定をなすのは、ひとえに国の元首たる者の任務である。

他の者のなすべきは、ただ与えられた命令を実行するのみ」

誠にルイ14世は唯一人の為政者であつた。政治・経済・宗教・戦争・建築に至るまで決定するのは王であり、総ては王を中心に動いていった。

財務長官コルベールの抜擢が功を奏し、ヨーロッパの強国フランスの栄光は、ベルサイユ宮殿に象徴されるように揺るぎないものと思われた。しかし1683年、コルベールの死を契機に、経済政策の破綻が表面化した。

農村は疲弊し、追い討ちをかけるように2度の大飢饉が襲った。国王の戦争熱と建築熱は国の財政難を招くばかりで、太陽王の末期には落陽の影を落したのである。

「フランス大革命」(1789~99)

旧体制崩壊の兆しはルイ14世の華やかな時代にも既に現われ、ルイ15世の治政下に一旦は財政の立て直しに成功したものの、18世紀末には再び財政改革の必要に迫られた。

歳入を増すために貴族・僧侶への免税特権を廃して、全国民に課税するという法案は高等法院の同意を得られず、三部会が招集された。(第一身分は聖職者、第二身分は貴族、第三身分は非特権的な議員)

貴族達は第三身分を味方に引き込んでルイ16世と王権に反対し、全国三部会の招集を要求した。三部会は紛糾して憲法制定国民会議の発足をみるに至った。

議事を制圧する為に国王の兵が集められた事に民衆の不安が昂じ、前年の凶作による穀物価格の高騰に苦しむパリの民衆は、1789年7月14日に蜂起して、パリ東部のバスチーユ牢獄を襲い革命は全国に広がった。

この頃マルセーユの市民軍がパリへ進軍しつつ歌った「ラ・マルセイエーズ」が、自由と平和と平等を求める今日のフランス国歌となったことは、よく知られている。

議会は封建的特権の廃止の宣言と、「人間は生れながらにして自由平等の権利を有する」との人間宣言を發布して、革命の原理を明らかにした。以後革命は、外国の援助を借りて反革命を企てる国王側の策動によつて錯綜した展開をみせたが、その都度民衆は蜂起した。

その後、普通選挙による国民公会のもとに王制を廃止して共和制の樹立が決議され、1793年国王ルイ16世は処刑されたのである。やがてナポレオンの登場となる。

「ナポレオン」(1729~1821、在位1804~14~15)

ナポレオンの軍事的才能が初めて認められたのは、地中海のトゥーロン軍港奪回の時であつた。

政府への民衆の不満に乗じたナポレオンは、1799・11・9(革命暦ブリュメール18日に当る)の「ブリュメール18日」のクーデターを成功させ、軍事独裁政権を樹立して「ナポレオン法典」を完成した。人民の圧倒的な人気を得た彼は遂に皇帝ナポレオン1世となり、自ら冠を戴いた。

「わが権力はわが名誉に、わが名誉は余のもとらせる戦勝にかかっている」というナポレオンには、ヨーロッパ支配への道を歩むことは必至であつた。1808年にはヨーロッパ全土に勢力を広げたが、一方では対イギリス工作の大陸封鎖令でフランス産業に打撃を与えた。

全盛を誇るナポレオンも、1805年10月21日、トラファルガー海戦で大敗を喫した。（スペインのトラファルガー岬沖で英艦隊と仏・西連合艦隊と会戦し、英提督ネルソンは戦死したが英艦隊は大勝した。ナポレオンの英本土侵入策は瓦解した）

次いで12年のロシア遠征にも失敗した外、13年のドイツ開放戦争に於けるライプチヒの敗北で（普・墺・露3国の同盟軍と）、彼の建設した帝国は崩壊し遂にエルバ島に流された。しかし1815年、ルイ18世の反動政治に対する民衆の不満はナポレオンの再登場を求めた。密かにエルバ島を脱出し、今でもナポレオン街道と呼ばれる険しい道を辿り、パリに凱旋した彼を民衆は歓呼の声で迎えたのであつた。

だがワーテルロー（1815・6・18、英のウェリントンと普のブリュッヒャーの連合軍とベルギー中部で戦った戦闘）の敗戦で彼の夢は再び消え、セントヘレナ島で生涯を閉じたのである。世にいうナポレオンの百日天下だ。

「7月王制と産業革命」

ナポレオンの失脚によつてルイ18世が再び王座に戻った。しかし反動的な勅令を發布したため7月革命が起き、ルイ・フィリップが王となる。7月王制である。

この頃イギリスでは産業革命による急速な発展を遂げ、フランスにも緩やかに浸透して来た。しかし機械の導入等が労働者の叛乱を引き起こし、2月革命となつた。

「第2帝政」

2月革命直後、ナポレオンの甥ルイ・ナポレオンは圧倒的人気で大統領に就任し、次いで皇帝ナポレオン3世となつて第2帝政が発足した。

産業革命の開花と好景気がパリ万国博覧会を支え、古都パリは大改造計画によつて近代都市に生まれ変わった。

「パリ・コミューン」

1867年の経済恐慌と普仏戦争の敗北によつて第2帝政は崩壊した。（1870～71。ビスマルク指導下の普国と、ナポレオン3世治下の仏国との戦争で前者が勝ち、ドイツ帝国が成立）

ドイツ軍のパリ入城と国民軍の武装解除命令がパリの市民を蜂起させ、パリ・コミューン（都市自治体）が成立した。歴史上はじめて労働者政権が実現したのである。

しかしパリに籠城したコミューン軍を政府軍が鎮圧し、セーヌ川は血に染まった。

「ベル・エポック」

19世紀末から20世紀初頭にかけて文化が開花した時期をベル・エポック（良き時代）と呼ぶ。パリ万国博覧会は機械文明を謳歌し、ガス灯が電灯に代わり、自動車が走るようになった。又、パリに集まった各国の芸術家達は、ピカソ、シャガール、ヘミングウェイなど多士済々で、パリは20世紀をリードした。

「両世界大戦以後」

今世紀の2度にわたる大戦では国土の半分が戦場と化し、苦難の時代が続いた。大戦後はドゴール政権によつて国際的地位を高め、現在はミッテラン政権である。

11月29日(火)

晴

コート・ダジュール (下図参照)

トウロンからイタリア国境に至る美しい海岸地帯をコート・ダジュール(紺碧海岸)と呼ぶ。アルプス山系を背にした地形が北からの寒気を遮り、年間を通じて温暖な気候なため夏の避暑地、冬の避寒地として国際的に有名な観光リゾート地である。

フランス人はここを地上の楽園と呼んでいるが、決して誇張ではない。海岸に沿って走る道路は完備し、シュロの葉が南フランスの太陽を反射して潮風にそそぎ、オレンジ、ブーゲンビリアなどが咲き乱れる風光明媚な所である。

一方、海岸すれすれに山が迫って、海と山を同時に楽しめる魅力のある海岸だ。ついでにヨーロッパの「バカンス法」を記しておく。

“長期連続休暇を労使双方に義務付ける法律で欧米では広く普及し、フランスは労働法典の中で「2週間から4週間」の取得を義務付け、西ドイツは連邦休暇法で「連続3週間」を法制化している。

しかも我国経済企画庁によると、両国とも実際の取得日数は法律が定める日数を大きく上回り、西ドイツは平均が夏3週間、冬2週間以上となつている。

労働省の調査では、我国の企業の連続休暇は夏休みが平均6、3日。年間労働時間も2011時間(昭和62年)で、英米に比べ約200時間、西ドイツ、フランスに比べると約500時間も多い。

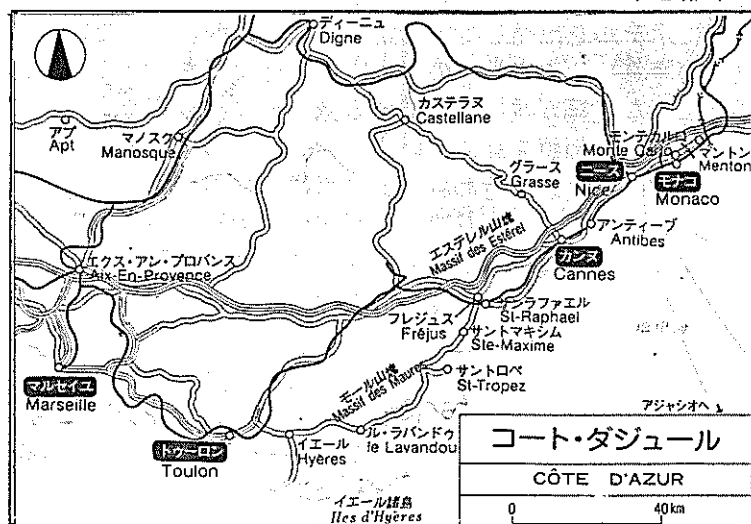
生活にゆとりが実感できない要因であると共に、海外からは貿易摩擦をからめて「働き過ぎ」と批判されているため、経済企画庁では2、3年後の法制化を目指していると云う。然し先ず地中海沿岸のようなリゾート地の建設をしなければならない”

ニース

フランスのカヌヌからイタリアのスペチアに至る地中海の海岸をリヴィエラ海岸と呼び、ニースは「リヴィエラの女王」と称せられるコート・ダジュールの中心都市で、フランス第5番目の40万の町である。

山々を背に天使の湾を抱く地勢が温暖な気候をもたらし、四季を通じて花の絶えることがない別天地である。

夢を誘う高級リゾート地として世界各国の観光客を引き付け、海岸通りは美しい風光を楽しむ人達で賑わう海岸である。



概要

古代フェニキア（地中海東岸シリア中部地方）の植民都市として建設され、B、C、6世紀にマルセーユのギリシア漁民がニースに住み着き、B、C、2世紀にギリシア人が造った町をローマ人が占領してローマの支配地となつた。

10世紀にはサラセン帝国（マホメットが建国したアラブ王朝）に占領され、12世紀にはプロヴァンス帝国（ローヌ川流域のマルセーユを中心）、14世紀からサヴォイ家（伊）領となり、その間しばしばフランスの侵攻を受けた。

1792～1814にわたりフランスに領有され、ボナパルト家（ナポレオン1世の家系）への反感からサルデーニャ王国（伊北部）へ移り、1860年に改めてフランス領となつた。

イタリアの三大偉人で愛国的英雄といわれるガリバルディ（1807～82、将軍）の生誕地でもあり、目まぐるしい変遷を辿っている。現在はアルプ・マリティーム県の首都となつている。

観光（右は市街図）

居は気移すというが、人の住む場所は人の気分に影響して気分をも変えるものだ。11月末に拘らず陽気は炎々として空高く立ち昇り、海浜の引力は我々を引き付けていた。

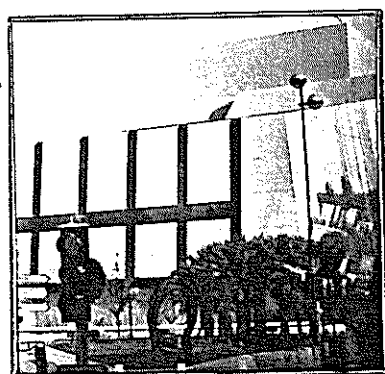
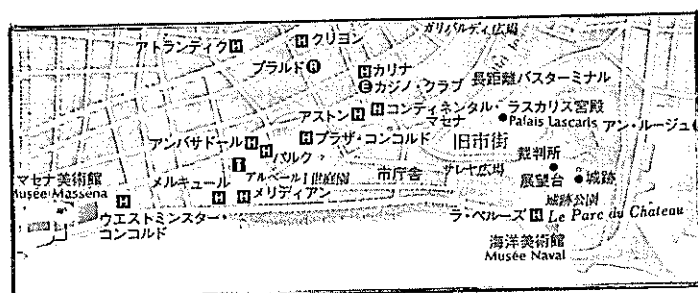
海は鏡のように穏やかで、自浄作用の小波は玉石の渚に打ち寄せ、海浜道路の青い並木は陽を受けて目にしみている。自然に脚は玉砂利の上を一步一步と運び、長生きの秘訣はのんびりと暮らすことだと語りかけ、手は小石を拾って自然の恩恵を味わっていた。松籟の林に建っている六角屋根の小屋も亦、感傷的にわれらの憩いを誘うようで、印象に残る朝の一時を堪能したのであつた。

9時にホテルを出発して市内観光に移り、西に進んでニース大学やアクロポリス会館（下の写真）、音楽学校の建つ広場で停車した。昔から文化の中心地であつた此の界隈は広大な建築が並び、旧市街の城塞やオペラ座を含めてニースの価値を高めている。親日家の多いニースでは日本の文化祭も行われ、誠に喜ばしい事である。

1962年のアルジェリア（北西アフリカ）の独立戦争以来、アフリカやアラブ人の住んでいた此の附近は、地価の高騰で彼等は文化地域を売り払い、郊外に移転したらしい。

金持ち日本人の土地購入が一段と地価の高騰に拍車をかけ、反感をかってゐる事を耳にすると肩身が狭い思いがする。

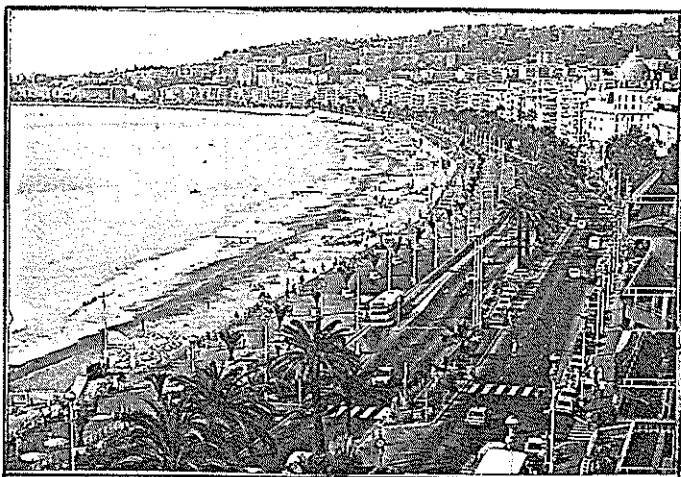
反転して東に向かったバスはパーク・ホテルを通過



して、メンストリートである
プロムナード・デ・ザングレ
を走った。

海岸沿いに弧を描く広い遊
歩道は全長3、5km。ニース
が世界の王侯貴族を引き付け
始めた19～20世紀初頭に
造り、当時最も外国旅行して
いたイギリス人の多くが此処
を訪れ、そのため「イギリス
人の遊歩道」と呼ばれた。

南に紺碧の天使の湾を抱き
北側には高級ホテルやマンシ



ョンが軒を連ね、グリーンベルトのシュロの並木が浜風を受けて葉を揺さぶり、これが
ニースの象徴となつている。（上はプロムナード・デ・ザングレの大通りと市街）

市庁舎の前には大噴水が白い水幕を輝かせ、山手道りは閑静な高級住宅地が伸び、
一躍脚光を浴びた街は磁石のように我々の目を注がせていた。

日本人は起きて半畳、寝て一畳の狭い生活に甘んじて、豊かさを追求する心を忘れて
いる。何処で暮らすのも一生だと考えると、輝く太陽を受けて目にしみる緑に囲ま
れて、暮らしたいものである。

表現力の多彩な躍動感の溢れる市街の端に、満市満香の花市場が一角を彩り、温暖
な気候は人間の心まで春を追求させていた。花は赤ん坊でも理解できる言葉で、花の
美しさは人間本来の心だと、遠い異境の地で強く感じていたのである。

ババリーのコートを着た私に、ガイド嬢は日本人ツアーの方ですかと尋ねて来た。
このようなことは初めての体験だ。年齢に相違して背が高い性か、それとも顔付が日
本人ばなれしているのか。嬉しいやら悲しいやら複雑な心境であったが、後日、彼女
に大きな世話を掛けるなど、無想だになかったのである。

坦々とした艶麗優美なイギリス人の遊歩道は、世事にこだわらない富貴な心地を誘
い、保養は精神の良薬、最善の友だと感じつつレストランに案内された。

浮かれ気分で食べた海鮮料理はたらふく孫左衛門で、辟易したイタリア料理とは比
較にならず、暫くニースに逗留したいと思ったのは私だけではあるまい。

漁港は寂れて遊覧船は就航せず、コルシカ島行きの連絡船発着場だけが賑わい、こ
れらを眺めて城跡公園へと進んで行った。

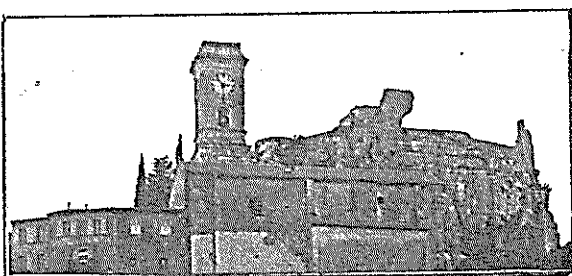
プロムナード・デ・ザングレの東に岩山が張り出し、その中腹に展望台が設けられ
て眺望は実に素晴らしい。リオデジャネロの美観に匹敵する景観は、世界三大美景と
いわれるナポリ海岸を凌駕している。

イタリア人が多い街は赤い屋根が多く、近くの花で埋め尽くした高級住宅では、黒
人労働者が庭の手入に精を出していた。世界の金満家が競って此のリゾートに集中
して成金意識を謳歌しているのであった。

「金の茶釜が七つある」式の裕福に見える外観は目の保養になったが、内部は日本
建築が優っているのではないだろうか。外面を良く見せたがるのは欧米人の習癖で、

羊質虎皮だと皮肉りたい心も湧いて来た。羨望が変じて皮肉になったのかも知れない。

公園を降りてバスはホテルへと引き返した。今夕に訪れるモナコのカジノはズック靴での入場は許されず、靴の交換のためであった。プラタナスの咲き乱れる街道は大袈裟だが桃源境のようで、2月に行われる万街行楽のカーニバルを想起しながら小休止となつた。



フランス第2の文化都市を目指すニースの街を離れ、城跡公園を通過すると石灰岩の断崖道路に急変し、地中海の潮が高まるようにモナコの期待が盛り上がって来た。

モナコの手前のサンジャン・キャップセラ岬（神の友達の意）で停車した。夕焼けに落日の浮雲が赤く染まり、美観に錦上花を添える眺めに見惚れていた。一方、遠望するフェラ岬は幾つかの湾を抱え込み、赤屋根の別荘地が所狭しと並び、濃い緑と相俟つて夢の境地を展開している。

松籟の颯々の響きを聞きながら歯がゆいような景観とも別れ、続いて海岸に突出した山頂にはエズ城が金城湯池の威容を現わし、夕暮が迫って古城落日の文句の通りに稍々無聊な感じだ。（上の写真はエズ城）

城下の広場に建ってる香水工場に案内されると早速、凄い気迫の大男が製造工程の説明を始め、独りでに購買意欲をそそる勢いは堂に入っていた。其の後は決り文句のように展示即売場に導かれ、パリの香水は此の工場の製品で価格は半値だと宣伝していた。

何時かエジプトのカイロでも同じような宣伝をしていたが、世界の宣伝合戦は将に酣で疑心を抱くのは当然である。

この工場で参考として知識を得たのは、香水の原料は薬草に似ているものが多く、糸瓜から化粧水を採集するように、世の中では何のような物でも訳に立たないものではなく、必要に迫られると発明の母となるのである。

バスは再び弾劾道路を緩りと走って世界の小国、弾丸黒子の地、モナコへと進んだ。一獲千金を夢見てこの街道に引かれ、上り大名下り乞食の思いを嘗めた人は数え切れないだろう。

ガイドが国境の標識が左手に立っていると告げると、間髪を入れず目を凝らしてシャッタチャンスを狙った。国境は右の写真の通りの簡単なもので検問所も税関もなく、うっかりしていると気が付かない位だ。

名声は世界に冠たるモナコ領に入り、濡れ手で粟を掴む心は微塵もないが、矢張り好奇心を沸かすのであった。



モナコ

ローマのパチカン市国に次ぐ世界第2の小国は面積1、95㎞に過ぎず、通貨もフランス・フランで国民は無税且つ兵役もない楽天地である。人口3万のうちモナコ国籍を持つ人は約5000人、フランス人が最も多く、次いでイギリス、オランダ、ドイツ、イタリアの順で、概ね富豪の別荘地となつている。

フランスの保護下にあるモナコの政体は立憲君主国で、国政は国王及び18名の議員から構成された国会で運営され、住民はカトリックを信奉してフランス語が国語として使用されている。

概要

モナコを最初に開いたのは古代フェニキア人（地中海東部のシリア地方）で、ローマ帝政期まで地中海からヨーロッパ大陸に向かう人々の足場であつた。

ローマ時代に貿易港として栄えたが、民族大移動の混乱期には都市も港も破壊された。7世紀になつてモナコはロンパルディア王国（伊の北部）の一部に編入され、次ぎにアルル王国（マロセーユ北方）に合体された。その頃からイスラム教徒のヨーロッパ侵入が激化し、約200年間サラセン（マホメットの建設したイスラム国家）の支配を受けていた。

10世紀に入ってジェノヴァの名門グレマルディ家がフランスの援助のもとに侵入し、13世紀後半には完全に其の支配下に入った。モナコは次第にフランスに接近し、英仏の百年戦争（48頁参照）の時には兵を送ってフランス王を援助している。

16世紀に入り公国は全面的にスペインの勢力下に置かれると、神聖ローマ皇帝（ドイツ）カール5世と同盟してスペインに戦いを宣している。17世紀に入ると再びフランスとの関係が緊密化し、1641年にスペインの駐留軍を追い出してフランスの政治的保護を求めた。

1789年のフランス革命が起きると革命政府はモナコの併合を求め、1793年、遂にモナコの主権はフランスに奪われた。この状態はナポレオン1世の没落するまで続いた。

1815年ウィーン会議（ナポレオンの没落後の善後策のため）は列国の議決としてモナコをサルディーニャ王国（伊）の保護下に置いたが、48年の2月革命後に再び公国は分裂の危機に直面した。

2月革命の知らせにマントン、ロブリューヌ（45頁地図参照、モナコ東方）の2都市が反乱を起し、自由の名によつてサルディーニャ王国の束縛を離れ、フランスに合併することを求めたのである。その結果、国土は今日のモナコに縮小され、61年に2つの都市はフランスに売却されることになった。

中世以降モナコは専制政治が行われてきたが、1911年に国民の希望から憲法が制定され、国王を補佐する国会が成立した。

グリマルディ家は1731年の男系が絶えて以来、マティニョン・グリマルディ家として王位が継承されて来た。現在のレーニエ3世は1949年に即位し、56年にハリウッ드의女優グレース・ケリー（故人）を王妃としたことは有名だ。

展望 (右はモナコ周辺と市街図)

幾多の変遷の末に生まれたモナコ公国は、昔はオリーブの産物だけの極貧の国であった。1856年に時の国王がカジノを開設し、その利潤から世界でトップクラスの裕福な国に発展した。宮殿のある旧市街をモナコ、高層ホテルの林立する新市街をモンテカルロと呼んでいる。モンテは坂の意で山をモンタージュと云ったことから、モンテカルロとなつたのである。

オリーブの繁った起伏の激しい坂道を登って市庁舎の前で下車した。敬意を表わすために先ずモナコ教会に足を運び、金碧燦然とした祭壇に神威を感じて、汝の運命は汝の胸中に在り、といった格言を思い起こしていた。

教会前には海洋博物館が建っており、現国王の曾祖父が海洋探求に生涯を尽くした功績を残している。教会に続く高等学校はフランス第4位の有名進学校で、富豪の子弟はエリート意識を燃やしていた。

「大公宮殿」

名鏡止水の海面を眼下にした宮殿前の広場に立つと、薄黄色の王宮は台上一杯に広がって富裕を誇っていた。右の写真のように東側は石造りで望楼が聳え、中央から左側は近代様式の建物である。

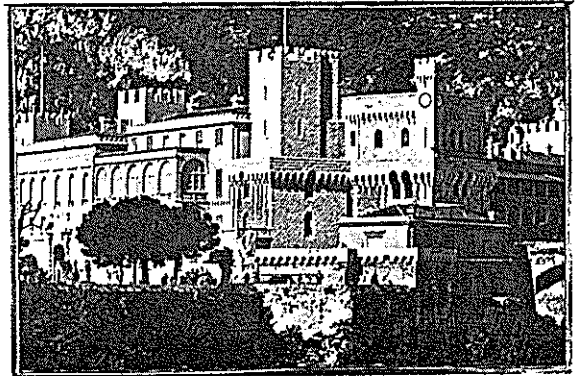
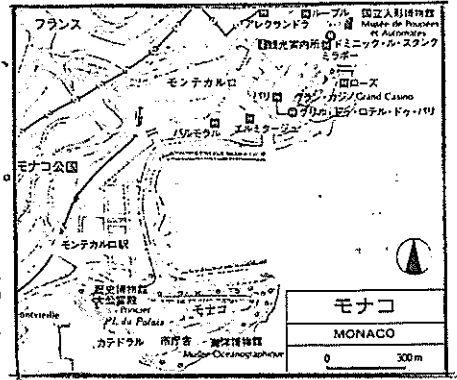
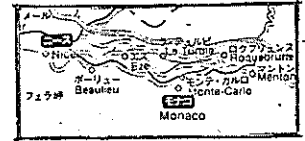
ジェノヴァ人が13世紀に造った要塞上に、イタリア・ルネサンス様式の宮殿が増築されたのは15～16世紀頃で、18世紀には現在の宮殿とほぼ同じ姿になつたという。要塞の一部はパレ広場の南、西の海に面した所に残っている。

王宮の各所に立哨している衛兵は凛然として気品があり、紅の夕陽を浴びた宮殿は一層壮観に見えていた。鰻の寝床のような小国にしては絢爛豪華な建物で、富は税金と兵役を免除して、人心収攬の術となっている。

拝金主義だつた欧米と違い、幼い時から東洋思想で育った我々は、「財無き者は貧と云い、道を学んで行ふ能わざる者を病と云う」と教え込まれ、「貧であつても病であつてはならない」と学んだ。何れが良いのであろうか。洋の東西の相違は宇宙の大異変のように感じたのである。勿論、時代錯誤の誹りは免れないだろう。

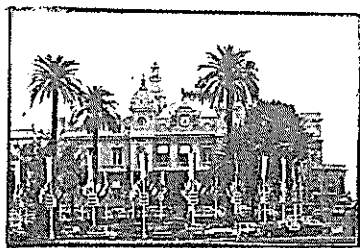
「グラン・カジノ」

王宮のある旧市街を下って行くと其処にはカジノや劇場、社交場が並び、紳士淑女の遊びの街・モンテカルロであつた。世界に名だたるモンテカルロと言えばグラン・カジノであろう。パリのオペラ座を作ったガルニエが1878年に建築したもので、我々も一度は見たい憧れの地の一つであつた。



すっかり暗くなった新市街は煌々として灯がとまり、電光が四方を照らすグラン・カジノの広場に着いた。ツアー人々の期待は大きく膨らんでいたことだろう。

ラスベガスを経験した私にとっては物足りない第一印象であった。修理中ということだが期待に反して薄暗く、絢爛豪華なネオンのラスベガスの不夜城とでは、日を同じくして語るべからずと云う夜景だ。井の中の蛙、大海を知らずであろう。



グラン・カジノは二つの建物に分かれ、広場の南はルーレット、バカラ、ブラックジャック等のカジノ、東側はスロットマシンの遊び場となつている。

何事も見聞すべきだと先ず本館（上の写真）のルーレットの建物に入った。コートや写真機を預ける事は当然だろうが、パスポートの提示を求めるのは初体験だ。観光のオフシーズンの性か博打場は閑散として、虎視眈々と真剣な顔付で勝負に挑む人は疎らであった。

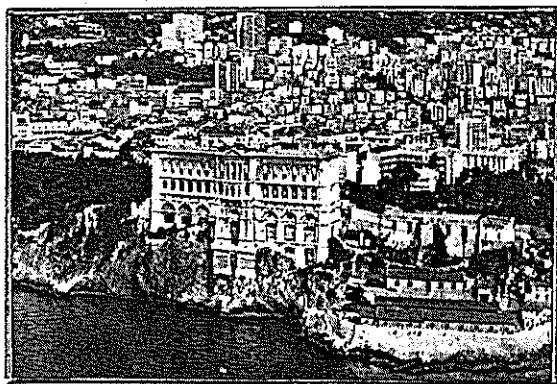
糠の中の米粒を捜すようなギャンブルに興味の薄い私は、遊び場の雰囲気だけを味わって、スロットマシンの建物に移動した。簡単なルールの性か盛況を呈して市に帰するが如しの状態であった。

甘い物に蟻が群がるような中にツアーの人達も混じり、或は二の足を踏んでいる人も見受けられた。1時間半の時間を持て余していた揚句、誘われて私もモナコに寄付をする積りで手を出した。

「当てごとと越中禪は向うから外れる」と良く言ったもので、濡れ手に粟の試みも20分も持たない。「進むを知つて退くを知らず」の戒めを守って直ぐに退去したが、モナコで体験しただけでも心は満足し、満足こそ賢者の宝だと我れに言い聞かせていたのである。（下の写真はグラン・カジノとモンテカルロ市街）

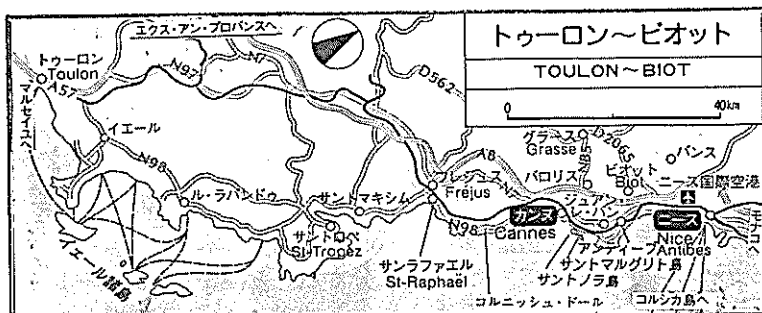
今日も快晴に恵まれてニースやモナコの片鱗に触れ、花の咲くコート・ダジュールの美観を堪能し、更に治乱興亡の歴史を学んだ事は旅の収穫であった。そしてヨーロッパの歴史を繙く時、現在の国境を取り外して読まなければならない複雑性を、強く感じたのである。

ニースの最高の場所を占めるホテルの夕食に鼓腹撃壤し、印象を時の糸で縫いたいと散策に出掛けて、同気相求めたい友達と共に一日を送ったのであった。



11月30日 (水)

9時、ニースのホテルを発ち、カンヌに通じる海浜道路は蜿蜒とリゾートが続き、抜けるような青空と陽光を浴びる糸杉や松の並木、海面のきらぎらと照り返す風光は、芸術家や富豪を引き付けて今日の繁栄をもたらしたのである。



丁寧に歴史と地名を語るガイド嬢に耳を傾けていた。リゾートの高級マンションは総て陽の当るように設計され、ワンルーム・マンションの価格は700万だという。北緯43°のこの一帯は北海道の室蘭(42°)に相当しながら、年間を通じて温暖な地中海性気候の恩恵を受け、強い日射を求めて欧州人が押し寄せるのである。

ニースの天使の湾を隔てた対岸の町、アンティープ(人口7万、地図参照)には、暫くナポレオンが滞在したという城塞が、突出した岬に見えていた。此处を過ぎて目切れ目なくリゾートは続き、単調な海岸線を埋めていた。

「ナポレオンの上陸地」

次ぎのジュアン村(地図参照)は、1815年3月1日午後5時、ナポレオンがエルバ島から脱出して上陸した地点である。

寒村の松並木の中に一期の戦いを挑んだナポレオンの石像が、独り悄然と立っていた。(右写真)一点の非の打ち所のないような兵権智謀の風貌である。

起死回生のウルトラCを夢みた彼の心境は如何ばかりであつたか。冷徹氷の如く澄んでいたであろうか、それとも烈火の如く燃え盛っていたであろうかと想像を逞くしていた。

順風満帆の栄光に輝いた彼もエルバ島に流され、極端な絶望の淵から雄心勃勃として疾風の如く現われ、「皇帝陛下万歳」と熱狂的な群衆に迎えられたことだろう。(49頁記事参照)

彼は此处から山間道を選び、夜を日に継いで黙々と北に進んだが、哀れにも百日天下で終わり、再びセント・ヘレナの孤島に流されて没したのである。(1821)

彼の辞書には不可能の字がないとまで言われたが、松の枝を渡る風の音を聞きながら独り悄然と立つ英雄の末路に、何時までも感傷の虜になつていた。栄枯盛衰は世の常とはいえ、英雄崇拜の思想は人類の間では何処にでも存在し、永久に存在するだろうと慰めの眼を注ぎ、カンヌに向かったのである。



カンヌ (右は地図と市街風景)

ニースと並ぶコート・ダジュールの中心都市・カンヌは、豪壮なホテルや大邸宅が建ち並び、ヨットハーバーにはマストが林立して、自然の美景は凡ての人に幸福な魅力を与えているようだ。

シュロの並木と草花に彩られた目抜き通り「クロワゼット」で下車した。黄金色の砂浜に沿った遊歩道は広く、全長3kmの前方にクロワゼット岬が見えていた。一方、南の旧港には一艘のアメリカ機帆船の孤影が茫然と浮かび、西方の小山の頂上にノートルダム・ド・レスペランス教会が聳え、教会の属地として栄えた昔の名残を遺していた。(ノートル・ダムとは我々の姫君の意で聖母マリア)

市庁舎前の広場の一角にフェスティバル・ホールが建ち、上品で華麗な此の建物は国際会議等に使用され、カンヌの映画祭の会場にもなっている。毎年5月に行われるカンヌ映画祭は1946年に創始され、映画界の国際親善と観光都市カンヌの宣伝を兼ねており、ヴェネツィア映画祭と並んで最も権威のあるものだという。

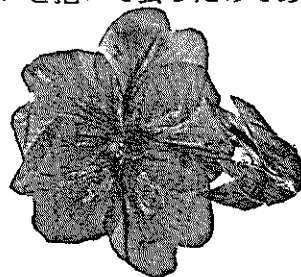
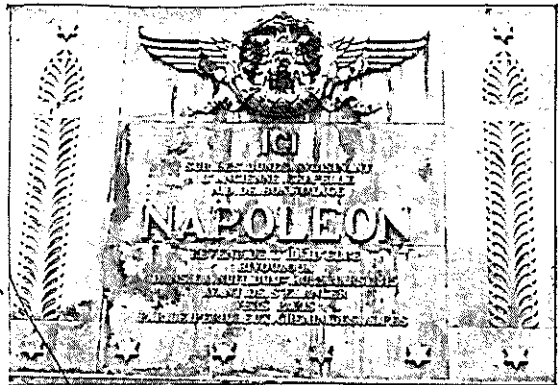
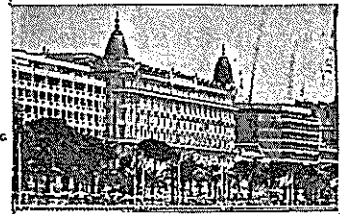
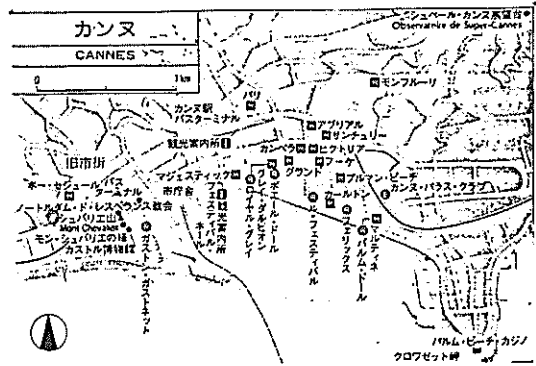
続いてバスは旧市街に入り、ナポレオンが一泊した所に教会が建っていた。教会の側面の壁に大理石のナポレオンのマークが飾られ、説明文を掲げて将に将たる彼の偉烈な功績を称えていた。

忽然として上陸した彼は自分を信じ、乾坤一擲の策に蘊蓄を傾けていたことに思いをいたし、有為転変の歴史の無常に刻印されたのである。

クロワゼット大通りに引き返して自由行動に移った。大きく孤を描いたナプル湾の浜辺に足を運び、海に浮かんだカモメの影に見惚れて、松の木の下で虚無恬淡と佇んでいた。地中海松といわれる木の下に落ちた松毬(ピニユという)を拾いながら、耳の底に響く松籟を楽しむのも旅の慰めであつた。

ナポレオンゆかりの地に強烈な愛着を覚えて、メンストリートのレストランで昼食をとり、満花爛漫の中で行われるカーニバルに思いを抱いて去ったのである。

(下はカンヌで採集した花)

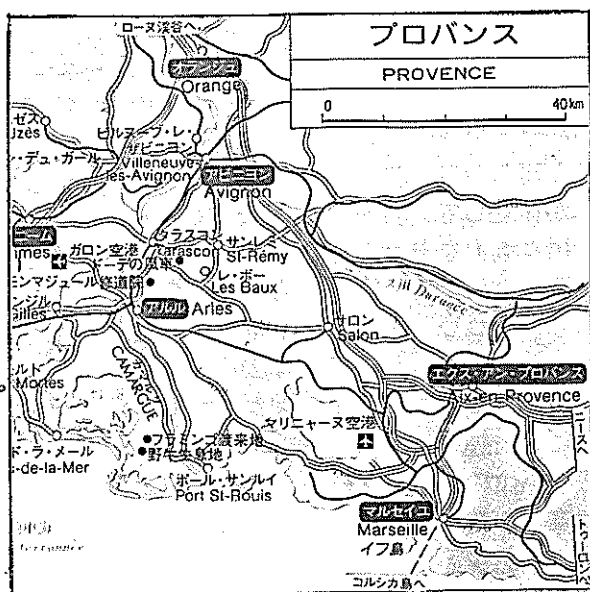


プロバンス地方

風光明媚な山麓を抜ける街道からピカソの住宅を眺め、車はサンラファエル（58頁地図参照）を通過した。

エジプト遠征から凱旋したナポレオンを歓呼の声で迎えた此の漁村は、失脚後の彼を再びエルバ島に見送った地で、ナポレオンによって人に知られた寒村は、今ではリゾート地に変化した。

サンラファエルから海岸線と別れて高速に入った。B、C、1150年からローマの支配下にあつた此の地方は、1789年以降、フランス革命によって仏領となり、至る所に遺跡を残している。



左手に「女性の寝姿」と呼ばれる「ロックブルヌ・スーアジャン山」が横たわり、葡萄畑が一面に展開して、イタリアの棚栽培と異なる棒を立てた栽培様式であつた。これは日当りを満遍無くする事と排水を良くする為で、フランス・ドイツ様式だ。

続いて右手に「勝利の山」と名付けたビクトワール山脈が、延々と断崖絶壁の山肌を見せていた。B、C、125年、ゲルマン人がマルセーユに來襲した時、マルセーユを占領していたローマ軍が此の山で迎撃し、10万人を殺戮し10万人を捕虜にしたと云う古戦場である。

高速の景観は変化して分離帯には夾竹桃が咲き乱れ、遠くのサンプ・マキシム大寺院が網膜に映つて、他を睥睨するように威容を誇示していた。尖塔のない寺院として名が高く、夾竹桃は排気ガスに強いという説明であつた。

車はエクス・アン・プロバンス（上の地図）市外を左折した。人口12万の此の町はセザンヌ（1839～1906、画家）の生地として名高く、12世紀以降はプロバンス地方の首都として隆盛を極めたが、その後マルセーユの発展に伴って衰退した。B、C、2世紀頃にローマ人が温泉の掘削に成功して現在も温泉水が湧出し、噴水と音楽祭、大学の街として知られている。

陽は西山に陰つて田園は昔ながらの姿を残し、セザンヌのこよなく愛した自然の風景は趣があり、丘で囲まれた清楚で温暖な街道は松並木に変わつて、古都を後にした。

マルセーユ

フランス第一の貿易港でパリ、リヨンと並ぶ100万の大都市として、南フランスの中心地となつている。古代ギリシア人は港外のポメーグ、ラトン両島に居を構え、マルセーユの旧港を避難港として利用していたが、次第に海岸線に沿って膨張して、

現在に至った。今は石油精製と石鹼製造の工場基地で、西欧貿易の要衝である一方、プロバンスやコート・ダジュールへの観光基地としても重要な地である。

フランス革命の時にマルセーユの市民軍がパリへ進撃しつつ歌った「ラ・マルセイーズ」は有名で、自由と平和を求めるフランス国歌の発祥の地であり、我々の記憶に新しいところである。

概要

その起源は古く紀元前600年頃、イオニア（ギリシア）の植民市として建設されたもので、ギリシア人はマッサリア、ローマ人はマッシリアと呼んでいた。

現在の旧港が物語るように当初から活発な商業活動を営み、東のニカイア（現ニース）モノイコス（現モナコ）、西のイベリア（現スペイン）などの植民市であつた。

ローマとは早くから同盟関係にあつたが、紀元前2世紀末には此の地方はローマの属州となり、前49年にはポンペイ（伊の南部）側についたために領土を失った。

中世に入るとサラセン（マホメットの建国したイスラム国家）、ノルマン（北方ゲルマン）の海上掠奪とイタリア諸都市との競争のため、9～10世紀頃には其の商業は沈滞したが、十字軍と共に再び繁栄した。

近世初めの新航路発見はイタリア諸都市と共に此の都市をも脅かしたが、仏の政治家コルベール（1619～83）の独占体系に支えられて東方貿易を独占し、10世紀から18世紀にかけてマルセーユ商人は東方の全都市に雄飛した。

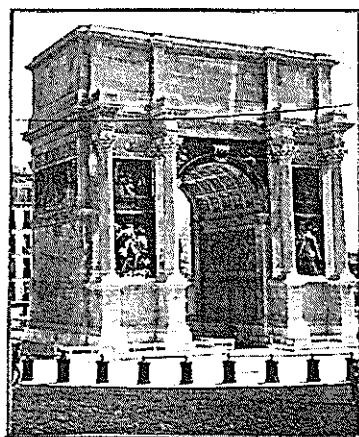
しかし19世紀の蒸気機関の発達、アルジェリア（北アフリカ）、スエズ運河の開発といった新事態は此の都市の近代化を要請して、今日の近代都市の形態となつた。同時に従来の仲介商業地としての機能から、海上貿易に密着した諸種の加工業、化学工業などの工業都市としての機能を帯びるに至った。

観光

未だ見ない未知の世界が眼に写つて自然の車窓風景に熱中していると、老いの短いことも忘れる虚心状態が続いていた。プロバンスから南下して漸くマルセーユに差し掛かり、グスド広場の凱旋門は疾風怒濤時代の名残をとどめて、磁石のように我々の眼を引き付けた。

旧港の万港船で埋まる岸壁には、屈強な若者達が喜色満面の微笑み浮かべて我々を歓迎し、恰も凱旋部隊を迎えるような意気揚々とした光景であつた。さぞかし少年十字軍を歓送した熱狂も此のようであつたかも知れない。（右の写真は凱旋門）

活気の溢れる港湾から眼を移すと沿岸一帯には高層ビルが所狭しと高さを競い、ヨットの帆柱が林立する遠くにはノートルダム（聖母の意）寺院の尖塔が天高く聳え、流石にフランス第二の100万都市の景観は、私の胸を躍らしていたのである。



入船もあれば出船もある港を眺めてバスは東に進んだ。旧港の南の高台に建つローマ風ビザンティン様式の教会の下で下車し、マルセイユの町を一望のもとに瞰下した。(右は市街図)

旧港を南北にはさむサンジャン要塞とサンニコラ要塞は、嘗て巖窟(いくさ船)を守った面影を残していたが、茜色の夕焼け空は無聊に変化して明視出来ない。誠に残念至極である。

私の胸中は何かを焦慮しているような感じを抱いていたが、翌朝の不慮の事故は神のみぞ知ること、運命の神のお告げだったかも知れない。(右は港風景)

子供の頃に聞いたペストは、1720年にアフリカからマルセイユに伝染して、数え切れない人命を奪った事が脳中に浮かんた。

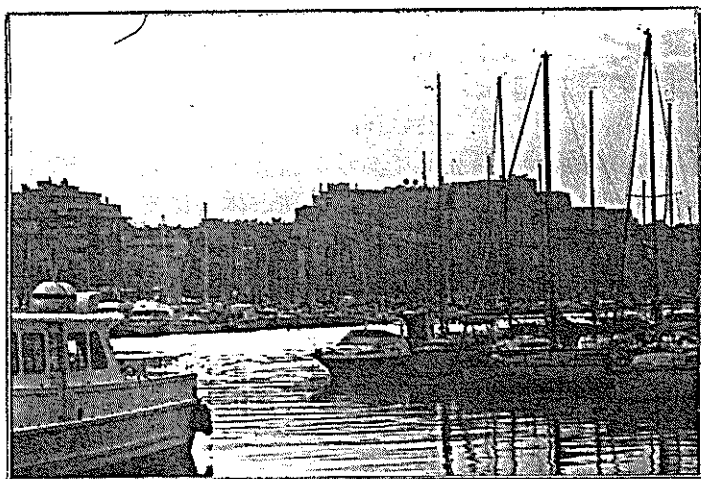
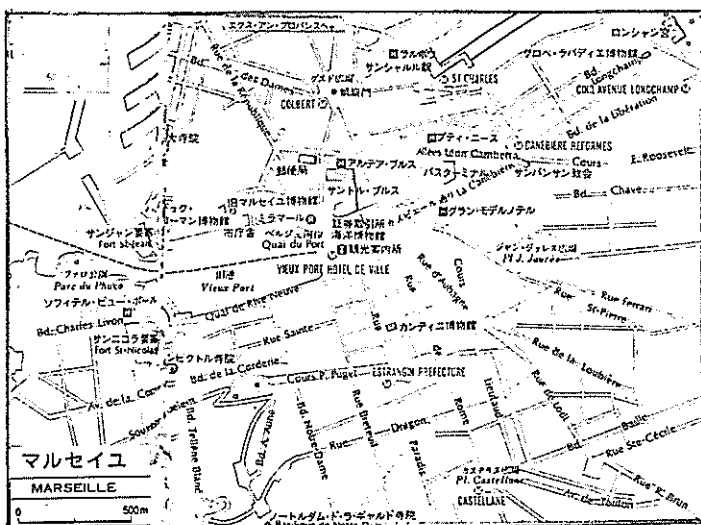
又、中学時代に覚えたフランス国歌も懐かしい想い出であり、命よりも名を惜しんだ青年期を回顧して、感懐は一入であった。

我が胸に深く刻まれていたマルセイユに愛着を感じないものではなく、時間の不足を嘆きながら、吸い込まれるようにノートルダム・ド・ラ・ギャルド寺院へと登った。

13世紀の初めに建立された礼拝堂を大寺院として再建した教会は、薄暮に白く輝いて我れらの昇天を確約するかのようで、見上げる尖塔のマリア像は下界をに向かって手を上げていた。(次頁の写真)

ご内陣の正面にもまたマリア像が安置され、其の横にキリストの刑死の像が横たわり、大理石に聖書の一文が刻まれていた。信心と歓喜と感謝の思いを込めて、己を忘れて心を鎮め、敬虔な祈りを捧げて礼拝する信者の姿は天使のようで、異教徒の我々にまで崇神の念を湧き立てていた。

ギャルド寺院の薄暗くなつた高台を降りて市街に入り、右折左折を繰り返して煌々としたカヌビエール大通りに出た。マルセイユ自慢の繁華街はクリスマス用の人形を飾った露天商が並び、喧騒と絢爛の大通りはクリスマスの雰囲気盛り上げ、股賑を極める渦の中に巻き込まれるようにして通過した。



歴史的な魅力を感じる街に心が逸るばかりで、夜の帳りは視線を遮って眼に映らず、切歯扼腕して深い落胆を覚えている時、バスはロンシャン宮殿前で停車した。

ライトに照らされた半円形の宮殿はルネサンス様式の華美豪壮な姿を現わし、昼間であればと齒痒い思いで眺めていた。(前頁の右上角)

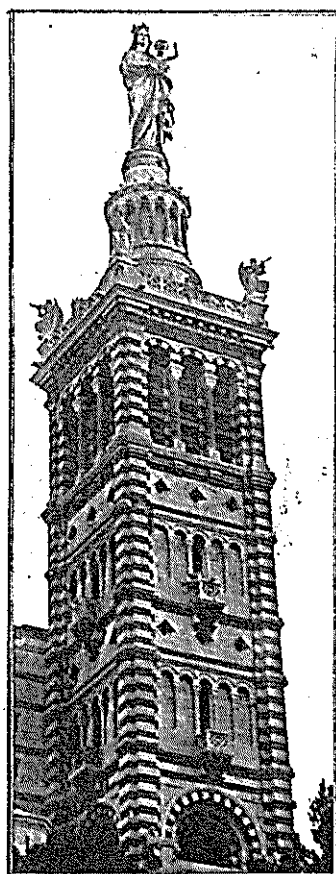
現在、宮殿の中央は美術館、右側は水族館、左側は学校として使用され、前庭の池を囲んだ宮殿はレニングラードのピョートル宮殿のようで、黄金色に輝く中に隆盛を極めた栄耀栄華の跡を留めている。

如何せん夜景は我々に満足を与えず、格安ツアーの嘆きを此処でも味わいながら口惜しい思いで立ち去ったのである。

再び目映いカヌビエール大通りを走ってホテル・アルテア・フランテルに到着し、旅装を解くことになった。しかし、未練の残る街は我々を誘い出し、夕食前の一時を惜しんでカヌビエール銀座へと繰り出させた。

奇声を上げ労働歌を叫ぶ群衆は横断幕を広げてスト行進し、警官がこれを見守る光景は何処も同じく市民は傍観的な態度である。恐らく我等を港で歓迎した一団であつたかも知れない。

きらびやかな人形を陳列した露天を覗きながら、旅の武器は笑顔と挨拶だと童心に返り、浮かれ気分で一巡して、胸騒ぎしていたマルセーユの観光は終わりを告げた。



12月1日(木)

曇り

交通事故に遭遇・入院

ホテル出発は7、15と昨夜告げられていた。昨日のマルセーユの観光では満足する写真は撮れず、憧れの地を懐古するためには絵葉書に期待する外はなかつた。7時前にホテルを出て50mほど先の露天商で尋ねると、ホテルの売店にもなかつた絵葉書売っていた。

これ幸いと10枚ばかり購入し、道路の信号が青になつて横断歩道を渡った途端、暴走して来たオートバイが私を撥ね飛ばしたのである。横転して引っ繰り返つたが意識は明瞭で、夜明け前の暗闇では頭の出血にも気が付かず、左脚の激痛をこらえて早くバスに乗車したい一心から、急いでホテルに向かった。

血相を変えた少年は私のコートを引っ張つて放さない。事故時は現場に留まって実地検証するのは万国共通だからだ。大した怪我ではないと判断した私は、彼の手を振り切ろうとしたが依然として放さない。言葉の通じない事は如何ともし難しである。

漸く振り切り無我夢中でホテルに着いて始めて、コートが真っ赤に染まっていることに気付いたが、激戦場を潜り抜いた私は血には驚かない。一刻も早くツアーの人達

と共に出発することしか頭にない。添乗員やガイド嬢それに友人の小中君が駆けつけて、血の付いたコートや上着を脱がし、救急隊員が急行して来て応急処置をしてくれた。17歳の少年は素早く通報したのであろう。

応急手当が済んで救急隊員に感謝の手を差し伸べ、謝意を表わしてバスに乗車した。心配してくれたツアーの人達にもお詫びの言葉を述べ、郊外の病院に運ばれることになったが、左頭部に裂傷を受けていることも知らず、簡単な治療を済ませて同行できるものと思い続けていた。

14階建ての大病院では直ちに手術台車に乗せられて治療室に運ばれ、頭部のレントゲン撮影から各種の検査が次々と手回し良く行われ、左頭部の裂傷を縫い終わった時に、ガイドの衛藤洋子嬢から入院だと伝えられた。

何のこれ式に入院させるとはと、憤懣やる方なしの胸中だったが、フランスの法律では交通事故の場合、一日の入院を義務付けていると知らされ、不甲斐無いことだが万事休すであであった。

私の治療の終わるのを病院前で待機していたバス、2時間もの長い間、待ち焦がれていたツアーの人達に申し訳なく、入院が決定して出発したと聞かされて安堵の胸を撫で下ろした。衷心からお詫びを申し上げたい。

衛藤嬢と小中君は私の負傷を案じて付き添いを続けて頂いたことは、地獄に仏のようで御礼の言葉もなく、唯々心から感謝するばかりである。なお小中君はヨーロッパ旅行は初回のことパリを知らず、是が非でも一行と共にパリ観光をと治療台で念じていたところ、衛藤嬢の計いで彼はタクシを飛ばしてアビニヨンへ発ち、ツアーと合流する手筈だと知って、肩の重荷が一つ解かれた思いであつた。

忘年の交わりというべきか、年齢の差を抜きにして親交を頂いた彼に、重ねて満腔の感謝を捧げる次第である。

組上に載せられたような私は、早朝の8時から検査と治療に引っ張り廻され、手術台から病室の寝台に移されたのは3時であつた。負傷直後の痛みは時間の経過と共に激しさを増し、左脚の打撲（帰国後の検査で腓骨にヒビがあることが判明）は身動き一つ許さず、失望落胆のどん底に陥った心境である。

観光の日程は明日で終了の予定だったが、「磯際で舟を破る」というべきか、終わる直前で夢が破れて、寂しく眼底に去来するのはアルルとアビニヨン観光で、不運な身を寝台に釘付けされていた。

言葉の通じない看護婦は度繁く見回り、点滴の落下する水滴は「諦めは心の養生」だと言いつけているようで、遂に「怪我は快樂の利息」だと諦めの悟りを開いたのである。

二人部屋のアラブ人は病室内に拘らず旨そうにタバコを吹かし、病人でありながら人間の欲望は制し難く、鞭打症の心配のある硬直した頸椎の痛みをこらえて吸つてみた。昼食抜きの空腹から、ぼんやりと夢を見るようだが少しも旨くはない。矢張り幸福は先ず健康だと恨めしくなるばかりのであつた。

簡単なパックに入った夕食は満腹感を与えず、明日は明日の風が吹くと独りで慰めながら、安眠は最上の療法だと眠りに入った。不思議なことに恨み骨髓というべき少年に対しては、満月でも雲のかかる事があるのと同じく、これを機会に注意を怠らないようにと、当初から許してやりたい心から何らの恨みが湧かないのであつた。

12月2日 (金) 曇り 退院

入院時の恥も外聞もない着の身着のままの姿で就寝し、目を覚ますと我ながら呆れていた。鞭打症を経験していた私にとっては左脚の打撲症よりも頸椎の方が心配で、早速自己診断をして痛みの具合を調べた。

らっきよの皮を剥いたような白人の美人看護婦が、昨日渡してくれた消炎剤の効果顕面、激痛は幾分なりとも和らいでいた。フランスの医療は先進国で程度が高く、マルセーユの大病院に入院したことは不幸中の幸いであつたようだ。(入院した病院)

隣のアラブ人は鞭打症の身でありながら、年老いた私の病を心配して親切に世話をしてくれ、私心のない清らかな心に辞を低くして謝意を述べたい。人種は違っても矢張り人は木石に非らず、人間の性は善であると改めて理解したのであつた。

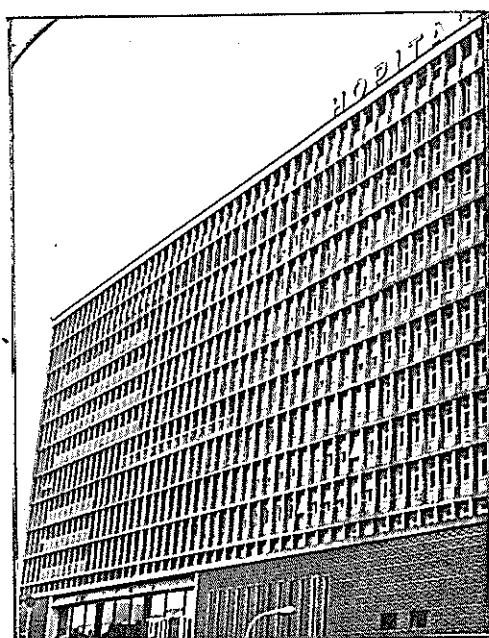
生気のない病院の雰囲気から一刻も早く抜け出したい心は患者の心理で、遠い異境の地では尚更のことだ。朝の検温に渡された体温計は37.6°を示していたが、私の脳神経は無意識に作用して体温計を36°に下げ、何喰わぬ顔をして看護婦に渡した。最上の計は計なきことだと言われているが、退院を熱望する私の第一弾は成功したのである。

待ち受けていた担当医師の出勤を嗅ぎ付けると、脚や頸椎の痛みをこらえて彼の部屋に出向き、昨日の御礼を述べて体調はペリグッドだと第二弾を放った。我々の運・不運は自らが作り出すものであり、これを運というのだと淡々として結果を待った。

負傷して以来、手廻し良く親切に世話をしてくれた衛藤嬢は10時に姿を見せ、私の意を医師に伝えてくれるように折衝を懇願した。ニースから添乗した彼女にはガイドの任務があり、私一人の為にマルセーユに滞在することにも気が咎めていた。

已むに已まれぬ一心が功を奏したのか、ガイド嬢から退院の許可が下りたと告げられ、心中は欣喜雀躍の胸騒ぎと云いたいほどであった。僅か一日の入院過ぎない異国での体験は、数々の深い思い出を残してくれ、NORD病院の医師、看護婦を始め、同室のアラブ人に満腔の御礼を申し述べたい。星の数ほどある人間世界で、本当に袖をすり合わせるのも多少の縁であろう。

70年に近い人生を回顧する時、戦場に於ては3回に及ぶ負傷から九死に一生を得、危機一発の今回の事故でも亦、死から免れたことを思うと、我が生命の貸借対照表には未だプラスが残っていたのだ。それだけ私という人間の執念の強さを示しているのかも知れない。



新幹線〜パリ

12時に病院を後にして衛藤嬢と共に駅へとタクシーを飛ばした。フランス第2の都市に相応しい駅舎はギリシア神殿風の建物で、三角屋根は美麗壮大にして、構内には3条のエスカレータが設けられ、塵一つない清潔さである。流石に観光地の玄関口らしい。

痒い所まで手の届くような御世話を頂いた衛藤嬢と、御礼の意を兼ねて食事を共にし、帰国後に改めて御礼をすると申し述べたが、最後まで労りの心を尽くしてくれた。

彼女は13・53発の車内まで荷物を運び、尚且つ列車が動くまでホームで手を振って見送ってくれた。

芙蓉のような彼女の心は言葉では言い尽くせず、その恩は金石珠玉よりも尊く、旅の真髓に接したようで涙は私の胸を潤していた。有難うの言葉あるのみだ。

敗者復活のような感じで車中の人となり、一人寂しく移り行く車窓を眺めると、鶏肋的な我が身の一喜一憂の旅を想起して深い思いに耽るのであった。

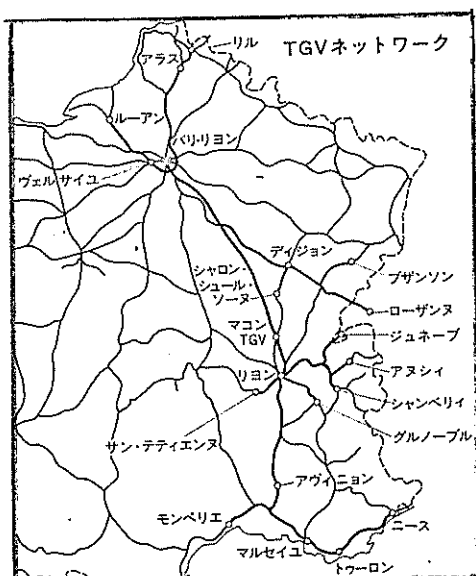
世界最高の時速270kmのスピードを誇るTGV（新幹線）は客足は少なく閑古鳥が鳴く状態で、マルセイユ〜パリ間の870kmは私一人の6時間の旅となつた。（上は新幹線の路線と車両）

日本の約1.5倍の国土に日本の半分程度の人口しかないフランスは約8割が平地で、沿線は沃野と丘陵地ばかりが蜿蜒と拡がって、田園風景が断続的に後ろに飛んで行くような感じだ。我が国の美しい紅葉も見えず少々殺風景な景観である。

どんよりとした中に展開して来る集落には、陰謀と裏切り、暗殺と虐殺、宗教戦争や革命などの歴史が秘められて、列車のスピードに慣れた私にも歴史の速さを知るのであった。一人旅の寂しさは独りでに感傷的になるのであろう。

車両の内外とも明るさや躍動感が少なく、設備の点に於ても断然日本の方が優っており、私の記憶に刻まれたものはリヨン附近の原子力発電所だけで、冬の日短くて早や太陽は西山に沈み、一瞬の楽しさも味わずに夜の帳りが下りて行った。

長芋で足を突いたような予想外の事故も身から出た錆と諦めたものの、旅は道連れ世は情けの言葉の通り、崩れるような虚脱感の虜になるばかりで、漸く19時にパリ・リヨン駅に到着し、孤独の旅に終止符を打ったのである。衛藤嬢が連絡していたお陰で出迎えの人が車中まで足を運び、私の手を取り荷物までも運んでくれてワゴン車に乗車した。微に入り細に入る処置に唯感謝あるのみである。



華のバリの煌々と輝く雑踏の中を走り、私の脳裏を刺激するものは思い出の深いものばかりだ。セーヌ川を渡って右手には懐かしいノートルダム寺院が網膜に映り、ルーブル美術館からコンコルド広場のオペリスクが其の威容を照らしていた。セーヌの遊覧船の光が移動して流れを彩り、左手のエッフェル塔が超然と聳え、のんびりと街を散策した過去も既に15年を経過した。「花は嵐に人は別れ」とままならぬのは憂世の常で、時の速さは光陰矢の如しである。

車は西へ西へと進んで漸くソフィテル・ホテルに病身の旅装を解くことが出来た。間髪を入れず、小中氏に出迎られて会食場に案内されたが、一期一会の出会いのように心に波が立つ思い出であつた。

「衣は新に如くは莫く、人は故（古）に如くは莫し」の諺の通り、心腹の友の有難さをこれほど痛切に感じた事はなく、又、旅行中に親交を深くした人のご厚情にも限りない愛別離苦の感が込み上げたのである。

「アルル」及び「アビニオン」への万里の夢は成らなかつたが、是に知り得た歴史を簡単に記述して慰めとする。

「アルル」

アルルの黄金時代はローマ時代に始まる。

ローマの名門カエサル（英語シーザー）はガリア（現在のフランス、ベルギー、スイス、北イタリア）征服の時にここで舟を造らせ、マルセーユが陥落するとアルルに養老兵の植民地を作った。

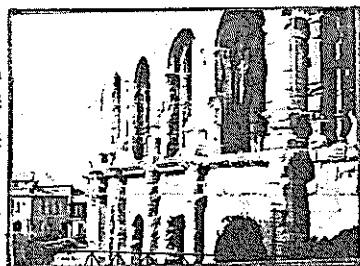
発展はマルセーユとの通商から始まり、やがて国際的な大商業の中心地に飛躍した。当時は海に通じる潟湖に臨み、ローヌ川と地中海の船舶が商品を積換える場所となり陸上交通の要衝であつた。

5世紀前後にはオリエント（地中海東方）、アフリカなどから多種多様な産物が集り、劇場、闘牛場（上の写真）、ローマ浴場、水道等が勢揃いしたのは此の時代で、西洋で最も美しい都市としてガリアのローマと呼ばれた。

4世紀にはガリアの首都となり、大司教が置かれて公会議の開催地となつた。

8～13世紀には南仏諸王国の首都であり、中世を通じて商港都市として栄えた。しかしローヌ川の河口は次第に土砂で埋められ、アルルは海の商船から見放されて、16世紀頃からマルセーユに繁栄を譲った。

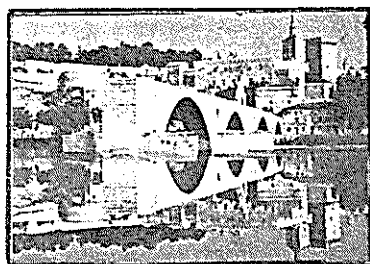
7世紀創建のサン・トロフィーム聖堂を始め古代・中世の遺跡に富み、ビゼー（1838～75、作曲家）の「アルルの女」（ドレーテ劇曲）は有名である。



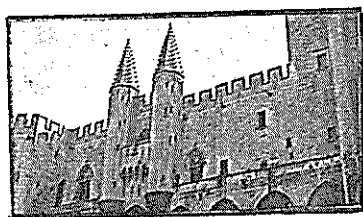
「アビニオン」

ローマ時代はアルル、ニーム等に比較して振わなかつたが、12世紀にサン・ベネゼ橋（右の写真）が造られてからイタリア～スペインに至る通路となり、商業都市として栄える運命が開けた。アビニオン橋は「輪になつて踊ろう」の歌詞で有名だ。

1309～78の間、ローマ教皇庁が此の地に移転



し（右は法王庁宮殿）、仏王の勢力下に権力を失墜した時期をアビニヨン幽囚と云う。別名を教皇のバビロン捕囚とも云う。教皇とはカトリック教会の首長で、地上に於けるキリストの代理であり、ローマ司教ペトロの後継者とされている。



1309年、教皇のクレメンス5世がアビニヨンに移されてから約70年の間、代々の教皇の居住地となり、約10万に及ぶ市民をもつて贅沢品の産業を盛んにし、農村の繁栄をもたらした。

教皇の宮殿や城砦、川原石で舗装した狭い道路に沿った僧院は、当時の栄華の面影を伝えているという。

12月3日～4日（土・日）

晴

帰国の途

今次旅行に錠がおろされて、12・20パリ発の大韓航空902便に搭乗し、多くの想い出を残して一路帰国の途に就き、帰国できる喜びに安堵の胸を撫で下ろした。又、心に深く記録して忘却できないことは万語に尽きないが、過ぎ去つてしまえば炊の夢のようで、陳腐な言葉だが「上り大名下り乞食」の感じもしていたのである。

ロバが旅に出たところで馬になつて帰る訳はないが、今度ばかりは馬がロバになつて帰るようで、窮屈な座席の中で痛みをこらえて茫然の態であつた。しかし時間の経過につれて胸を搔きむしる思いの事故も、運は定まれるもの喜憂と苦悩はつきもの、女々しく後悔するなど心は和らいで来た。

北極圏一帯の白銀の世界は永遠の芸術美を展開して、浮き世は心次第で楽しくもなり苦しくもなるのだと、偉大な心霊の表現のように見えていた。幾回となく眺めた此の景観は痛みを忘れて感傷的に陥らせ、地上唯一の清らかなものに見惚れているうちに、アンカレジ空港に着陸した。

給油が終わって座席に引き返すと、制服を着用した男性乗務員とスチワーデスは隣座席の人達を何処かに移動させ、四つの席を私に提供して寝かせてくれたのである。愚痴一つ云えずに痛みを悩んでいる時、思わぬ助けを受けた其の喜びは言い表すことは出来ず、地獄で仏の後光を仰いだようであつた。

添乗員が気を利かしたのか、それともツアーの誰かが依頼したのか、或は乗務員が私の生々しい傷を見ての処置だったのか不明だが、歓感極まって御礼の言葉もなく、深く心に銘記して銘肌鏤骨という感謝の気持で一杯であつた。

何よりも優る恩恵を受けて佳境に身を置くように眠りに就き、鵬程万里の旅は打ち止めを迎えて、4日16・10にソウル空港に着陸、乗換便で大阪空港到着は午後の8時であつた。

此の世の中で多く語られて来た善意は富貴に勝り、仏説の蓮華の上に生きた感懷を噛み締めて、感謝感激しながら空港前のホテルで一泊し、翌5日に愁眉を開いて帰宅できたのであつた。是に御世話になつた人々に深甚の御礼を述べる次第である。

あとがき

高齢化社会と言われる今日、私のような草芥な人間にとっては気力だけが財産である。体力の衰えが加速するにつれて益々遠遊遍歴の病いが高じ、怠惰な幸せを求めて浮き世を忘れる旅姿は、奔走に生きる人間と云うのであろう。

幻想を持っていること自体は素晴らしいことだと小理屈をこね、この道しか我れを生かす道なしと常に吾が脳細胞を刺激していた。

未知の世界に魅せられて新しい活力を養い、官能と想像の喜びを探り、時勢を洞察する眼を養う時に、蓮の実が飛び出すような気力が湧出してくる。

スイスの永世中立は一朝にして成立したものではなく、天を衝く勢いのマッタ・ホルンは、此の世で最も強い人間は孤独だと教えていた。「命を^{いのち}知れば亦何を憂えん」と諦観の心に接したようで、静止する美は自然流の生き方の見本のようにあつた。

合従連衡の陣痛の中に生まれた北イタリア・ルネサンスは人生の視野を広めて、美は忿怒の情を和らげ、太陽が花を彩るように芸術は様々な色に人生を飾っていた。特に芸術は長く生命は短しと暗示して、暗中模索の中に美しく老いて行くには如何すればよいかと、問題を提起していた。

飄々然とした旅であつても旅は一つの芸術である。絵画のように詩のように旅を綴り、その豊かな感性から旅の真髄を会得するのは芸術だと、無理に理屈を付けていたのである。

南仏のコート・ダジュールの一生遊行といった世捨人の環境は、我が意を得たりと生命の火を俄然再点火させていた。得手勝手な晩年の迷いから出た老いの繰り言は、年寄りの冷水かも知れない。

落穂期を迎えた人生に於て旅は未来への跳躍台にはならないが、全国各地の歴史から得た知識は天に飛翔する翼のような感がある。歴史と現実を月にたとえると、満月に似た此の世も暗い雲のかかる事は防げず、波長の長い歴史と波長の短い人生の生き方を知るのである。

この世は一刻として止まることを知らず、時間は我々の都合におかまいなく過ぎ去って行く。否、時間が過ぎ去って行くのではなく、我々が過ぎ去っていくのである。時間ほど権力を持ったものはないのだ。

欲望を持つことが少ないほど幸福だと古来から言われているが、非常に間違った真理ではないだろうか。人生は尻尾のようなもので、如何に長いかでなく如何に良いかが大切なのである。

知りたがる心を扇動する旅路の魅力は途中下車を許さず、常に命が燃え尽きようとしている中に、生き甲斐のある余生を楽しみ、平凡な世界人を夢みたいと思う。

今回も片鱗を垣間見たに過ぎないが、書くことによつて全体を考え、全体を考えることによつて世界を眺める習性を養いたい。そして拙文ながら背後に何のような人生観が存在したかと、後日の再読の楽しみにしたいと綴ってみた。

昭和63年12月

石川県加賀市山代温泉神明町7の3

寺 前 信 次

